

研 究 紀 要

第 13 集

大和の造型	吉 沢 栄 敏	1
高校における変換を軸とした図形の指導について(その3)	数 学 科	13
理科に於ける中学校・高等学校一貫学習指導計画の試案	理 科	21
質問法による考案設計学習の試み	上 浦 一 道	39
レクリエーション(生活とレクリエーション)	高 木 信 明	47
進路状況の報告	進 路 課	55
高村光太郎ノート その七 高村光太郎と永井荷風と(Ⅰ)	井 田 康 子	1

1 9 7 1

奈良女子大学文学部
附属中学校・高等学校

大和の造型

吉 沢 栄 敏

倭は 国のまほろば たゝなづく 背垣
山ごもれる やまとし うるはし (倭建命)

(一)

この大和の美しさは、たゞにその風光の美しさのみでなく、そこに生まれ生きた人々の遺した造型にも我々は見ることが出来る。こゝで自分は、この奈良で出土した、縄文時代の土偶や、その後の埴輪などについて、考えてみようと思う。

この奈良県出土の土偶や埴輪は、まさに、日本的造型の源泉であり、そこに示された美的感覚はその本流をなすものであると自分は信じるが、これらは、今まで、日本美術史を考える上にとり上げられること少なく、その量によって、東日本の土偶や埴輪が恰も、日本上古の造型感覚の本流であるかの如き評価がなされて来たことは、この奈良県出土の土偶や埴輪の美しさを知る自分には、義憤すら感じさせるものであった。

こゝに、それらのいくつかを紹介し、その正当な評価が与えられることを希うものであるが、そのことは同時に、日本美術の伝統と創造という大きな問題にも迫るものである。

現代美術の世界的傾向は、あのヘレニズムを想わせるが、ヘレニズムは物質文化を向上しこそすれ、芸術文化にとってはまさに臨終にも等しい。芸術が普遍性、世界性をもって歴史に残っているのは、その民族性に徹した姿に於いてであることは、ギリシャを見、エジプトを見れば判る。パッハはあくまでドイツ的であり、ヴィヴァルディはあくまでイタリア的である。亦、この民族性が不変性をもつものであることも、アルタミラとピカソを見、ラスコーとマチスを見れば明らかである。前者の逞しく弾猛な血は一万年を隔てて、ピカソに流れ、後者の華やかでリリカルな感覚はマチスに引継がれている。

近時、日本に於ける非日本的傾向は、歴史上、いくたびか経験して来たことではあるが己れ自身を見失ってはいないだろうか。

己れをふりかえって見るとき、それが単なる国粹主義に陥ったり、又、元祿期の如く、鎖国的窮乏気の中で醸し出される女性的なものに終らず、この動乱の渦中で、真に古代大和的な、或は光悦的なものを再認識する所から発することが必要と思われる。

(二)

こゝにとり上げる奈良県出土の土偶とは、紀元二千六百年記念として大和三山の一、畝傍山の東麓に位置する橿原神宮外苑の整備拡張工事に併行して行われた調査(橿原考古学研究所長・末永雅雄氏のもとに昭和13年から同16年の間に行われたもの)により発掘された縄文時代晩期に属するものである。

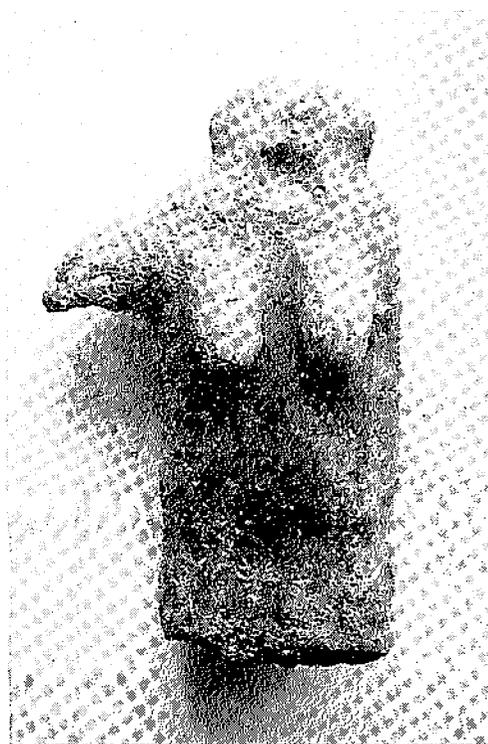


山形県 最上郡釜淵遺跡出土

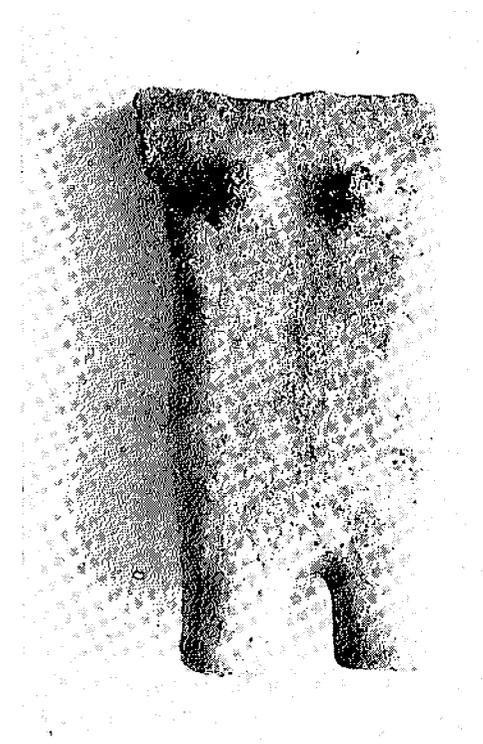


榎原土偶

1.



2.



3.



4.



5.

その出土は約100点にのぼり、トルソとして見られるもの20点余を数える。大きさは、高さ略10cm前後で、全高20cm位と思われるものは2,3点である。その形は典型的でなく、個性をもったものであり、造りは中空のもの僅か2点、他はすべて中実(所謂ムク)のものであるが、珍しい特徴を示すものに、喉部から股間へ貫通する消化管を表わしたと思われる孔があいたものが2点ある。他に、この孔が喉部に1.5cm位の深さにあけられたもの1点、胸部から下腹部へかけて細い溝状に—所謂ライフ・ラインと思われるものを表わしたもの1点が知られる。その焼上がりの肌合いは、伴出した土器と同様、石英砂粒などを含み、亀ヶ岡式土器・土偶などに見られる、すり磨いた油っこいものちがいが、さわやかな温かいもので、古信楽焼に通じた味わいをもつ。

これら榎原土偶に見られる感覚は、まさに、「明き、直き心」を表わした、すがすがしく明快なものである。

その感覚は、東日本出土の土偶がもつ複雑怪奇な、濃厚なそれとは異質のものである。それは、あの伊勢神宮の白木の柱に、或は、茶室や桂離宮に見られる明るく簡潔で清浄なものであり、東北土偶に見られるものは、中尊寺金色堂に、或は日光東照宮に見られる、いやらしいまでの繁縷さである。

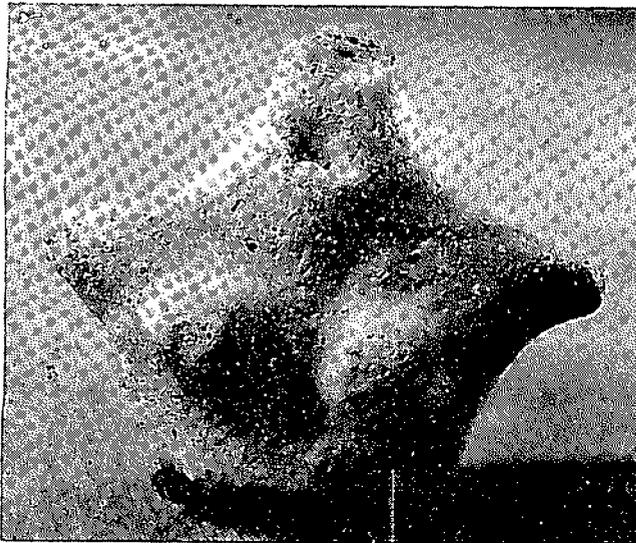
この東北日本縄文的な感覚は、殷周に代表される中国的なものに近い。殷周銅器と我銅鐸との相異は、漢字に対する、ひらかなのちがいが、中国絵画に対する大和絵のちがいである。同じ東洋に於ける中国と日本とのちがいは、焼物や料理などに対する好みを見ても明らかであるが、仏教伝来後一時潜在した日本の感覚が白鳳・天平に至って顕現したものを見てもうなづけよう。たゞこの日本的な感覚が仏像に於て定朝がなしたように平明な定型化したものとなったのは、時代の鎖国的な女性的な性格の責任かも知れぬ。

所で、この東西日本の文化的フォッサマグナは、方言・民俗などにも見られるというが、すでに旧石器の製作に、瀬戸内技法と石刃技法との文化圏の対立があったという。この東日本の感覚が、日本美術の本流になるとは自分は考えない。考えるものがあるとするれば、それは、東京遷都によって来る幻想である。後述のように、埴輪を東日本が受け入れた時のような、或は大和絵的なものが浮世絵的なものになった時のような、ひ弱な、病的なものは、この榎原土偶には見られない。

一点興味ある土偶の破片が榎原から出た。それは、明らかに亀ヶ岡式土偶を模したと思われる肩腕部である。復原像高約22cm位のものゝ一部であるが、そこに表わされた模様は土器と同様、実に淡白なものである。榎原人が当時、進んだ(?)東日本の土器や土偶を手に行っている様を想うのは愉快である。しかし彼らは、後の東日本人が埴輪を作った時の姿勢とちがって、自分の造型を平然と堂々と造って行った。

(三)

この榎原土偶に見られる単純、明快な感覚は、西日本から出土する土偶に共通したものである。そのいくつかを例に上げるが、そこに共通して見られる感覚は大和的なもので、この造型感覚が後の埴輪を生むことは後述するとうりである。



(1) 東大阪市箱殿町鬼塚出土の
胸像

これは、図に見られるとうり一部欠けているが、頭部も単に山型に盛上げ、喉部に消化管の一部と思われる凹みをつけている。腕は恐らくこのまゝのもので、胸部も強い形を示している。腹部以下を失っているのは惜しまれるが、榎原土偶のそれに近いものであったろう。この土偶は実にアカぬけのした感覚をもち、肌合いも榎原土偶に似ている。

同じ東大阪市横小路町馬場川から腹部以下のものが出土しているが、誠に強靱な構成力を示している。

(2) 愛知県一宮市馬見塚出土の胴部

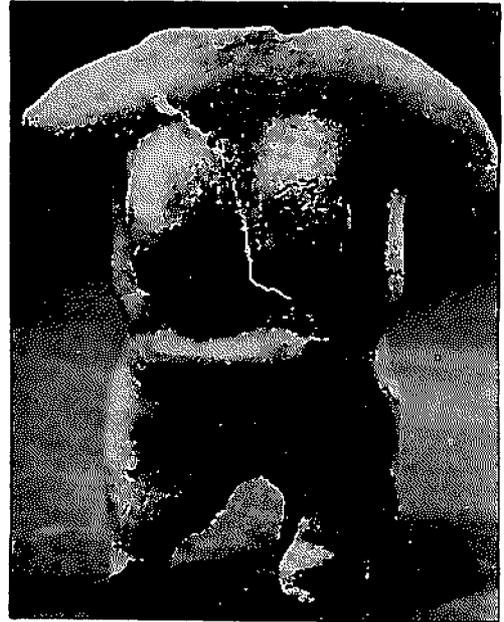
出土時、多少洗すぎた感じはあるが、この白く輝くような肌合いは、後世この地の近くで焼かれた、正に日本的な焼物「志野」を思わせるものである。

頭部四肢を欠くが、恐らく榎原土偶のそれに近いものであろう。

この馬見塚出土のもの、同じ愛知県で知多郡南知多町天神山から出土した早期の土偶も同様のすっきりした感覚と構成力を示している。



(2)



(3)

(3) 宮崎県西臼杵郡高千穂町陣内出土

頭部を欠くのは惜しいが、全体にカッチリと焼上がり、近畿一円のものに比べると野趣があるが、同系の造型感覚をもつものである。

九州からは、他に熊本、大分などから多くの出土を見るが、それらも、大和的な感覚の地方的な表われと見られるものである。

その他、岡山県倉敷市福田貝塚出土の胸像、同県笠岡市大島津雲貝塚出土の顔など興味あるものである。広島、香川からも出土している。

この西日本出土の土偶に共通する榑原土偶的な単純明快な造型感覚は、東北日本出土のそれと明らかに異質のものである。それは何によって来たか。自分は民族的な違いを考えている。

土偶の怪奇さを云うとき、人は非情な自然との斗い、或は祈りから来ると言うが、当時東日本は現在より温暖であり、又、山内清男氏の所謂「鮭鱒論」によれば、西日本より生活は安定していたと思われる。

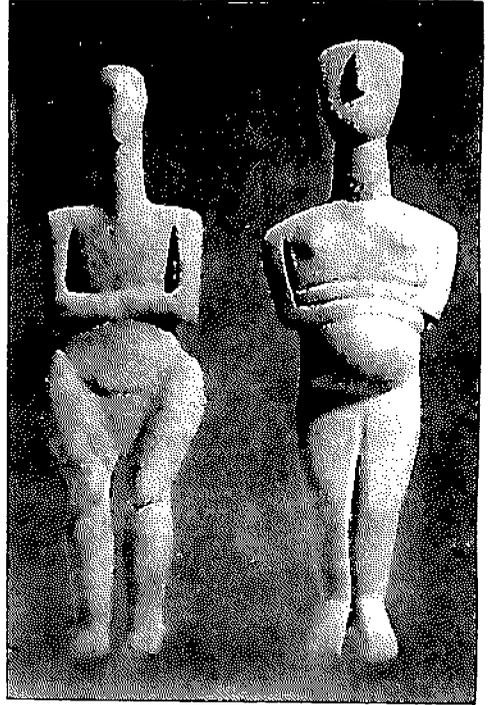
西日本縄文人は、自然を非情なもの、対峙するものとして見なかった。そこには、古神道の生まれる必然性があった。

(四)

この榑原土偶のもつ日本的な感覚は、フランスのドルドーニュ・ローセル出土の「角杯をもつ女のレリーフと比較した時、明瞭である。このレリーフはまさに西洋的な人間くさい写実的成型感覚の源泉である。人体のその客観的な、対物的な見方、肉体の謳歌と現世的な人間中心的世界観が



ローセル・レリーフ



キクラデス・イドル

そこにある。榎原土偶はあくまで自然と融和する人間像であり、主客融合の情的把握がそこにある。この両者のちがいは、その後の美術史の流れから見ても明らかである。

たゞ、ヨーロッパの数ある偶像の中で、特異な性格をもつものは、キクラデスの石偶(イドル)とクレタ島・クノッソス宮殿中庭の新石器時代層出土のテラコッタ像である。

多くの「ヴィナス」は、フランスのレスピュージュ出土の所謂リドーのヴィナスの洗練された感覚、オーストリアのヴィレンドルフ出土のものの野暮な感じ、チェコのヴィネストニツェ出土の油っこい野性味、イタリアの構築的な感覚といった民族的なちがいはあっても、いずれも、実に人間くさい、肉塊的な雰囲気をもつが、この、キクラデスやクレタ島のものは、即物的というよりは象徴的であり、清澄な明るさをもっている。その感覚に榎原土偶との共通性が見られるのは興味深い。

自分はこの榎原土偶のもつ、又日本美術のもつ特性の中に、このキクラデスに発するギリシア、イタリア的なラテン的性格を見るものである。

ギリシア・アルカイックの彫刻が、この榎原土偶に通じる感覚を示し、パルテノンの端正な美しさが、伊勢神宮の清澄な美しさに通じること、又絵画に於ても、ギリシア美術の曙、幾何学様式時代のディピュロンの人物が、我銅鐸に描かれた人物に似ていることを上げてよからうし、——これが単に原始的であるから共通するといったものでないことは、アフリカ、オセニアなど他の原始絵画の例を見れば判る——、イタリア・ルネッサンスのフラ・アンジェリコ、ピエロ・デラ・フランチェスカ、等々などが日本的な美しさに通じるものがあることはよく知られる。

あの宗達下絵の光悦の歌巻が展示された時それを追って見る自分の耳に、ヴィヴァルディの「四季」が輝かしく響いたのを思い起す。けだし、この日本美術のラテン的性格は、海と太陽の賜物か

も知れぬ。

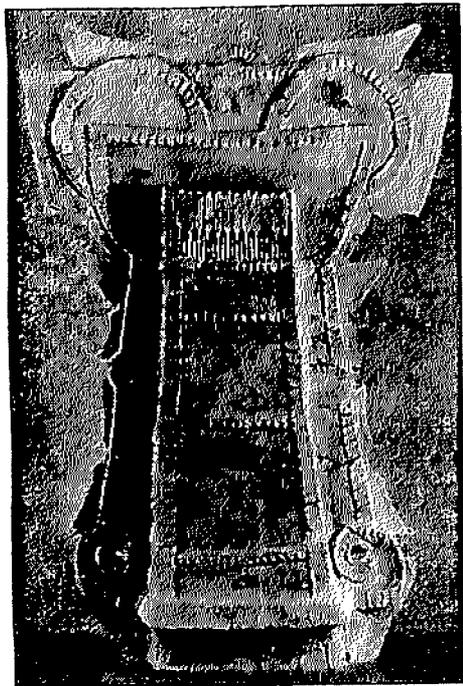
(五)

近畿の埴輪は、その出土した数に於いて関東のそれに劣るが、関東の埴輪で、近畿、就中奈良県出土の埴輪に質に於て優るものは、一点もないといっても過言ではない。

関東の埴輪は確かに面白く、愛すべきもので、民俗的資料としては優れているかも知れぬ。しかしそれらは総じて、表面的・形式的であり、冷やかな弱い肌合いをもっていて、大和の埴輪の大きな明るい、彫塑的な密度のある本格的なものは少ない。この大和の埴輪が、前述の橿原土偶の造型感覚から来ていることは明らかである。

従来、埴輪に対してなされた評価は、一つは、その素朴なプリミティヴィズムへの郷愁に似たもの、他の一つは、そこに殉死的な、権力への恭順の姿勢と卑屈な限射しを見る、共に感傷的なものであり、埴輪そのものを直視しないものであった。

こゝで、奈良県出土の埴輪を中心に、関東埴輪との相異点などを、埴輪そのもの、彫塑的な評価を通して見て行きたい。



(1) 劔(ゆぎ)

御所市室、宮山古墳出土

この古墳は、奈良盆地の南端に位置する全長約240mの盛期の前方後円墳で、後円部に堅穴式石室が二つあり、調査された一方の石室には、堂々たる長持形組合式石棺が置かれてあった。石室内の出土品も立派であるが、この古墳のすばらしさは、その石室を覆う封土上に、長方形に二重に形象埴輪が樹立していたことである。こゝに上げた劔形埴輪は高さ140cmをこえるもので、その他、楕形、甲冑形、草蓑形、冢形など大型の実にみごとな埴輪群が出土している。自分はこの内のいくつかを復原、修理したが、この埴輪群の力強い造型と迫力、かっちりとした焼上がりは、日本一といってよいものである。関東の埴輪が赤味を帯びた植木鉢のような焼きであるのに対し、言いようのないほのかな朱色を含んだ美しい肌合いで、焼物の土でこれ以上の美しいものはない。これを復原した時の手にした埴輪断片

の暖かさと重量感は忘れられないものである。

この劔の矢を入れてある長方形の部分には四区画に直弧文が線彫りされている。上から三段目は左半分が失われているが、自分はそれが、すぐその上の区画の直弧文の裏返されたものであることに気が付き彫り込んでおいた。

この美しい直弧文については不明なこと多く、詳述できないが、直線と曲線という基本的な線の組合せでこれ程不思議な美しさをもつものはなく、古代ギリシアの文様でも、これに優るものはない。しかもこれが、レリーフ状の文様から出ていることは誠に興味あるものである。こゝでは、そ

の良き例を上げるにとどめる。

○ 奈良県御所市塚山古墳出土、剣の鹿角装具の浮彫（奈良県考古博物館）

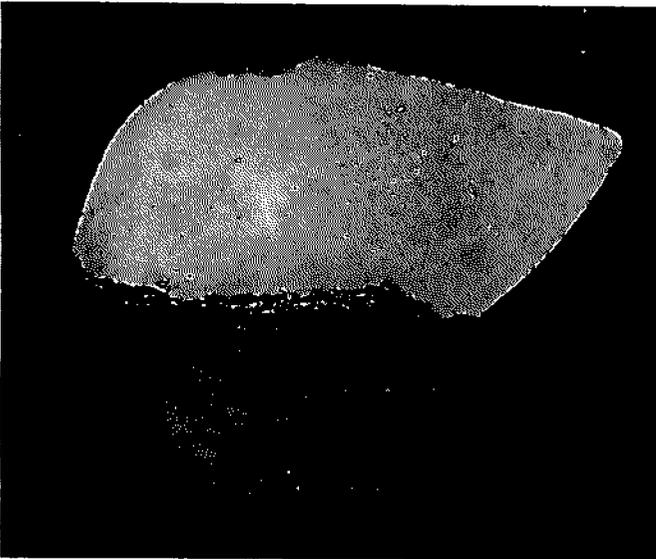
○ 奈良県広陵町新山古墳出土の鏡（宮内庁）

○ 岡山県高松町千足古墳石障の浮彫

古墳内部、石棺に用いられた例は他にいくつかあるが、これが最も密度の高い優れたものである。

○ 静岡県堂山古墳出土の胴形埴輪の全面に線刻されたもの（磐田郷土館）

これは近畿的な埴輪の最も東寄りのもので、立派なものである。



(2) 衝角式冑

御所市鑑子塚古墳出土

埴輪の起源が日本書紀に云う野見宿禰の建築によるものでないことは、人物埴輪が、円筒埴輪や、これらの器財埴輪に続いて後に造られるようになったことから明らかである。奈良県桜井市の茶白山古墳は前方後円墳の初期のものであるが、その堅穴式石室上を方形に囲むように置かれた土師器の壺は、その起源をおおせるものである。自分

もその一つを復原したが、底部に径6cm位の孔があげられてあった。これは、明らかに葬儀器として祭られたもので、後に葬祭を誇示するために、朝顔形円筒、器財埴輪を生み、やがて人物が登場するが、それもその葬祭の中心となったであろう巫女が作られたのであった。

さて、この冑であるが、これは実に驚歎すべきものである。この良さはなかなか理解されないようだが、自分は武具埴輪の中では随一のものと思っている。これと並べて見られるものは、堺市いたすけ古墳出土の冑の埴輪だけである。全体の形の良さでもあるが、丸味を帯びた部分の輝かしさは言葉で表現できないものである。強靱な迫力を秘めながら、あくまでおだやかで明るく暖かい。これこそ大和の埴輪の格調の高さを示すものである。

(3) 女子頭部

田原本町鑑出土

これは巫女と思われる高さ10cm程の小さな顔であるが、日本中の数ある埴輪の中で、これほど美しい頭部はない。自分はこの埴輪を方々から、様々の光線のもとで写したが、それらが実に変化のある表情を示したのに驚いた。しかしこの埴輪の美しさは、単に表情の豊かさだけでなく、その彫塑的な立体感にこそある。これは近畿の埴輪に共通したものだが、この頭部は、顔の巾よりも奥

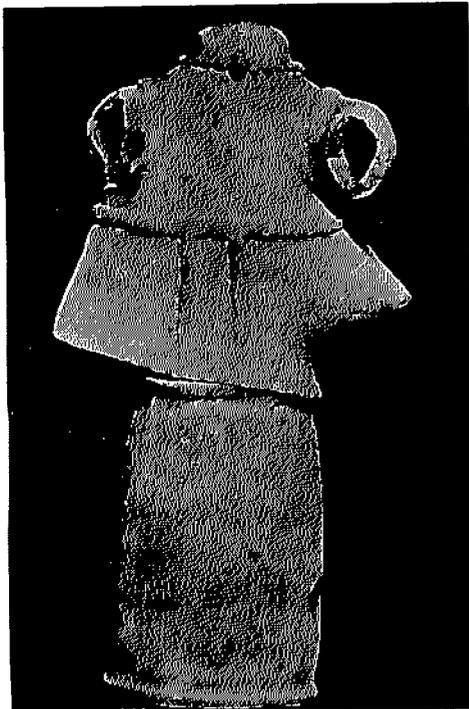


行きの方が大きい位である。そのあふれるばかりの量感、東日本の埴輪には見ることには出来ない。東日本の人物埴輪の頭部は、総じて、円筒へお面をはりつけたような造りで、ひどいのはたゞ、あごと顔のりんかくだけ肉付けしたと思われるようなものすらある。そこに見られる目鼻口の表情は何ら彫塑の本質的なものではない。この本質的な造型力のちがいに、饒上がりの肌合いの差がある。奈良県出土のものは大和の明るく暖かい、芳しい土の香りがある。これは、宗達、光悦らの大らかで豊潤な感覚であり、東日本のそれは浮世絵的な形式的で浅薄な、更に云えば華やかさに化粧されたひ弱な体質である。

他に良き頭部を上げるなら、天理市探本出土のものと、仁徳陵出土と伝えるもの二点である。

(4) 袈裟衣の女

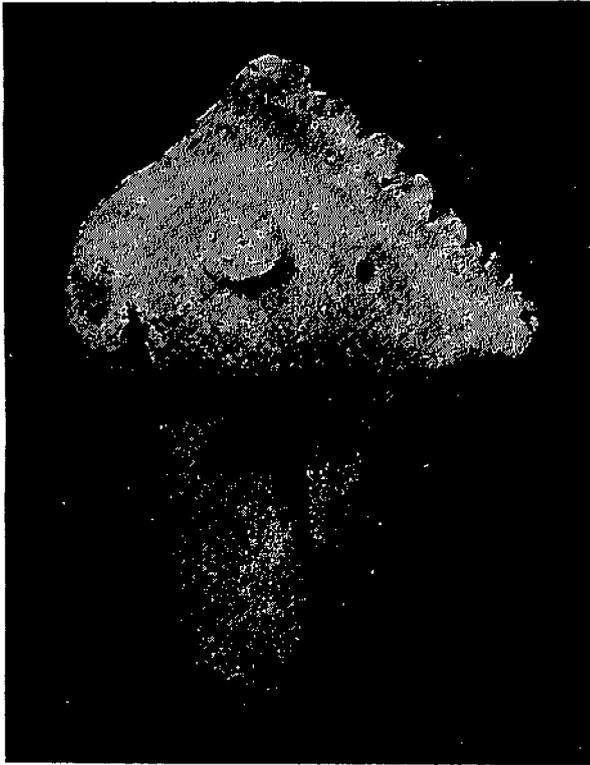
河合村佐味田出土



この埴輪は、有名な家屋文鏡を出土した宝塚（黄金塚）古墳のすぐ北西から出土したもので、奈良県下で出土した同類のものの中で随一のものである。

衣は向って右で袋状になり左側は二枚の板状に離れている。たすきは奥行の深い丸味のある背中で×状に組まれる。腕はその背中からグッと強い形で太く作り出されている。

すっきりと立った端正な姿、豊かな量感、まことに格調の高い埴輪で、さぞかしすばらしい頭部がついていたことと思われる。



(5) 雞 頭

御所市領家山古墳出土

雞埴輪は早くから作られ、各地からの出土も多く、栃木県雞塚古墳出土のものはよく知られ、写実的なものであるがそれだけのものである。

西日本からは岡山市金蔵山古墳のものなどが知られるが、静岡の前掲の「柄」埴輪と同古墳から出土した雞頭はなかなか堂々たるものである。「柄」と同様、多少量感にだぶつきが見られる野暮ったい雰囲気をもつが、西日本的な明るい大らかさが感じられる。

しかし、多くの雞埴輪の中で、この御所市出土のものは、正に王者の風格を具えている。垂直に立上がった首とその頭部の造型は簡潔明快であの生きる雞の不断に動く柔軟な首

から、このような堂々たる構築的な造型を生む感覚に驚くばかりである。

この首から想像する胸部はどんなものだったろうか。大阪市瓜破から胸部が出ているが、これでは、この首に対して弱く、小作りである。恐らく、前掲の籠子塚出土の胃の如き力強いものであったに違いない。この胸部が見られないのは残念でならない。

自分は、雌鳥の首と思われる 80cm位の埴輪を持っているが、これは(1)に掲げた室の宮山古墳出土のものにちがいない(これを手に入れた当時、自分はまだ鎌倉の近くに住んでいて休み毎に奈良へ出て来ていた。これは、その古墳のすぐそばに住んでいて、今、榎原神宮の前で骨とう屋をしている古老が、昔自分で見つけたものという。その焼上がりの肌合いから云っても同古墳のものに間違いない。それを苦勞して買求めた時、その雞と思われる首もあったが買えず、翌年、出かけて行った時には、奈良市在住の某氏の手に移っていた。今は最初にこの埴輪を見つけた時写した写真から偲ぶだけである)。

これも真直ぐに首を上げている。関東出土の水鳥で首をくねらせたものがあるが、そんな小手先の表面的なものは近畿の埴輪にはない。総じて真直ぐに首を上げている。それらは愛らしいなどと云うものではない。光悦の「不二」の胸部は、アイガーの北壁を思わせるが、このように厳しく、壮大なものである。しかも明るく暖かい。

この首を見ていると、まこと、古代大和人の「明き直き心」と温かく芳わしい土の香がにおうばかりである。

(6) その他の動物埴輪

奈良県からは、他に、牛の埴輪が田原本町から出ている(千葉県からも出土しているが)、これ

は、かっちりとした彫塑的な作りで立派である。

馬の他、近年、鹿の埴輪が田原本町石見遺跡から出土した。鹿埴輪は他にもいくつか知られ、鳥取県出土のものは斑点をもった面白いものである。この石見遺跡出土のものは、自分が復原したが、盛期をやゝ下った頃のもので、宮山古墳出土の埴輪に比べると薄い感じがするが、立体感のあるものである。奈良から鹿の埴輪が出たことはうれしいことである。

(六)

以上、奈良県出土の土偶、埴輪を中心に、日本美術の源泉について述べて来たが、拙い文よりも写真からその意図する所を読みとっていただきたい。それ以上に、実物をぜひ見ていただきたい。

こゝに掲げた榎原の土偶と埴輪の(1)(2)(3)(5)は、歿傍山のふもと榎原公苑の考古博物館に常時、展示されている。こゝには奈良県出土の貴重な考古学資料が豊富に收藏され展示されて、県下の発掘調査に忙しい榎原考古学研究所と表裏一体をなす重要な博物館である。

同館の旧主任小島貞三氏、現主任伊達宗泰氏には、いろいろご教示や、資料の提供をいただいた。ここに感謝の意を表す。

図版写真は

榎原土偶 1. 2. 3. 4. 5

埴輪 (2)、(3)、(5)は、筆者撮影のもの。

他は、

サントリー美術館「土偶と土面」展カタログ
至文堂・日本の美術・にはは
講談社・世界美術
角川書店・世界美術全集 によった。

高校における変換を軸とした 図形の指導について (その3)

— 無限遠点の導入 —

数 学 科

岡田セイ子・木村維男・木村雅吉
玖村由起夫・中尾博一

はじめに

既習の図形教材をもとにして、合同変換・相似変換・アフィン変換までを、高校の数学に導入する試案を前号まで2回にわたって発表した。さらに射影変換へ進むこの段階で、「無限遠点の導入」という問題に対して、従来の空間の概念、幾何学の知識から大きく飛躍しなければならない。高校生にどのような順序で、どのような内容を、わかりやすく指導するのがよいか既習の教材の中でいろいろと検討を続けたが、難航の連続であった。その結果接続的には一次から二次曲線の図形を不変にする断絶はあるにしても、「無限遠点の導入」という点に主眼をおき、一応次の順序でまとめた。

- ① 合同変換・相似変換・アフィン変換を、複素平面上で複素数の一次変換でとらえ復習する。
- ② 一次分数変換の基礎となる逆数で表わされる変換が反転となり、それについて学習を進め、すべての点を、例外なく1対1に対応させるために無限遠点を導入する。
- ③ ガウス平面上の点と、リーマン球面上の点を対応させ、無限遠点を座標でもとらえる。
- ④ 一次分数変換によって、保持させる図形の性質をしらべる。

今までの変換の指導で、群には触れなれなかったもので、その線に沿い、また、これは試案の段階で授業を実施していないので、指導上の問題点も多いと思う。④については、まだ不充分であるし、無限遠点導入後の射影変換の総括的な指導、非ユークリッド幾何学の図形の性質等を研究し続けるつもりである。

(1) 複素平面における変換

複素平面における変換を $W = f(z)$ とすれば

($z = x + yi$ 、 $W = X + Yi$ 、 $\alpha = a + bi$ 、 $\beta = c + di$ とおく)

- ① $W = z + \beta$ のとき

$$X + Yi = (x + c) + (y + d)i$$

より

$$X = x + c$$

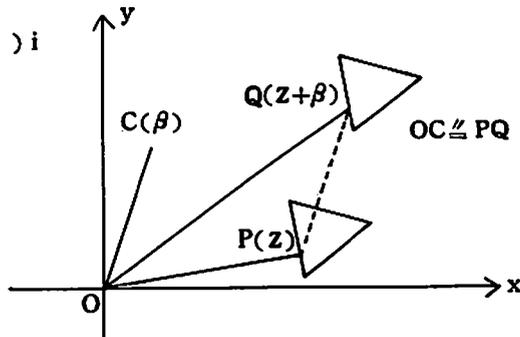
$$Y = y + d$$

$W = z + \beta$ は正の合同変換で

ある。

- ② $W = \bar{z}$ のとき

$$X + Yi = x - yi$$



$X = x$
 $Y = -y$)となり
 $W = \bar{z}$ は負の合同変換である。

③ $W = \alpha z$ のとき
 $X + Yi = (a + bi)(x + yi)$
 より
 $X = ax - by$
 $Y = bx + ay$)となり
 $W = \alpha z$ は、相似変換である。

④ $W = \alpha z + \beta$ のとき
 $X + Yi = (a + bi)(x + yi)$
 $+ (c + di)$ より
 $X = ax - by + c$
 $Y = bx + ay + d$)となり
 $W = \alpha z + \beta$ は、相似変換である。

また、この変換は2つの変換
 ③、①をこの順に合成したものである。

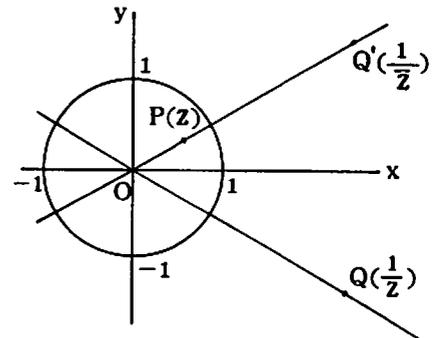
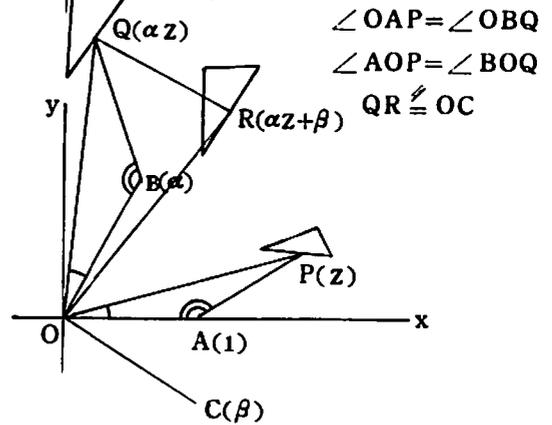
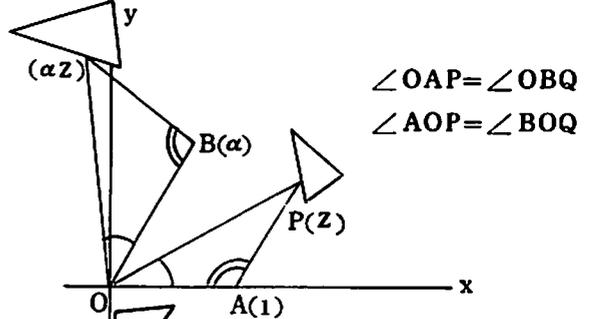
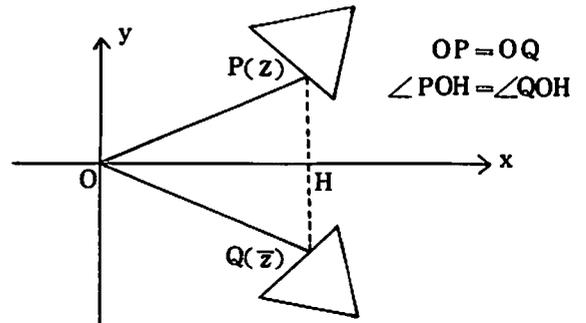
⑤ $W = \frac{1}{z}$ のとき
 $X + Yi = \frac{1}{x + yi} = \frac{x - yi}{x^2 + y^2}$
 より
 $X = \frac{x}{x^2 + y^2}$) $x = \frac{X}{X^2 + Y^2}$
 $Y = \frac{-y}{x^2 + y^2}$) $y = \frac{-Y}{X^2 + Y^2}$

となる。

z と $\frac{1}{z}$ との関係を、単位円に関する反転という。

⑥ 一般の一次分数変換 $W = \frac{\alpha'z + \beta'}{\alpha z + \beta}$
 $(\alpha\beta' - \alpha'\beta \neq 0)$ のとき
 3つの変換 W_1, W_2, W_3 を
 $W_1 = \alpha z + \beta$
 $W_2 = \frac{1}{W_1}$
 $W_3 = \frac{\alpha\beta' - \alpha'\beta}{\alpha} W_2 + \frac{\alpha'}{\alpha}$

とおくと、



$$\begin{aligned}
 w_3 &= \frac{\alpha\beta' - \alpha'\beta}{\alpha} w_2 + \frac{\alpha'}{\alpha} = \frac{\alpha\beta' - \alpha'\beta}{\alpha} \frac{1}{w_1} + \frac{\alpha'}{\alpha} = \frac{\alpha\beta' - \alpha'\beta}{\alpha} \frac{1}{\alpha z + \beta} + \frac{\alpha'}{\alpha} \\
 &= \frac{\alpha\beta' - \alpha'\beta + \alpha\alpha'z + \alpha'\beta}{\alpha(\alpha z + \beta)} \\
 &= \frac{\alpha'z + \beta'}{\alpha z + \beta}
 \end{aligned}$$

したがって、一般の一次分数変換は3つの変換①、③、⑤を③、①、⑤、③、①の順に合成したものである。そのうち、①、③の2つ変換の性質はすでにわかっているので、⑤の変換 $w = \frac{1}{z}$ の対応の仕方および図形的意味について考えてみよう。

(2) 反 転

Z-平面からW-平面への変換 $w = \frac{1}{z}$ により、Z-平面の原点を除いた任意の点zに対してW-平面の一点が対応する。また、 $w = \frac{1}{z}$ の変形 $z = \frac{1}{w}$ により、W-平面上の原点を除いた任意の点wに対して、Z-平面の1点に対応する。

したがって、変換 $w = \frac{1}{z}$ により、原点を除いたZ-平面の点と、原点を除いたW-平面の点とは1対1の対応をしている。この変換が二つの平面上でどのような図形関係を示すか、以下例題を取り上げてしらべてみる。

① zが原点Oを通る直線上にあるとき

$z = x + yi$ において

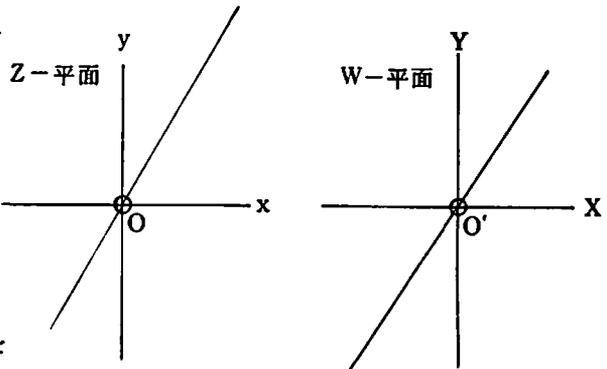
$ax + by = 0$ (a, b共に0でなく、原点を除く)とすれば

$x = \frac{X}{X^2 + Y^2}$, $y = \frac{Y}{X^2 + Y^2}$ を

を代入すると、

$aX + bY = 0$ となるから

wもまた原点を通る直線(原点を除く)上にある。



② zが原点Oを通らない直線上にあるとき

$z = x + yi$ において

$ax + by + c = 0$ (a, bは共に0でなく、 $c \neq 0$)とすれば

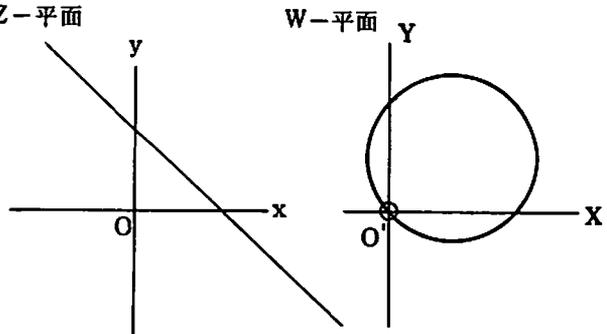
$x = \frac{X}{X^2 + Y^2}$, $y = \frac{Y}{X^2 + Y^2}$ を

代入すると、

$X^2 + Y^2 + \frac{a}{c}X + \frac{b}{c}Y = 0$ となる

から

wは原点を通る円(原点を除く)上にある。



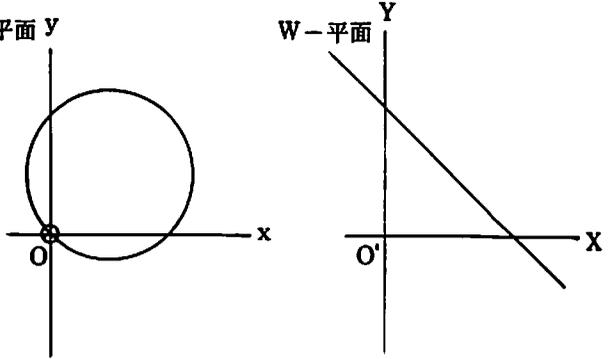
③ z が原点 O を通る円(原点を除く)上にあるとき

$z = x + yi$ において Z -平面 y
 $(x-a)^2 + (y-b)^2 = a^2 + b^2$ (原点を除く)とすれば、

$$x = \frac{X}{X^2 + Y^2}, y = \frac{Y}{X^2 + Y^2}$$

を代入すると
 $2aX + 2bY - 1 = 0$ となるから

W は原点を通らない直線上にある。



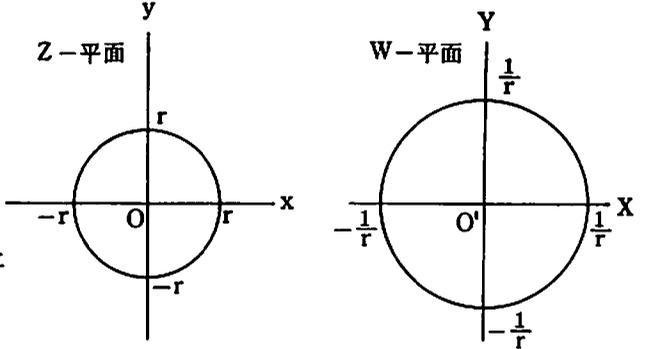
④ z が原点 O を中心とする円上にあるとき

$z = x + yi$ において
 $x^2 + y^2 = r^2$ とすれば

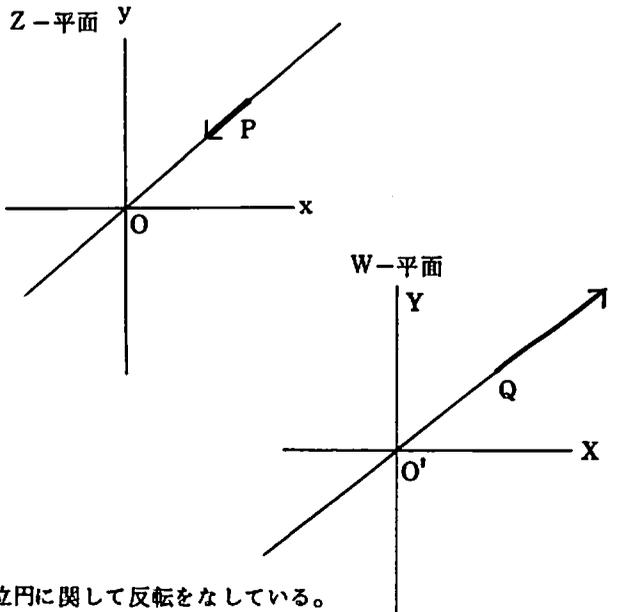
$$x = \frac{X}{X^2 + Y^2}, y = \frac{Y}{X^2 + Y^2}$$

を代入すると
 $X^2 + Y^2 = \frac{1}{r^2}$ となるから

W も原点を中心とする円上にある。



また、 Z -平面から W -平面への変換が $w = \frac{1}{z}$ のとき点 P は直線 OP 上を原点 O に近づくと、点 Q は直線 $O'Q$ 上を原点 O' から遠ざかり、点 P が直線 OP 上を原点 O から遠ざかると、点 Q は直線 $O'Q$ 上を原点 O' に近づく。そこで Z -平面の任意の点と、 W -平面の任意の点との間に、例外なく1対1の対応がつくためには、 $z = 0$ に対応する点をどのように定めればよいだろうか。これについて考えてみることにする。



Z が原点 O を通る直線 $ax + by = 0$ 上を動くとき、 $\frac{1}{z}$ も直線 $ax + by = 0$ 上を動く。 z と $\frac{1}{z}$ は直線 $ax + by = 0$ 上で、原点 O を中心とする単位円に関して反転をなしている。

いま、 z と $\frac{1}{z}$ の任意の位置を右の図のように P, Q とおくと

$$\begin{aligned} OP \cdot OQ &= \sqrt{x^2+y^2} \cdot \sqrt{X^2+Y^2} \\ &= \sqrt{x^2+y^2} \cdot \sqrt{\left(\frac{x}{x^2+y^2}\right)^2 + \left(\frac{y}{x^2+y^2}\right)^2} \\ &= 1 = (\text{半径})^2 \end{aligned}$$

ゆえに PQ を直径とする円と単位円は直交する。

円 PQ と単位円の交点を R, R' ; RP, QR' と単位円の R, R' 以外の交点を Na, Na' とすれば

円 PQ は単位円と直交しているから OR は円 PQ の接線

$$\therefore \angle PQR = \angle ORP = \angle ONaP$$

$$\text{また、} \angle RPO = \angle OPNa$$

$$\angle PRQ = \angle R$$

$$\therefore \triangle PNa \sim \triangle PRQ$$

$$\therefore ONa \perp OP$$

同様にして $ONa' \perp OP$

ゆえに Na と Na' は一致する。

よって、 z が直線 $ax + by = 0$ の上を動くとき、この直線に垂直な直径と円との交点を Na とし、 z を示す点 P をきめれば $\frac{1}{z}$ に対応する点 Q は、円周上の点 R, R' を定めて求めることができる。即ち、 Na を定めることによって、 P, Q の対応する点 R, R' が円周上に示されることになる。

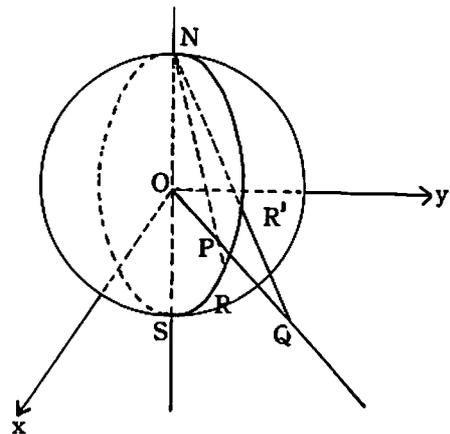
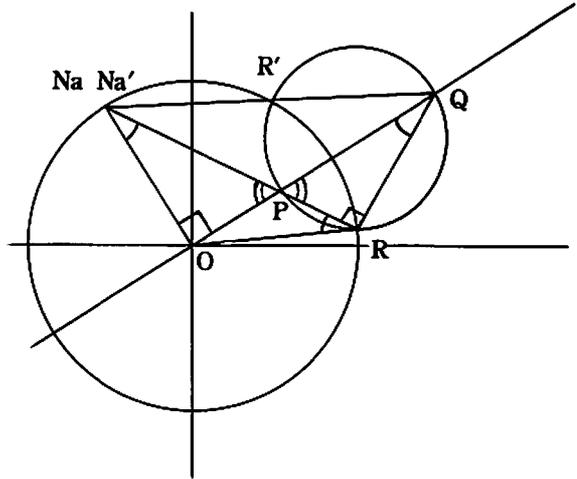
さらに、 z が動く直線 $ax + by = 0$ の a, b がいろいろ変わると Na も単位円周上を変わる。

次に、 Na を固定して考えるために、単位円、円 PQ を Z -平面に垂直にすれば、 Na は O において、 Z -平面に垂直な直線と単位円の交点 N となる。また、 a, b をいろいろと変えると、単位円は 1 つの単位球をなす。

複素平面上の点 P が定まれば、 NP と球面の N 以外の交点として R がただ 1 つ定まり、球面上の点 R が定まれば NR と複素平面との交点として、 P がただ 1 つ定まる。即ち、複素平面上の原点 O を除く任意の点 z が定まれば、それに対応する単位球上の点 R が、点 N によって射影されることになる。

それでは原点 O に対応する点は、単位球上でどのように表わされるか、また原点 O の複素平面上の $\frac{1}{z}$ の点はどこにあり、単位球上で表わされるかどうかを考えてみよう。

いま、点 P が原点 O に近づくとする、それに対する $\frac{1}{z}$ の点 Q は、原点 O からかなり遠い点に逃げる。そこで、次の図で N における単位円の接線を NT とすれば



$OP = |z|$ 、 $OQ = |\frac{1}{z}| = \frac{1}{|z|}$ だから

$\triangle NOP$ と $\triangle QON$ において

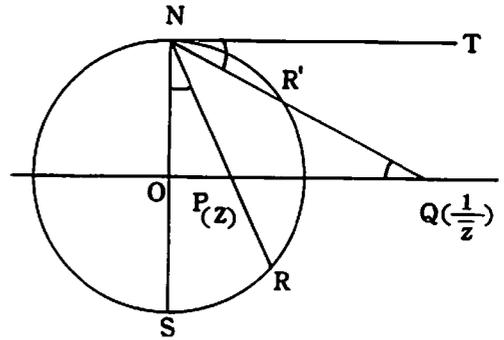
$$\frac{OP}{ON} = \frac{|z|}{1} = |z| \quad \frac{ON}{OQ} = \frac{1}{\frac{1}{|z|}} = |z|$$

$$\frac{OP}{ON} = \frac{ON}{OQ} \text{ で } \angle PON = \angle NOQ = \angle R$$

$\therefore \triangle NOP \sim \triangle QON$

$\therefore \angle ONP = \angle NQO = \angle RNT$

$\therefore \widehat{NR'} = \widehat{SR}$



故に、Pが限りなく原点に近づけば、Rは限りなくSに近づき、Pの反転の対応点Qはかなり遠い点に逃げるが、Rは全く同じようにNに近づいてくる。換言すれば、複素平面上で、変換 $w = \frac{1}{z}$ によって考えることのできなかつた $z = 0$ の点P、それに対する $\frac{1}{z}$ の点QはNによって、単位球にS、Nに射影されて、例外なく1対1に対応しているといえる。次にこれを座標をつかって説明してみよう。

(3) リーマン球面

さて、右図のように座標をとり、 x_1 軸、 x_2 軸、 x_3 軸とする。

そこで3次元ユークリッド空間と同じように、単位球Rをとり

$$x_1^2 + x_2^2 + x_3^2 = 1 \text{ とする。}$$

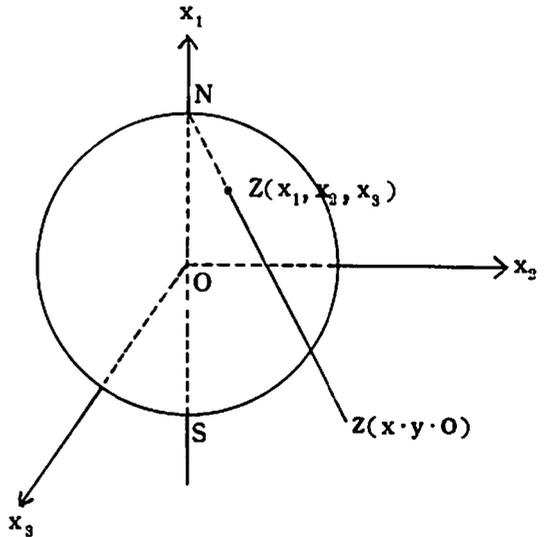
そしてR上点 $N(0, 0, 1)$ を北極、 $S(0, 0, -1)$ を南極と呼ぶことにする。また、球面R上の点 $Z(x_1, x_2, x_3)$ を北極以外の点とし直線NZと平面 x_1x_2 との交点を $z(x, y, 0)$ とする。

すると平面 x_1x_2 上の点 z と球面R上の北極を除く点Zとが1対1に

対応することがわかる。すなわち、3点NZ z は一直線上にあるから $\frac{x}{x_1} = \frac{y}{x_2} = \frac{-1}{x_3 - 1}$ (ただし $x_3 \neq 1$)となり、

$$(i) \quad \begin{cases} x = \frac{x_1}{1 - x_3} \\ y = \frac{x_2}{1 - x_3} \end{cases} \quad (\text{ただし } x_3 \neq 1)$$

が導かれ、しかも $x_1^2 + x_2^2 + x_3^2 = 1$ より、(i)を解いて



$$(ii) \begin{cases} x_1 = \frac{2x}{x^2 + y^2 + 1} \\ x_2 = \frac{2y}{x^2 + y^2 + 1} \\ x_3 = \frac{x^2 + y^2 - 1}{x^2 + y^2 + 1} \end{cases} \text{を得る。}$$

よって、点 $Z(x_1, x_2, x_3)$ が定まれば点 $z(x, y, 0)$ は定まり、逆に点 z が定まれば、点 Z が定まる。平面 $x_1 x_2$ 上の点と球面 R 上の N を除く点とは 1 対 1 の対応をなす。

そこで、平面 $x_1 x_2$ をガウス平面と考え、 x_1 が実軸、 x_2 が虚軸を表わすものとすれば

$$z = x + yi \text{ より (i) は (i) } \quad z = \frac{x_1 + ix_2}{1 - x_3}$$

$$(ii) \text{ は (ii) } \quad x_1 = \frac{z + \bar{z}}{1 + z\bar{z}}$$

$$x_2 = \frac{-i(\bar{z} - z)}{1 + z\bar{z}}$$

$$x_3 = \frac{z\bar{z} - 1}{1 + z\bar{z}} \quad \text{とかけろ。}$$

すると、(ii) および (ii) より明らかに $z = 0$ の対応点は球面 R 上の南極 S であるが、逆に北極 N の対応点はガウス平面上どこなのか。そこで無限遠点と呼ぶ点を導入しよう。

今まで考えた変換 $w = \frac{1}{z}$ において $z \rightarrow 0$ とすれば $|w| \rightarrow \infty$ となり、逆に $|z| \rightarrow \infty$ とすれば $w \rightarrow 0$ となるから、 ∞ で表わされる点が 1 点に対応しているものとしてこれを無限遠点と呼ぼう。

ガウス平面上に新たに追加した無限遠点 ($|z| \rightarrow \infty$) は球面 R 上どこに対応するか、考えると $|z| \rightarrow \infty$ のとき、 $\sqrt{x^2 + y^2} \rightarrow \infty$ だから (ii) より

$$\begin{cases} x_1 \rightarrow 0 \\ x_2 \rightarrow 0 \\ x_3 \rightarrow 1 \end{cases} \text{ となり}$$

球面 R 上北極 N の対応点は、ガウス平面上新たに追加した無限遠点である。

これでガウス平面上の点 z と球面 R 上の点 Z はもれなく 1 対 1 の対応がついた。

この球面 R をリーマン球面 (または複素球面) と呼ぶ。

(4) ガウス平面とリーマン球面との対応曲線

平面 $x_1 x_2$ をガウス平面とみなしその平面上の $z(x, y, 0)$ をとり、 z がある曲線をえがくとき、 z のリーマン球面上の対応点 Z はどんな曲線をえがくかを調べてみる。

さきの (2) の反転に示された例題 ①~④ を、 Z 平面から W 平面への変換 $w = \frac{1}{z}$ と考えたから、これをガウス平面からリーマン球面への変換におきかえもう一度考えなおしてみよう。

① z が原点 O を通る直線上にあるとき

$z = x + yi$ において、 $ax + by = 0$ とすれば、(i) より

$$\frac{ax_1}{1-x_3} + \frac{bx_2}{1-x_3} = 0 \text{ だから } ax_1 + bx_2 = 0 \text{ となり、}$$

これは、北極 $(0, 0, 1)$ 南極 $(0, 0, -1)$ を通る平面であるから、 Z は両極 NS を通る大円上にある。

- ② z が原点 O を通らない直線上にあるとき
 $z = x + yi$ において、 $ax + by + c = 0$ とすれば、(i)より

$$\frac{ax_1}{1-x_3} + \frac{bx_2}{1-x_3} + c = 0 \text{ だから、}$$

$$ax_1 + bx_2 + c(1-x_3) = 0 \text{ となり}$$

これは、北極 $(0, 0, 1)$ を通る平面であるから、 Z は北極を通る小円上にある。

- ③ z が原点 O を通る円上にあるとき
 $z = x + yi$ において、 $(x-a)^2 + (y-b)^2 = a^2 + b^2$ とすれば、(i)より

$$\left(\frac{x_1}{1-x_3} - a\right)^2 + \left(\frac{x_2}{1-x_3} - b\right)^2$$

$$= a^2 + b^2 \text{ だから}$$

$$2ax_1 + 2bx_2 - (x_3 + 1) = 0 \text{ となり}$$

これは南極 $(0, 0, -1)$ を通る平面であるから Z は南極を通る小円上にある。

- ④ z が原点 O を中心とする円上にあるとき
 $z = x + yi$ において、 $x^2 + y^2 = r^2$ とすれば (ii)より

$$x_3 = \frac{x^2 + y^2 - 1}{x^2 + y^2 + 1} = \frac{r^2 - 1}{r^2 + 1} \text{ (一定)}$$

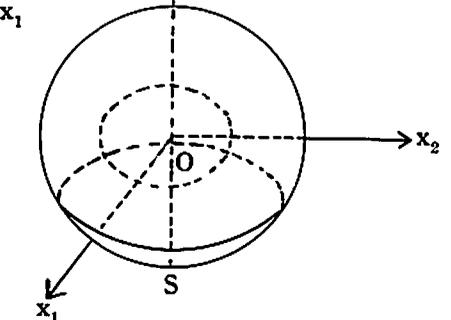
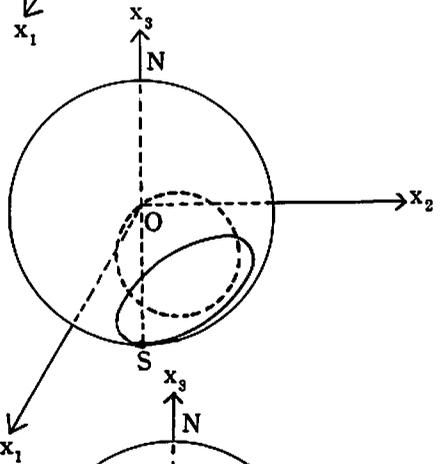
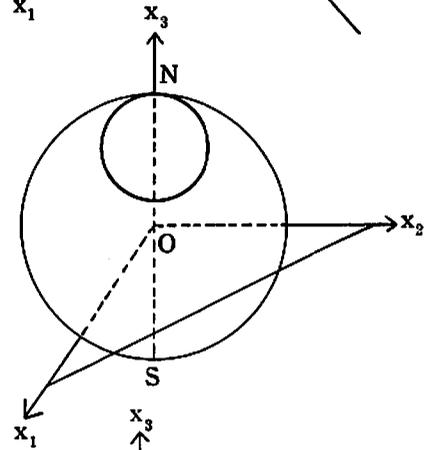
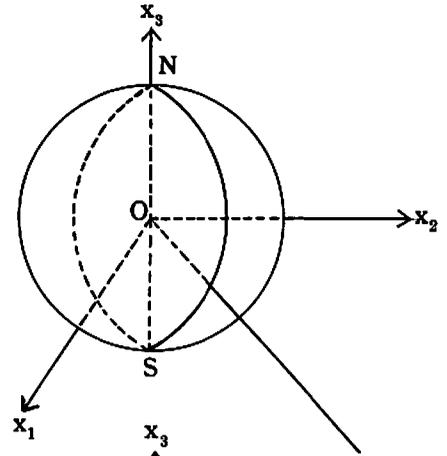
$$\text{しかも、} 0 < \frac{r^2 - 1}{r^2 + 1} < 1 \text{ だから}$$

これはガウス平面に平行で、リーマン球面と交わる平面であるから、

Z はガウス平面に平行な小円上にある。

以上のことによって、ガウス平面上の直線および円はリーマン球面上の円と対応する。

さらに、ガウス平面上に追加した無限遠点を考えに入れば、ガウス平面上の直線も無限遠点を通る円と考えられ、ガウス平面上の円とリーマン球面上の円とが対応していることになる。よって射影変換の一つである一次分数変換 $w = \frac{1}{z}$ によって保持される図形の性質の一つが円であるといえる。



理科に於ける中学校・高等学校 一貫学習指導計画の試案

中道貞子・新穂高史・林 良樹
藤川宣雄・藤田周子・馬嶋玄敏

(五十音順)

はじめに

よりよい教育をめざして、教育課程を自主的に編成する試みは、教育に従事するものにとって、極めて大きな魅力に違いないし、また必要なことでもあるが、同時に大変な難事であることも確かであり、ともすれば問題の大きさに気おくれして、投げ出してしまいがちである。私達もそのことは十分に承知した上で、「理科に於ける中高一貫教育課程の編成」と取り組み、先ずその手はじめとして、昭和45年7月以来、学習指導計画の作成にあたった。この問題と取り組み始めてから、わずか一年余しか経ておらず、十分な成果があげられたわけでもないのだが、今後の見通しを立てるためにも、今までやってきたことをここに整理・報告し、諸賢の御批判・御指導を仰ぎたいと思う。

動 機

私達が「中高一貫教育課程の編成」と取り組むに至った主な動機は、次の3点である。

- (1) 本校に於ける中高接続問題の解決。
- (2) 中高に於ける現行の教科内容ならびにその配列に対する疑問点の解消。
- (3) 高校の義務教育化への動きに対する先導的試行。

以上3点について、もっと具体的に説明してみたい。

先ず第1点の件について — 本校では、接続問題が長年の研究課題となっており、この問題の検討がなされない年度はなかったといっても過言ではない。本校は中高併設になっており、教官も中高併任の形をとっている。ところが生徒についてみると、中学から高校への接続が完全になっておらず、教育上さまざまな問題を派生して来た。〈注〉接続のあり方のどこに問題があり、その解決のためにどのような事がなされてきたかについては、本校の研究紀要第12集(1970)「接続委員会の歩み」に詳しい。)この問題点の存在は、本校教官の大多数の認めるところとなり、これの解決のため、「中高一貫をめざして研究を深めよう」という方針の決定をみるに至った。これに伴ない、理科に於いては他の動機も手伝って、学習指導計画の作成と取り組むことになったのである。

次に第2点の件について — 現行の学習指導要領は、中高それぞれの段階で、一応の完成をみようとしている。そのため、中高で教科内容に重複の生ずることが少なくない。もちろん、中学と高校とでは、同一テーマを扱っても、その扱いか方に差異があって当然で、その場合、“重複”は問題にならないという考え方もできるだろう。しかし、中高での扱いか方の差異を正しくとらえることは、簡単にできることではないし、また、自然科学や科学技術がめざましい進歩をとげる現代においては、教科内容はふくらむ一方で、時間数不足に悩む現状でもあるから、中高での重複はできるだけさけるべきであると考え。反面、教科内容の膨脹に対応するため置き去りにされた部

分で、ぜひ採り上げた方がよいと思われるものもある。どのような項目を捨て去り、どのような項目をとりあげるか、またそれをどのように組み上げていくかは、どのような理科教育をもくろむかによって決ってくることで、大変厄介な問題ではあるが、あえて取り組んでみることにした。

動機の第3点は、高校を義務教育化しようとする気運の高まりと共に、その先導的試行の必要性が生じて来ている所にある。本校では、ここ数年来、中学校卒業生で就職希望の者は皆無の状態であった。昭和45年度の「わが国の教育水準」（文部省）によると、東京・広島・神奈川の3県では、高校への進学率はすでに90%を上まわっており、全国的にみても、その率は約82%に達している。また中教審答申「教育改革のための基本的施策」の参考資料によると、中学校卒業生の上級学校への進学率は、昭和50年には全国平均で90%に達する見通しである。これからみて、すでに高校の義務教育化を考慮すべき段階に来ているといえるが、そうになると、小学校から高等学校までの教育課程の一貫性が求められる中で、特に中高の一貫性は著しく強調されることになるだろう。なぜなら「中学生は知的探求心が高まり、ある程度抽象化してものごとを考えたり、論理的・合理的に判断したりしようとする傾向が強くなる時期にある。」といわれており、この傾向がさらに進んだ形でとらえられる高校へ一貫して結びつけることによって、この特質はさらに生かされると考えられるからである。高校の義務教育化が押し進められ、中高一貫の教育課程を検討すべき時期が遠からず到来することを思う時、私達のやろうとしていることは、先導的試行として意義あるものと考えられるのである。

試案の性格

私達は、指導要領とは全く異なる新しい教育目標を開拓するために、この試案を作成したのではない。私達の目的は、むしろ理科教育における最終目標を達成する上で、より効果的であると考えられるルートの開発にあるといえる。目ざす頂上（初・中等理科教育の総合的目標）が同一であっても、そこへ至るルートは色々あるはずである。私達が開発を試みたルートはどうなっているのか、以下簡単に説明したい。

私達の試案に於ける各学年・各学科の時間配当は、表1のようになる。この表を作るに際しては上に述べた動機の意向が生かされるように配慮したつもりである。つまり、中高合わせて6か年の一貫教育を行なうことによって、より高い教育効果があげられることをねらいとしている。そのため、これを展開するに当っては、次のような留意点のあることを指摘しておきたい。

- (1) 理科教育においては、系統性が重んじられるが、これは単に内容の系統性というだけでなく生徒の発達段階をふまえた上での系統性でなくてはならない。このことを忘れないよう心がけたつもりである。
- (2) 動機の第2点で触れたように、できるだけむだな重複はさけて、一本化をめざした。同時に新しい内容の開拓にも心がけた。
- (3) 本試案における低学年の扱いは、表1に示したように、現行の中学理科に比較すると、体制的にかなり異なっている。すなわち、一分野関係では1・2学年に一般理科を設け、また二分野関係では、生物領域と地学領域とを切り離して扱っている。このような扱い方にしたのは次のような考え方に基づくものである。

先づ第一分野関係についていうと、生徒の発達段階から考えて、中学初期の段階から学問の系統性に乘せた学習を始めるより、多くの自然現象に触れ、自然の不可思議さに目を開かせる

と共に、柔軟な思考の下に科学の方法を学んでゆく体系をとる方が望ましいように思われる。それで第1学年では幾つかの題材を用意し、あらゆる方向から自由に考察する場を設け、第2学年では巨視的に種々の現象を観察・思考することをねらいとして題材を配列しこれらを基に、第3学年より、物理・化学と教科別に系統化した体系の中で学習する構成とした。

(表1) 試案における単位時間数の配当

(〈注〉・()つきは選択)

学 年	一 般 理 科	生 物	地 学	合 計
1	2	2		4
2	2	2		4
	物 理	化 学		
3	1	1	3	5
4	2	2	2	6
5	(A) 2	2	2	6
	(B) 2			
6	(B) 2	(2)	(2)	0～6

一方第二分野関係では、一分野関係の場合と異なり、最初から生物領域と地学領域とを別けて学習させることにした。これは物理と化学以上に、生物と地学とではその内容に融合性が乏しいからである。そのことは「中学校指導書 理科編」(昭和45年 文部省)の第二分野の内容説明に、次のように出ていることから明らかである。すなわち、「生物的事象と地学的な事象は、関連をもちながらもそれぞれ特異性をもっており、両者を融合してまとめることはむずかしい場合が多い。……」したがって、「それぞれの事象が関連し合って起こっていることを大局的にとらえることが重要である。」というものであるが、教育の現場において、果してどれだけ大局的なとらえ方がなされるものだろうか。それよりも、各々の事象を生物なら生物、地学なら地学として取りまとめ、それぞれ専門の教官が指導に当れるようにした方が、すっきりしてよいのではなかろうか。これをやることによって、教科間のいわゆる横のつながりが失われるという考え方は正しくないと思う。これは(5)で述べるような方法でも、幾分かカバーできると考えるからである。

なお、表1に示した総単位時間数、教科の時間数は、現在本校でこなしている時間数内におさめるようにしたものである。

- (4) 表1からも明らかなように、そのほとんどを必修させることにした。中教審答申によると、「新しい試みは、特殊な生徒対象であってはならず、様々な個性を考えて、いろいろなコースを設けてやるべきである。」となっている。確かにその通りで、その趣旨に沿ってやってはじめて、この試案の研究の意義も深くなることは分かるが、本校の現状を思うと、一足跳びにそこまで行き難いところがある。まずやれそうな所からやってみようというわけである。また高校の新指導要領によると、理科は最低8単位とればよいことになっている。これは最低線であって、とらそうと思えばいくらでもとらせられるとはいうものの、高校の普通コース選択者に対しては、理科全分野を履習させる位の姿勢の方がよいのではなかろうか。いま仮りに、化学Ⅰ、物理Ⅰだけ履習した生徒が卒業する場合を考えてみよう。化学Ⅰ、物理Ⅰだけ履習しておけば、科学の方法、科学的思考力はある程度育成されるだろう。しかし、それは充分であるとは考えられないし、また生物、地学をやらずにいたら、生物、地学に関する知識、理解に欠け化学Ⅰ、物理Ⅰで学んだ方法が、そのまま適用できるものでないことを知らないままで終わってしまうだろう。

一方、私達の試案は「中高一貫」の体制上のことから、教官定員の不足という点からも、高学年での必修が多くなっているのだといえる。

(5) 物理・化学・生物など、縦割りして平行履習させるのは、横のつながりを生かそうとするものである。このことは、これまでも試みてきたことで、未だ結論は出していないが、有意義な方法であると信じている。

1 一般理科

ねらい

知識を学問の系統に従って順序立て、教材を学問の系統性でのみ組み立てることの無意味さはいうまでもない。教材の配列については、生徒の発達段階をまず考慮しなければならない。特に中学校1・2年ではこのことが大きな比重を占める。

教科の構造を重んじながら、学習内容を構造化して系統的に学習を展開する中で、発見や創造の機会を与えるように教材を準備し、指導計画を作成、教授過程を設定することは可能である。しかし、その前提となるのは授業での生徒の活発な知的活動と旺盛な好奇心、興味、そして柔軟な思考態度である。このようなことがない限り、構造化された教科内容が如何に系統的に展開されたとしても、それは単に、生徒に知識を注入することに終わってしまうであろう。

授業そのもののあり方を検討することも大切であるが、指導計画の作成については、まず生徒の自然現象に対する疑問と興味を正しく発展させ、自己の課題として、疑問を発展追求してゆこうとする研究者の態度を養うことの重要さをまず考えたい。ここでは、自由に問題を発展させ、実験を計画し、手にとってやってみることで、事実に基づく問題として、論理的に思考してゆく科学の初歩的手法を習得させたい。そのためには何を題材に選び、どのように発展させ授業として成立させるかという難問が残るが、このことは、生徒の実態を把握しつつ、実験授業によって解決してゆけることだと考える。

これらのことが、物質の学習の前は、種々の科学の手法を組み入れた題材をひとつのまとまりとして学習させようと意図した主な理由である。

展 開

科学の順序立った学習を始める前に、後に物理学を学ぶにしろ、化学を学ぶにしろ、まず、その前段階として、物質についての学習、すなわち、物質の量、性質等について巨視的な立場で学習しておくことが大切である。ここでは、測定、質量、密度などをとり上げ、物質の量としての質量の重要なことを指導したい。化学の学習の中で重要な物質の粒子性を指導してゆく上での基本として質量は徹底しておきたい。第3学年以降で粒子概念が順次原子モデルへと発展してゆく訳であるがその基盤をここに置かねばならない。

また、この学習を通じて、微小なものの測定、巨大なものの測定、これらについての具体的測定

法の工夫は、それ自体、科学の方法を与えるものであり、科学的方法が何であるかを具体的に学ぶよい機会である。また、後に学ぶ種々の定量的実験を控えて、ここで測定値とその処理と、それから導かれる結果について一連の考察を行うことはぜひ必要である。

熱についての学習は、物質についての学習が基本であると同様に大切である。化学反応に於けるエネルギー概念の基本であるし、物理に於ては諸エネルギー形態の変換を操作的に取り扱う場合に必要である。温度と熱量について徹底した学習が必要な理由である。

第2学年の電気と電流、光、電流と磁界、についても、巨視的立場で指導してゆきたい。電気では静電気を導入として電流を基本において取り扱い、光では幾何光学のみとし、波動的取扱いは第6学年の物理に移して指導することとした。電流で磁界は定性的に扱い、レンツの法則までを扱うこととした。

2 物 理

これまでの高校の物理教育の大きな欠点は、取り扱う内容があまりに多すぎるということにあった。その結果、次のような弊害が生じてくる。すなわち、知識が雑然としていて、それらの間の関連性が見失われやすいこと、物理の基本的概念や考え方の理解が十分でなく、応用がきかず、公式の暗記に走りやすいこと、中学校で学習したことから発展せず、同じことを数学的に扱うだけという事項もあることなどである。高校生の中に、物理を理解しにくいものと考えている者は少なくないが、これは、ある程度、物理という教科の性質からくるものかもしれない。しかし、以上の点が少しでも改善されれば、理解の困難さも軽減されるはずである。

中高一貫したカリキュラムを考える場合には、不必要な重なりを防ぐことができるので、それだけ授業に余裕が生まれてくるが、さらに、内容の配置を工夫することによって、知識の理論的系統性を生かせるのではないかと考えられる。このような案はいろいろ考えられると思うが、次の点に留意して、一つの大まかな試案を作った。

(1) 物理としては、第3学年から始め、第5学年から選択制をとること。

(2) とり扱う内容については、高校新指導要領の項目にあまり大きな変更をしないこと。

選択制については、第5学年で、物理A、物理Bと分け、物理Aは第6学年で物理を選択しない者のために用意される。試案にあるのは、第6学年で物理を選択する物理Bの内容であり、物理Aの内容については、現在、考慮中である。第3学年以外は、各学年ごとに、2単位時間ずつ、物理を学習することになるが、これは、ある学年でまとめていくつかの単元を学習するよりも、各単元について、一年間学習する方が効果的ではないかと思われるからである。

内容については、力、運動、エネルギーなどの物理の基礎的概念で説明できる事項を基本とし、そのための準備やそこから展開されるものを配置した。そこで、全体を五つの単元に分け、第3学年で「力」、第4学年で「運動とエネルギー」を扱う。物理の中で力学が最も基本的なものであり他の事項との関連も多く、また、それ自身まとまりのある内容であるので、これを必修学年の中に入れた。熱については、分子の運動として扱い、熱量、比熱、熱膨脹などの熱現象については、第1学年の一般理科の中へ入れた。第5学年では、「電気」をとりあげ、場の概念を中心とし基本法則を学んだ後、応用として交流をつけ加え、電子の性質の後に電子工学の初歩的な知識をとり入れることにした。また、電磁波については、第6学年での「波動と光」の最後にもってきてある。

「波動と光」を第6学年に置いたのは、波動、特に波としての光が、理解しにくい対象であること

と、それに続く「原子の構造」での波動性との関連をはかりたかったからである。一般理科の内容と重なっている事項もあるが、それらは、問題として残しておいたことの解決、定性的な説明でしかなかったものを定量的に考えることなどである。

3 化 学

ね ら い

物質の構造・性質・変化をとり扱う学問が化学である。

今日は技術革新の時代であり、化学の発展もめざましく、自然物、合成物共に数多くの新物質を見出し、知識も著しく増大した。その基礎には理論化学の発展が大きな役割を果たしている。

今までの初歩の化学教育に於いては、物質についての博物学的知識を得ることに多くの努力が払われており、よって物質の増大はそれだけ化学の学習を困難にする恐れがある。そこで、初歩の化学教育に於いても、理論化学の発展に伴って導入された新しい原理に基づき、従来の記述化学の内容を系統化しようとする動きがある。いわゆるエネルギー論(熱力学)構造論(原子・分子論)を二本の柱とする現代化学の方向である。私達もその方向に系統化してみた。

化学は元来、実験科学として発展した学問である。内容が理論のみに傾くことなく、実験事実に基づき、理論へと導く過程の考察に十分な時間をかけたい。また、その反面、化学にはごく簡単に思われる現象でも、理論では説明することのできない場合が多々ある。これがまた、化学のおもしろみであることを知らせるのも大切である。

科学や技術は、今もなお、加速度的に発展し続けている。こうした技術革新は化学の技術に負うところが大きく、その結果、目まぐるしく現われてくる新製品は、我々の日常生活を大きく変えようとしている。その反面、技術革新の落とし子である化学公害も問題になっているが、生み出したのが化学であると同時に、それを解決してゆくのも化学である。こうしたことにも目を向けたい。

展 開

「物質と原子」では、まず化学反応を巨視的に観察することから始まり、歴史的発展過程をたどって、原子・分子の概念を導入する。さらに、得られた種々の事実を説明するのにもっとも妥当なモデルを形成し、モデルを通して物質の“なりたち”や“しくみ”を考察する。また、元素記号を導入し、原子・分子などの具体的モデルと関連させて、その有用性を理解する。

「物質の集合状態」では、導入した粒子の概念を物理現象にも適応してみる。実験事実に基づく“気体の法則”から、“気体分子運動論”へ至る過程は、「事実の集積 → 知見の粗立て → 法則化 → 理論化 → 法則、および諸性質への理論の適応。」といういわゆる科学的方法がいかにうまく利用されているかを学ぶのによい例である。さらに、実在気体が一般の気体の法則から“ずれ”をもたらす事実より、気体分子運動論の不備を指摘し、分子間引力を想定、ついで液体・固体を構成する粒子の間にはたらく力へと考察を進める。溶液についても、溶媒分子と溶質粒子の間にはたらく力を中心に、溶解現象を考える。

「化学反応」では、化学のもう一つの面、エネルギーに目を向けてみる。化学反応に伴う熱の出入りを分子の内部エネルギー変化の観点から、また、反応の速さ、反応機構についても、徹視的立場より検討する。化学平衡に於いては、多くの具体例よりその概念を形成した後、平衡定数を実験的に求めると共に、反応の速さから演繹的に求めて対応してみる。化学反応の代表例として、酸・

塩基反応(プロトン授受)、酸化・還元反応(電子授受)をとりあげ、平衡の立場、エネルギーの変化からながめてゆく。

「物質の構造と性質」では、原子の基本的性質を決める電子の挙動とその配列について考察し、その原子を結びつける化学結合へと導く。また、化学結合のタイプとその特性との関連性を把握し、元素および化合物の性質を周期律表をもとにして、系統的かつ総括的に考察する。

最後に、「炭素化合物と高分子」では、炭素の特殊性について考えてみる。炭素原子は相互に種々の強い結合をつくることのできるため、多種多様の構造の化合物ができることを知り、その構造と性質の関係、および反応性を系統的にながめてゆく。化学工業に於ける有機化学の応用例として合成高分子化合物、生体に関係深い物質として、天然高分子化合物をとりあげる。

以上の内容を第8学年より第6学年までの4学年で学習するが、最後の第6学年は選択制をとっている。第5学年までに物理化学の初歩と無機化学の原理を、第6学年では有機化学を、という配列は一応のまとまりをなしているものの、我々の身のまわりに存在するものの多くは有機化合物であり、化学を選択しなかった生徒がそれに対する知識を持合せていないという事に問題があるようにも思われる。この点、もう少し検討してみたい。

4 生 物

自然科学や科学技術の進歩につれて、高等学校生物の内容は、加速度的にむつかしさを増して来ている。そのため消化不良を起し、ついて来れない生徒が出はじめている。また、一方、大学入試に必要なことを口実に、生物学をうとんずる生徒も出て来ている。いずれの場合にしても、生物教育上、大きな問題であるといわざるを得ない。ヒトが生物である以上、できるだけ生物についての知識、理解を深める必要があると思うので、上述のような生徒が出て来た場合、これを消極的に解決しようとする(例えば、必修単位数を少くする)のではなく、積極的な解決法が検討されるのでなければならないと思う。すなわち、どうすれば生物への学習意欲を高めることができるかについて、研究がなされるべきであると思う。私達は、生物への学習意欲を高める方法として、次の2点を考慮した。

(1) 教科内容の精選と系統立った配列。

(2) 生物(いきもの)とそれをとりまく自然に対する知識・理解と愛着心の育成。

まず第1点について — これは今回出された新指導要領においても強調されている所である。生物の場合、教科内容の展開に際して、どのような系統性をもたずかについては、いろいろな説がある。それで項目の精選に当っては、どの説に従うかによって事態は変ることであろう。しかしいずれにしても、“精選する”ということは、これによって一項目当りの検時(学習)時間を従来よりも長くできることを含みとしていることに注目すべきである。従来は多くの事項を教えようとするために、ともすれば上すべりになりがちであった。ここからは真の学習意欲は湧いてこない。一つの系統の上ののった一項目と、じっくり取り組み、そのことを深く理解して始めて、さらに学ぼうとする意欲が湧いて来ると思うのである。ただしこの場合、時間的關係から、かなり思い切った項目の削除がなされねばならなくなる。しかし実際には系統的にも削除しかねるものも出て来てジレンマの状態になりかねない(注:項目の削除にブレーキをかけるものとして大学入試は見逃がせない。)

私達は、このジレンマを乗り越えるために、教科内容が中高で重複する所をできるだけけずり、

中高を一本化することによって時間的にも節約ができるように試みた。

次に第2点について——都市の膨脹と共に、昨今は都市の近郊においても、自然と真の意味で触れ合う機会が少なくなった。昔はごく身近かな所にいくらかでも見られた生物が影をひそめ、生徒自身が多くの生物と接する機会が少なくなってきた。そこからは、生物に対する親しみも愛着心も育ってこないであろう。生物を理解し、これを受する心を育成するには、まず生物に接することから始めなければならない。身近かに生物を得られない時代になってしまったが、こうゆう時だからこそ、自然や生物をみつめ直す必要があるのだともいえる。自然界の生物を深く理解させることは、学習意欲を盛り上げる上で力があるというだけでなく、人間による自然破壊に大きなきどおりを感じる人間を数多く育てる上でも重要である。生物に対する愛着心を育成し、これを教育面に活かす試みは、中学校の頭初からなされるべきだと考える。なぜなら、この時期は生物を、子供の時のように遊びの対象としてではなく、コレクションの対象へと転換して行く時期だからである。コレクションに興味を感じている時に、生物のコレクションをさせ、そこから教育的なものを引き出して行きたいものだと考える。

中学の新指導要領のもとに作られた教科書を見ると、教育の現代化を急ぐ余り、中学の低学年から、科学的探求の学習が取り扱われている。理科教育において、科学的探求精神を育成し、科学的方法・見方などを鍛錬することは、大変重要なことであるが、これは上級学年に進むにつれてその比重を増すべきものであって、低学年の頭初から何でもかでも探求の学習でなければならないというのはおかしい。実際このような扱いかい方では、生物の多様性を扱かう時ですら、生徒は教師の準備した少数の生物を前に、その場限りの観察や考察をするのみで、その生物が普段どんな所に棲息し、どんな生活をしているのか、いつまでたっても知らないままで終ることになりかねない。この場合、一面的なことは分っても、全体的なことは分らないということになる。幸い本校は、周囲に未だ多くの自然が保たれていることでもあるし、絵にかいた生物でなしに生きた生物を扱かえるものと思っている。

以上のような見地から、低学年に於いては、採集に端を発し、自然界における生物の観察を中心に、生態や形態や分類関係を扱かうことにした。一方、高学年になると、現象を論理的にとらえ、推理・洞察する力もつき、科学的思考力を伸ばすのに適してくる。そこで前述、第1点で述べたことをふまえ、生物の生命現象を、個体の形成、個体の生活、集団の現象のレベルでとらえ、生物の進化性をバックボーンとした系統的展開を試みることにした。

5 地 学

ね ら い

地学現象では、原因と考えられる要素が非常に多くて、解析をすすめる際に、どこから手をつければよいのか、とまどうことがほとんどである。

自然をあるがままにとらえ、その情報を処理する手法を学びとること、これには、努力の積み重ねと長い年月をかけた測定や観察の継続が必要であろう。

動かないものたとえに挙げられる山でさえも、1万年、1億年単位の時間の目でみれば、決して動かないとは言えないものである。また、川原にころがっている石さえも、地下深いところで高圧力下におかれている状態を想像すれば、私達が手にとって見ているときのようなものではない別の石であるに違いないであろう。

私達は、この地学領域を通じて、日常的なスケールから脱却し、そのときにはじめて了解できるさまざまな地学現象に目を開くことによって、このような解析法もあるということを生徒達に知らせたいと考えている。

学習指導の系統と探究の要点

まず身近かに見られる現象として、水の働きに注目することにする。ここでは日常的な時間の尺度をこえて、何万年、何億年を経た地表面に対する働きかけ、想像を超えた大容量の水の作用によって、特徴的な地表面の形状の由来に目を向ける。

地球表面の特異であることは、他の天体との比較によって明らかになってくる。これには、近くにある月と太陽を取り上げるのが好都合である。ここでは居ながらにして宇宙空間を隔てた遠距離にある天体の大きさや形、表面のようすを知る手法の工夫が必要になってくる。さまざまな方法を使って、より詳しく知ることによって、地球との違い、それぞれの特徴が明確になるのである。

天体相互の距離測定については、ものさしの使用は不可能である。ここでは別の方法の工夫がいくことになる。相互の距離が明らかになると、次の疑問がでてくる。すなわち、一組の天体間の距離が一定に保たれていることから、万有引力という考え方の導入が必要であること、そして、この関係がさらに遠方の天体にまでおよんでいることから、太陽系の天体として統一的に説明ができるということである。

私達の目を、もっと遠くまでひろげるには、距離測定の方法の限界をのり超える必要にせまられる。絶対等級やHR図、ケフェウス型変光星を利用する例でみるように、手法に限界がきたときに別の手法を見出し、さらに新しい法則性をもとにして、遠方の天体にまで適用していく。ここにあらわれている人類の知恵に注目したい。

HR図は、恒星の進化や宇宙の進化の探究に大いに役立っていること、そして、身近な太陽はごくありふれた普通の恒星の一つであることも解明されていくことになる。

太陽は、特別な天体ではないとしても、私達にとっては、やはり偉大な存在であることには変りがない。水や大気の循環をはじめ、気象現象の多くは、太陽エネルギーが原因になっている。要素が多くて、常に変動している気象現象を、どのように解析すればよいのか。局所的な不均衡が常であるような現象については、スケールの小さい実験室でおこる現象と対比はできない。ここでも巨大なスケールの大気の物理事象についてその違いを明らかにしたい。さらに、この大気や水がどこからできてきたものであるかについて探ってみることも忘れてはならないことである。

以上を第8学年で指導し、8単位時間を割当てることにする。後半は、地表面および地下のようすを探究することになる。第6学年で2単位時間を割当てる。

岩石が受ける変成作用や地かく変動は、局所的な不均衡を巨視的に見た場合の均衡との関係から理解が可能になってくることである。

火山活動の際の激変をおこすエネルギーの根源はどこにあるのか。これらの説明は、地球の過去と将来を考察する鍵になっているのではない。

地球の内部構造を知る方法として、地震波を利用することは極めて有効である。直接手を触れることのできない対象物に対する解析法としては、天文の分野にも例はあった。対象が変われば、その手法も変わるの当然としても、不明な事象にぶつかったとき、手がかりを求めて解明を進めていく方法をよく指導したいところである。

地球や大気、そして、宇宙についても原始の時代から今日に至るまでの進化についての探究が必

要であろう。ミクロに見た現実の姿には、ほとんど変化が認められなくとも、長い宇宙の歴史や地球の歴史を通じて、種々の証拠を解明していくとき、非常に大きな変化が続いているということと、いろいろな事象相互に関連があり、均衡が保たれていることに注目する必要がある。

これらのことは、人間の営みによる環境への働きかけが、将来どのように均衡の状態が移動していくかを知る手がかりにもつながることである。世間的にさわがれている公害についても、新しい均衡へ移動する過程におけるミクロなアンバランスの状態の一面であるかも知れないということを強調すべきことであると考えらる。

中高一貫学習指導計画試案

一般理科

学年	項目	内容	学年	項目	内容
1	1. 科学のはじめに ア. 観察と推論 イ. 実験 ウ. モデルの構成 2. 物質の特性 ア. 測定 イ. 質量 ウ. 密度 エ. 融点と沸点	情報の整理、分類 記録 推論 実験の設定 実験目的 条件コントロール データの解釈、推論 モデルの有用性と限界 測定と誤差 有効値 物質の量 質量の保存則 固体の密度 液体の密度 気体の密度 融解と凝固 融点 沸点 純物質と混合物		オ. 溶解度 2. 物質の分離 ア. 溶媒と溶解度 イ. 分溜 ウ. クロマトグラフィー エ. 昇華法その他 オ. 気体の分離 4. 熱 ア. 熱膨張	固体の溶解度 溶媒 溶解度の温度変化 気体の溶解度 再結晶 ろ過 分別結晶 液体混合物の分離 微量物質の分離 ペーパークロマトグラフィー 昇華性の物質の分離 傾しゃ法 沸点の相違による分離 溶媒に対する溶解度差による分離 化学的性質の相違による分離 固体の膨張(線膨張) 液体の膨張(体膨張)

学年	項目	内容	学年	項目	内容
	イ. 温度と熱 ウ. 状態変化と熱 エ. 熱の移動	気体の膨張(体膨張) 熱量 比熱 気化熱 融解熱 伝導 対流 放射		2. 光 ア. 光の反射 イ. 光の屈折 ウ. 色	光の直進 平面鏡 球面鏡 実像と虚像 屈折の法則 屈折率 とつレンズによる像 おうレンズによる像 光の分散 スペクトル 吸収
2	1. 電気と電流 ア. 電圧と電流 イ. オームの法則 ウ. 電気抵抗 エ. 回路と抵抗 オ. 電流の熱作用	摩擦電気 電流とその測定 電圧とその測定 電圧と電流の強さの関係 抵抗 針金の電気抵抗 物質と電気抵抗 回路中の抵抗 抵抗値と電圧差 ジュールの法則 電力		3. 電流と磁界 ア. 磁石の性質 イ. 電流の磁気作用 ウ. 電磁誘導	磁極 磁界 電流による磁界 コイルによる磁界 磁石による誘導電流 相互誘導 レンツの法則

物 理

学年	項目	内容	学年	項目	内容
3	1. 力 ア. 力の性質 イ. 力のつりあい	重力 万有引力 ばねと力 力の表わし方 力の合成と分解 力のつりあい 張力・抗力		ウ. 力のモーメント エ. 流体の圧力	摩擦力 斜面 モーメント 偶心 重心 重力と圧力 圧力のつたわり

学年	項目	内容	学年	項目	内容
4	2. 運動とエネルギー				コイルとインダクタンス 交流 交流回路 原子と電子 陰極線 電気素量 電子管 電子回路
	ア. 物体の運動	変位 速度 加速度 一直線上の運動		オ. 電子	
	イ. 運動の法則	落下運動 放物運動 運動の法則 円運動と向心力 単振動 運動量 運動量の保存則 衝突			
	ウ. 力学的エネルギー	仕事と仕事率 位置エネルギー 弾性の位置エネルギー 運動エネルギー 力学的エネルギーの保存則	6	4. 波動と光	
	エ. 熱と仕事	内部エネルギー 熱と仕事 エネルギー保存の原理 気体の分子運動		ア. 波動	単振動と波動 横波とたて波 重ね合わせの原理 波のエネルギー 干渉・回折 音波 トッブラー効果 共振 光の速さ 反射・屈折 干渉・回折 偏光 スペクトル
5	3. 電気			イ. 光波	共振回路 電磁波 X線
	ア. 電界	クーロンの法則 電界 電位差と仕事 電気容量		ウ. 電磁波	
	イ. 電流と電圧	直流回路 電流と仕事		5. 原子の構造	
	ウ. 電流と磁界	電流による磁界 磁界中での力		ア. 波動性と粒子性	光電効果 コンプトン効果 電子の回折
	エ. 電磁誘導	磁界の変化と誘導電流 磁界とエネルギー		イ. 原子	原子のスペクトル 水素原子の構造
				ウ. 原子核	放射線 原子核の構成 原子核の反応 核エネルギー

化 学

学年	項 目	内 容	学年	項 目	内 容
3	1. 物質と原子 ア. 化合物と元素 イ. 原子と分子 ウ. 化学量 エ. 化学式 オ. イオン	化学変化 質量保存の法則 定比例の法則 気体反応の法則 元 素 元素のスペクトル 原子モデル 倍数比例の法則 分 子 分子の大きさと質量 原子の大きさと質量 原子の構造 原子量とアボガドロ数 化学式量 モ ル 組成式 分子式 構造式 化学反応式 電解質、非電解質 電気分解 イオンモデル 沈殿反応 イオン反応式		イ. 溶 液 3. 化学反応 ア. 化学反応とエネルギー	実在気体 液体の中の分子運動 固体の中の分子運動 溶 解 溶液の濃度 溶液の性質 反応熱 反応熱と内部エネルギー ヘスの法則 化学反応の速さ 化学平衡 質量作用の法則 平衡の移動
	4	2. 物質の集合状態 ア. 気体、液体、固体		分子運動と拡散 気体の圧力と密度 ボイル・シャルルの法則 理想気体の状態方程式 分 圧	5. イ. 酸・塩基反応 ウ. 酸化・還元反応 4. 物質の構造と性質

学年	項目	内 容	学年	項目	内 容
	ア. 原子の構造 イ. 化学結合 ウ. 分子の構造 と性質 エ. 周期律	原子モデル 電子のエネルギー単位 イオン結合 共有結合 金属結合 極 性 水素結合 分子間力 結晶の構造 典型元素とその化合物 不活性ガス アルカリ金属 ハロゲン元素 第 3 周期の元素 遷移元素とその化合物 遷移元素の特徴 錯 塩	6	5. 炭素化合物と 高分子 ア. 炭素化合物 の構造と反応 イ. 合成高分子 化合物の構造 と性質 ウ. 天然高分子 化合物	炭化水素 酸素を含む化合物 窒素を含む化合物 構造の決定 プラスチック 繊 維 ゴ ム 有機高分子化合物 コロイド溶液

生 物

学年	項目	内 容	学年	項目	内 容
1	1. 採集と飼育 ア. 植物採集 イ. 動物採集 2. 生物の構造 ア. 植 物 イ. 動 物	採集道具(管理と使用法) 採集する上での注意 標本の作成・保存 栽培法 (植物に準ずる) 飼育法 ※生態系の採集 カビ・コケ・種子植物 顕微鏡の扱い方 プレパラートの作り方 カエル・バッタ		3. 生物と環境 ア. 光 イ. 温 度 ウ. 水と溶質	解剖用具の扱い方 光合成 光周性 光に対する適応 視覚 蒸散と落葉 体温の調節 越冬法 水平・垂直分布 移 動 浸透圧 ガラス器具の扱い方

学年	項目	内容	学年	項目	内容	
	エ. その他 オ. 生物相互の関係	計量器の扱いかた 溶存酸素 水素イオン濃度 水質の汚染 — 公害 土壌 空気 群れの形成 社会生活 食物連鎖		ウ. 発生	有性生殖Ⅱ(雌雄性) 減数分裂 生殖細胞とのでき方 種子植物の受粉と受精 および種子形成 動物の排卵とホルモン 動物の受精と初期発生 後期発生と器官形成 発生分化の機構 動物の変態	
2	4. 生物の分類 ア. 植物界 イ. 動物界 ウ. 自然分類	細菌類・ランソウ類 ケイ藻類・紅藻類 褐藻類・緑藻類 菌類・地衣類・蕨苔類 シダ類・裸子植物 被子植物 原生動物・海綿動物 腔腸動物・扁形動物 線形動物・輪形動物 環状動物・軟体動物 節足動物・棘皮動物 原索動物・脊椎動物 分類の基準 — 種について 命名法 分類段階 ※検索表について		エ. 成長 オ. 遺伝	動物の成長 種子の発芽と植物の成長 メンデルの法則とその背景 遺伝子の本性と形質発現 メンデル遺伝について 遺伝子の相互作用(キセニアも含む) 連鎖と交叉 交叉率と染色体地図 遺伝による性決定 伴性遺伝と限性遺伝 外因による性決定と性転換 細胞質と遺伝 純系説と個体変異 突然変異 集団遺伝 遺伝学的应用(育種・優生など)	
4	ガイダンス 5. 個体の形成 ア. 細胞 イ. 生殖	生物の学び方 細胞の構造と機能 体細胞分裂 核酸(染色体と遺伝子) 無性生殖 有性生殖Ⅰ(接合ほか)		5	6. 個体の生活 A 植物個体の生活のしくみ	植物の体制

学年	項目	内容	学年	項目	内容
	ア. 植物の栄養	栄養素の吸収 (水分・無機質の吸収) (原形質膜の性質) 蒸散作用 光合成 化学合成 窒素同化作用 同化物質のゆくえ 植物の従属栄養	6	C 動物個体の生活のしくみ II	刺激と反応
	イ. 植物の運動	植物の成長運動(屈性と傾性)		ア. 感覚	視覚 聴覚 平衡感覚(筋紡錘も含む) 臭覚と味覚 皮膚感覚(側線も含む) ニューロンと神経系 興奮の伝導 脊髄と反射 大脳・脳幹・小脳 自律神経系
	B 動物個体の生活のしくみ I			ウ. ホルモン	ホルモンによる調節
	ア. 動物の栄養と消化	従属栄養性について 栄養素とその必要性 消化の方法と消化器官 三大栄養素の消化と吸収 体液による栄養素の運搬	7 生物の集団	ア. 個体群	個体群における生活現象
	イ. 循環	体液の組成と機能 免疫と抗体 血液の凝固 血液型とその判定 循環器の構造と機能		イ. 生態系	生物共同体の形成と変遷 食物連鎖と生態系 自然界における物質循環 バイオーム(動・植物の地理分布)
	ウ. 呼吸	呼吸器と呼吸運動 血液によるガスの運搬 解糖と酸素呼吸 発酵と腐敗		ウ. 集団の遺伝と進化	集団の遺伝現象 小進化
	エ. 排出	排出器の構造と機能		エ. 自然の保護	自然の保護
	オ. エネルギー交代	筋肉とそのはたらき 生物電気 発熱と体温調節 発音と発光			

地 学

学年	項 目	内 容	学年	項 目	内 容
8	1.	ア. 流水のはたらきと地表の変化 イ. 地球・月および太陽の形状と距離 ウ. 太陽と地球の運動 エ. 太陽系と宇宙の構成 オ. 地球・恒星宇宙の進化	陸水の営力 堆積岩のでき方 地層のでき方 地表における岩石の変化 地球だ円体 ジオイド 月 太陽の表面 太陽や月までの距離 万有引力 重力 地磁気 天 球 自転と公転 太陽時 転向力 潮汐現象 惑星の運動 ケプラーの法則 恒星の集団 惑星・恒星の性質 HR 団 天体や宇宙の進化	ウ. 天気と気象要素との関係	季節風 気団と前線 高気圧 低気圧 台 風 梅 雨 気象要素と天気変化
				2.	ア. 大気と水の循環(太陽放射のエネルギーと地球との関係) イ. 大気中の水のはたらき
6	3.	ア. 地かくの変動と地表の歴史 イ. 火山活動とマグマの性質 火成岩の特徴 地かく中の水のはたらき ウ. 地球の構成 地球内部のエネルギーと地震 エ. 自然界のつりあいと保護	変成作用と変成岩の特徴 アイソスタシー 地中での岩石の変化 火山と地かく マグマの性質と進化 火成岩のでき方 岩石に含まれている水のはたらき 鉱物の特徴 地質調査 地 史 マントルの対流 地かくの厚さとモホ面 地震と地球の内部構造 地かくと古生物の変遷 気候の永年変化		

今後に残された課題

以上、理科に於ける中高一貫学習指導計画の試案について述べて来たが、未解決のことも数多く残っている。その主なものをここに指摘し、今後の研究の指針としたい。

- (1) 今回はおもに中高における縦のつながりについて検討し、教科間における横のつながりを検討するところまで手がまわらなかった。いずれ横のつながりをも検討しなければならない。また、小学校とのつながりを検討することも大事なことで、これも今後に残された課題である。
- (2) 教科内容の精選およびその系統的配列についての研究も、十分にできたとはいえない。今後とも研究が続けられなくてはならないだろう。
- (3) この試案でやる場合、独自のテキストを作らない限り、真の目的達成はむずかしい。中学の段階では無償配布になる教科書を、どのように扱かうかも問題になる。テキストに関する件は大きな問題点として残りそうである。
- (4) この試案の実施は理科だけでなく、学校全体が中高一貫の教育体制にならない限り無理である。したがって、学校全体が1日も早く、この体制をとれるよう、努力しなければならない。
- (5) この試案の評価に当っては、これを冷静に評価してもらえる機構が、作られなければならない。そのためには、全学的な、評価のための協力体制の作られることが必要である。
- (6) 新しい試みを行なうにあたっては、予算の裏付けが必要となってくる。この試案を実施するとなると、それに必要な費用をどのように獲得するかについて考慮しておかなくてはならないだろう。

質問法による考案設計学習の試み

上 浦 一 道

はじめに

「実習・実践をとおしての学習」によって生徒たちが主体的に学習し、それによって教育効果を上げることこそ改訂期を迎えた技術・家庭科の役割であろう。

今回の改訂は指導目標の明確化や指導内容の具体化など部分的な手直しであったが、技術・家庭科が創設以来十年を経過し一応の定着をみた現在、指導方法に教師の創意とくふうが必要である。質問法による考案設計の試みは、木材加工学習の教育的効果を高めるための模索の一端である。

1 質問法実施のねらい

考案設計を伴わない木材加工学習（製作学習）にはおよそ教育的な意味はない。考案設計と製作とが一元的に行われなければならないものである。

考案設計の学習をすすめるにあたっては作品の機能・構造・材料・加工法についての適格な資料や実験・実証と生徒の発達段階から考えて、考案設計についての情報の提供が必要である。この情報（生徒にとっては研究のテーマとなる）の提供の手段として質問法の形式をとった。設計についての資料や実験・実証と質問に答えることによって得た知識とが総合的に判断して、思考活動の高まりとともに独自の作品がつくりだされ、教育的効果が上がると考えた。

今回は中学一年の木材加工の授業を対象として質問法を試み、質問内容は作品の機能と形態の変化との組合せに限り、見取図をかいて思考できるようにくふうした。

さて質問法の具体的内容を述べる前に考案設計学習について一二考えてみたい。

2 製作学習における考案設計の教育的なねらい

「設計」ということばには「こんなものをつくりたい」という夢や欲求、見つけることのたのしさ、独自性、発展性、科学性がある。技術科教育の中ではとくに大切にしたいことばの一つである。こんな設計についての視点から考案設計学習の教育的なねらいを次のように考えてみた。

① 独創性・創造性を養う。

子どもたちは実に柔軟な思考ができる。このときに創造性を高めたい。

② 科学的思考力を養う。

考案設計は多様な性格をもつものである。単なるスタイリングだけではない。これら設計の諸条件を科学的に追求し、多角的に思考していく態度を養う。

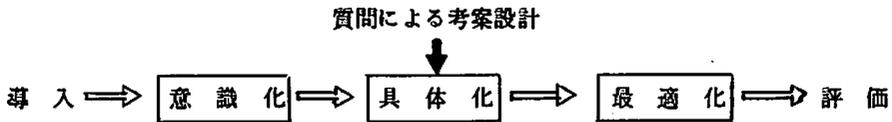
③ 合理的思考力や総合的判断力を養う。

考案設計の諸条件を全体的に組立てる——構想をまとめる——ことにより、合理性や総合的判断力を養う。

これら考案設計のねらいは当然製作学習のねらいでもある。製作によってはじめて「たしかめ」がなされ、さらに技術的な能力が身についたならば、この学習は意義があったといえる。

ところで上記のような目的を達成するためには適切な指導内容と指導方法が必要である。従来の製作学習は教科書を受入れがちであったことを反省しなくてはなるまい。そこにはすでに与えられたものしかなく、「設計する」・「創作する」という内容は、殆んどなかったといっよい。また技術科教育を考えていく上で産業や生活との結びつきを強調しすぎると、実用主義的・技術経験主義的な学習におち入りやすくなる。考案設計経視のいわゆる「マネ」・「模作」の教育である。技術科の教育が「役に立つもの」をつくる教育でなく、「つくることが役に立つ」教育であるという見方にたって指導の方向を考えていかなければならない。

3 考案設計の3つの過程（概要説明）



意識化とは 作ってみたいという欲求（設計対象）をもつこと。その欲求に対してすでに体得した知識を発展させる思考と実践の段階であるとした。

具体化とは 作ろうとする作品に対してくふうすべき点を見ぬき、作品を構成していく上で必要な知識を得るための思考と実践の段階であるとした。

最適化とは 具体化の中から実現可能なものを見つけ出し、目的（作ろうとする作品）に対してその目的を最大限に実現していくための総合的な思考と実践の段階であるとした。

4 指導計画例 板材を利用した木材加工

中学一年生男子

学習項目	学 習 活 動	学 習 指 導 の 主 な ね ら い
導 入	略	略
考案設計1 (意識化)	限られた大きさの板材から、作品（アイデア）をできるだけ多く考え、構想を見取図にかいてまとめる。 材 料 200×1000×20 材質 ラワン	思いつきやつくってみたいという欲求が思考活動の場となるが、これによって考案設計への問題意識をふかめる。 アイデアを豊かに表現する能力を養う。

<p>考案設計 2 (具体化)</p>	<p>(1) 考案設計 1 のうちつくりたいと思う作品の一つを選択し、設計の諸条件を考え、作品の構想をねる。</p> <p>機能・構造・材料・加工法についての研究</p> <p>(2) 1～10の「質問」に見取図を描いて答える。</p>	<p>主体的に問題を解決していく態度を養う。</p> <p>考案設計の諸条件を考え、課題解決のために多角的に思考し、追求していく態度を養う。</p> <p>実験・観察などによって科学性を養う。</p> <p>既成概念にとらわれることなく、構想に発展性をもたせる。</p>
<p>考案設計 3 (最適化)</p>	<p>考案設計 1・2 で得た結果を資料としてまとめ、最終作品の構想をねり決定する。</p>	<p>作品を再構成していく思考のくり返しによりさらに創意とくふうの能力を高める。</p> <p>合理的思考力や総合的判断力を養う。</p>

なお本校では、数年前から中学一年生の木材加工の題材を画一的なものではなく自由課題としている。題材は生徒個々の欲求によって決定し、資料を作成し製作するよう指導している。

5 質問の内容

問 次の 1～10 の質問に見取図を描いて答えなさい。それぞれの質問に、考えられる答えをいくら描いてもよい。

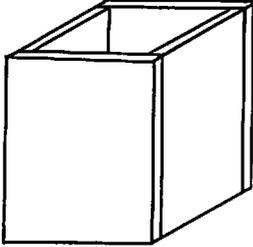
1. 考案設計 1 のうち、作りたいと思う作品はどんな形ですか。
2. なにかつけ加えるとどんな形になりますか。
3. なにか取り去るとどんな形になりますか。
4. 形を長くしたり、広くしたり、高くしたり、厚くしたりするとどうなりますか。全体的にそうしたり、部分的に形をかえるとどうなりますか。
5. 形を短くしたり、狭くしたり、低くしたり、薄くするとどうなりますか。
6. 板材を棒材に、棒材を板材にするとどんな形になりますか。
7. 上下を変えたり、左右を反対にするとどんな形になりますか。
8. 作品の一部を他の材料にかえたり、他の材料をつけ加えるとどうなりますか。
9. 上記のいくつかの質問を組み合わせると、どんな形ができますか。
10. 他にまったくちがった形は考えられないか。

この質問法の実施にあたってはオズボーンのブレイン・ストーミング法が参考になった。この方法で注目されるのは設計者の思考力を全ての制限からきりはなすことである。

6 作 品 例

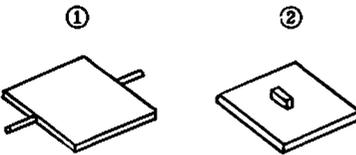
1) 質問による考案 (一部図面省略)

1



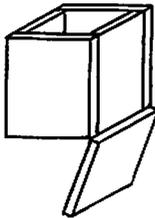
勉強机に置くゴミ箱である。

2



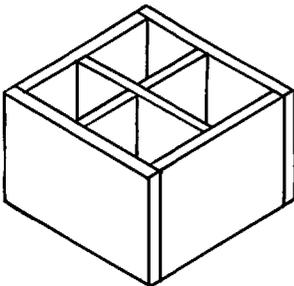
ふたをつける。②はありふれているが①は回転式でおもしろい。

3



取り去るのでないが、底の部分に「チョウツガイ」をつけると、ゴミを底から捨てられるので便利だ。またゴミ箱は底の部分がいつもきたなくなるので、こうしておくといつもきれいにすることができる。

4

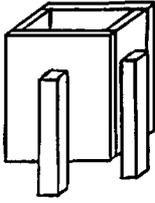


材料があればもう少し大きくしたらよい。2枚のしきり板を組立式にして、この形をいろいろふうすとおもしろいものができると思う。ゴミ箱だけでなく小物入れにもなる。

5 板材をうすくする。図は略。

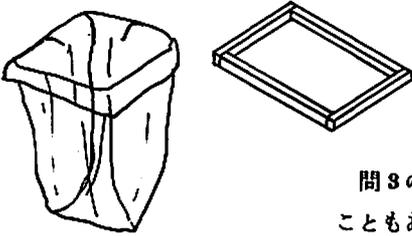
板材の厚さをうすくすると容積が大きくなる。

6



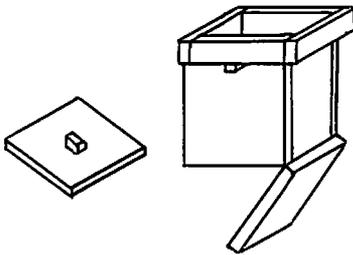
ごみ箱はきたないという感じがある。挿材をつけると、かっこうがよくなり机の上における。

8



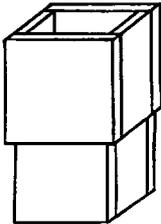
間8のようにすると底の部分がはずれてごみがでることもある。ビニル袋を利用するとこぼれなくてよし、ごみを捨てる時も便利だ。

9



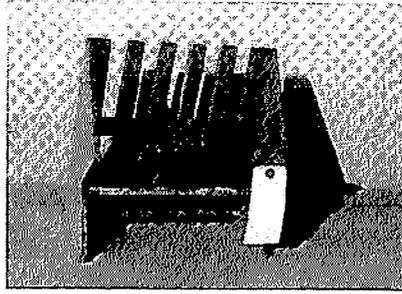
2と8と8をまとめた。ふたは④だとビニル袋がはいらないし、別にそのようにこったことをする必要もなくなってきた。

10



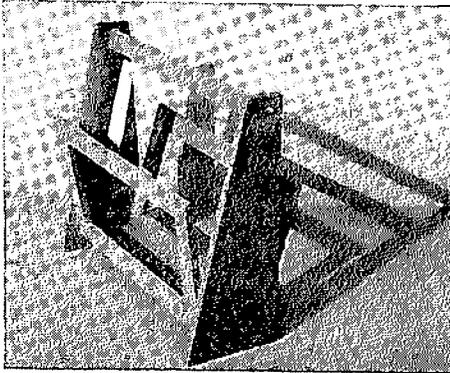
別の形といえないが、マス形のを二つかさねておくとごみの多いときは引きのばして使用できると思う。

2) 完成作品

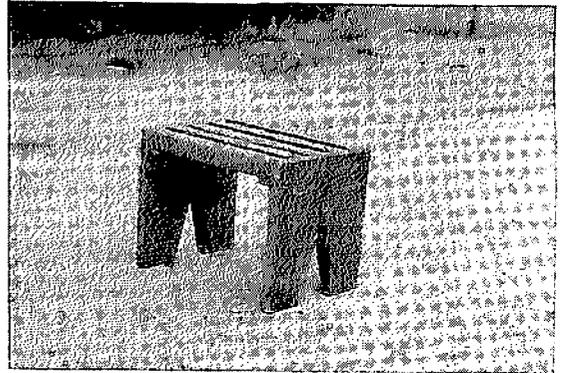


マガジンラック

マガジンラック



腰かけ



7 考 察

製作のテーマとして、構成的なものであれば何でもよいということでスタートし最適化できるよう努めてきたが、最終的に選び出された作品はやはり実用化をめざすものが多かった。まとめると次のようなものである。

家庭生活全体に役立つもの……牛乳箱、スリッパ立て、電話台

自分自身の生活に役立つもの……本立、マガジンラック、小物入

そして、質問法によってさまざまな作品ができ上がった。多目的に使用できるものもある。形を変形していくうちに使用目的がかわってしまったものもある。これが役に立つのかと思われる作品もある。しかしこれで良かったのではないかと思っている。学習指導の観点の最後は「どうなったか」という評価である。技術科においてもどんな作品ができたかという評価と同時に、学習の結果「生徒はどうなったか」という評価を大切にしなければならない。

質問法を採用したことにより、次の8つの点について学習を進めていく上でよい結果が得られたと思っている。

- ① 問いの質問によって最終作品の構想をまとめる者が多かった。このことは従来の製作学習は教科書が無批判に受け入れがちであったが、質問に見取図を描いて答えるため、作品の長所・短所を知り、更に比較検討を加えていく過程で子どもなりに自分の作品について価値感をもったことであると判断している。
- ② 質問に見取図を描いて答えるため、生徒は「形がなりたつか」という多くの疑問をもった。

そのため考案設計2の段階では質問に答えるだけでも四時間を費やす結果となった。考案設計は多様な性格をもつものである。今回の質問はとくに形態の変化と作品のもつ機能との組合せを重視したつもりであるが、例えば問4の拡大という方向について考えてみると、長く、広く高く、厚く……などがある。さらに問5の縮小という方向と組合せてみるだけでもますます形は複雑である。ましてその他いろいろな条件を作品に満足させることは子どもたちにとって困難な問題である。しかし質問という刺激を与え、より多くの疑問をもたせたことによって、従来と比較したとき、より活発な学習活動やグループ活動が展開できた。

- ③ 考案設計への興味・関心が学習前に比べてさらに分化した。興味・関心の内容については、「あれこれと考えること」「一つしかないものを考えること」「計画的に考えること」などのように、考案設計に対して具体化し設計のイメージを多少ともつかんだことである。デザインということばがよく使われている。しかしこのことばは日常的には外観的・表面的な形(スタイル)だけを指す場合が実に多いようである。デザインを設計ということばに訳した方がよいといわれるように、もっと内面的な内容をもったものであり、技術科教育においても考えなければならない問題である。

もう一つの興味・関心の内容は「自分で……できる」「新しい自分のもの」という興味・関心である。この木材加工を自由製作としたことも原因となろうが「自分で」という興味・関心を示したことは一応満足のいくものであった。学習活動において興味・関心の果たす役割は大きい。それは学習活動に対して示す生徒たちの積極性や内容への集中性の原因となるからである。技術科の製作学習が設計から製作まで数ヶ月を要するような場合はより重要な役割である。

反面、今後の課題として残された点もいくつかある。

- ① 方法上の問題であるが、この質問法によって前に述べたように疑問をもつ者が多かった。このことは結果としてよかった点であり、再考すべき点でもあった。
- a 形態の変化ばかりに気をとられて機能・構造との結びつきが不十分であったり、できない者があった。
 - b 質問に答える前に、できるかできないか、役に立つか役に立たないか、という判断がさきにたち、質問法の意図が充分果たされなかった。
 - c 質問の内容が系統性に欠けたため、作品をまとめるという点では苦勞した者があった。しかし同じ題材(例えば本立を一斉に製作する)の場合は質問内容と方法を整理すれば、より発展的に設計ができるのではないかと思う。
- ② もう一つは子どもたちが作品を考えて具体化していく中で機能をどう考えたかという問題である。機能研究は構造の研究と共に大切な学習活動である。ところがたいていの場合、機能についてどれだけ思考力を活用できたかといえばあまりできない。それは作品例がほとんど実用品をテーマとし、その実用品については既知の知識があるため、機能について思考できないというより、ほとんど気にしなくてもよかったわけである。例えば「本立」について考えてみると、本立の機能は「本を立てるものである」というように、すでに本立のはたらきや役割がわかっているわけである。本の整理法から出発し、本立の形や性質まで考えたとすれば多少発展的に思考ができたといえるものの、この機能の問題をどのように扱ったらよいか今後考えてゆきたい。

お わ り に

この実践の試みは技術的思考力の高まりと生徒の内面的な態度の形成の高まりを想定したものであった。しかしその成果について十分なたしかめができなかったことを反省している。ただ以前の学習に比べて、学習活動が活発であったことや生徒の考えだすアイデアがたしかに豊富であったことなど今後の授業研究をすすめる上で参考となった。生徒の主体性に根ざした製作学習の試みをつづけたいと思う。

参 考 文 献

- | | |
|----------------|-------------|
| 現代教育学 11 技術と教育 | 岩波書店 |
| 技術科教育法 | 松隈三郎著 |
| 人間工学概論 | 真辺・長町著 朝倉書房 |

レクリエーション

(生活とレクリエーション)

高 木 信 明

「はじめに」

この世に時間というものがある限り、人間の生活は時間に支配されている。こうしている間にも新しい糸で歴史と呼ばれる長い時間の帯が織られている。今日の目を見はるばかりの文明、科学の発展は長い帯から見ればほんの少し前から起こったようなものである。蒸気から巨大な力を造り出し、水車から電気を生み出して動力と明りを手にし、数年前には人工の星を打ち上げた。そして明日には人類は月に移住しているかも知れない。

この急速な文明の変化に対して、我々の生活自体は必ずしも即応できるものではない。この点に文化と生活の間に大きなズレが生じてくるのは当然の結果であり、このズレが現代人の心の潤滑油がきれた状態を作り出している大きな原因の一つである。

産業革命から由来する機械文明の急速な発展、それに伴う分業化の促進等の生産様式の変化は人間の労働生活を全く味けないものにしてしまっている。また経済の生長とそれに伴う都市化現象はますます人間関係を複雑にしてきた。

しかし、この目に見えない巨大な手によって押し流されてはいけない。我々はこのをはねつけ、更に大きなエネルギーを貯えようとする本質的な意欲を持っている。それは、我々の生活の中から自由に使うことのできる時間を生み出し、これを有効に活用することである。今後、ますます複雑化してゆくであろうこの社会で、人間が人間としての道を踏みはずさないよう生きてゆく為にも積極的に余暇を生み出し、それを休養や単なる気分転換、明日への活力の再生産という範囲にとどまらず、余暇の為の余暇としてとらえ、それ自体を楽しむという方向に進むことが最も必要であり望まれてゆくのではないだろうか考えるのである。

ここでは主に生活と Recreation について、Recreation の持つ意義と、我国での Rectea-tion のとらえ方、そして生活時間からみた余暇活動の実態について考えてみた。

1 Recreation の意味

Rec は “やゝ消極的な形の遊戯的活動” と定義されてきた。現在では能動的参加の要素が強まってきたとはいえ、Rec を、働くことの反対、つまり “遊ぶこと” としてだけとらえ、Rec の持っている本来の価値を自らの手で放棄している。

Rec (Re-creation) は、再び creation する、つまり「もう一度、つくる」ということである。これは生活の中心が労働におかれていることを示している。一生懸命に働いたあと、休憩をとり息抜きそして再び働くことであり、休息は労働の為であり Rec は常に能率よく働くという目的の為の手段とされてきたのである。日本人は勤勉であることを誇りにし、事実、今日がその結果である。しかしこの驚くべき発展の裏には多くの無理がかゝっていたのである。人間は、時には歯車であり、一本のネジギでしかなかった。それがやっと最近になってそのことに気づいて

“人間性の回復”が種々の形で叫ばれている。この声が強くなるにつれて Rec はその姿を変えてゆかねばならないのである。

John, F: Henly は Rec にもっと広い概念を与えている。彼によると、それは全ゆる表現での遊びと、音楽、劇、工芸や特に人生を豊かにする為の創造的活動を含んでいる。Rec には非常に多くの形があるが、どんな場合も次のような基本的特徴が認められる。

- ① Rec は自分の欲求から自分で選択して行なうものである。強制されるものでなく、自己の内部からの欲求にかられて行なうものである。
- ② Rec 活動は、それを行なっている人にすぐに直接的な満足を与え、それによって自己表現の機会をもたらす、楽しみを引き出すものである。

このことから、「Rec は活動そのものの性質よりも、活動に参加する人々の心のあり方にかかっている。」ということができる。

ここでもう一つ強調したいことは、食事が単なる栄養の補給の意味だけでなく、味つけをし、飾りつけそして家族や親しい友人と談笑しながら“食べること”を楽しむように、明日への労働の為だけの息抜きから脱皮してゆくべきであろうと考えるのである。

2 生活構造と Recveation

(ここでは主に家庭との関連から Rec を診断、分析してみる。)

日本の家庭生活の中で、いわゆる Rec 的な機能が、これまでどのように位置づけられてきたかそしてその家庭がどのように変化し、それに伴って Rec はどう変化してゆくのか、まずこれまでの家庭生活と Rec はどうあるべきかについて考えてみよう。

日本の文化、生活習慣は、日本が島国であること故に育ってきたであろう閉鎖的、非開放的な民族性に根ざしていることに起因して、他の民族に比して底抜けに明かるい陽気さは見当らず、控えめで狭深的に育ってきた。その背景には宗教の精神が大いなる影響を及ぼしているのを見のがしてはならない。

このような流れの中で、Rec 的行為としての華道、茶道、舞踊などをとりあげてみると、一般的に個人が中心であり、集団で行なうものが非常に少ないことに気づかねばならない。これらは娯楽、社交的要素に加えて、技と精神の融合を目指し、技術を追求すると同時に、人間としての深まりを求めている。技法を身につけ、精神の集中による悟りを追求するのも Rec の一つの姿であろう。しかし大ていものは流義とか難しい作法があって、それを知らない者はすすんで参加できにくい雰囲気をも持っている。他の人と楽しみ合うことより、個人の人格を高める為の教養としての性格を持っているのが特徴であり、ここに日本人の Rec に対するとらえ方の一端がうかがえるのである。

次に家庭の変化と Rec についてスポットを当ててみよう。

(1) Rec は家庭単位、もしくは小さな地域での極めて小集団で行なわれていた。しかも家庭の中においても家族のメンバーが同じ立場で参加できるものは殆んどなかったのである。長い間の封建的な社会の中での家庭は、父家長中心の大家族であり、婚姻、就職などは勿論のこと日常のこまごまとしたことも全て家族の一人一人が自分の思うままにできなかった。自分の欲求から自由に選

扱する余地などは、とても家族全員にはなかったのである。それに、女性に対する扱いが一人前でなく多数の者が参加できるような催しであっても飯食の準備接待に追われて同じように参加することは必ずしも自由ではなかった。また、そうすることがむしろ当然であり、美德とさえ考えられていた。階級の秩序は家庭の中でも明確に位置づけられ、生活の中心を家長が握っていたのである。

(2) 経済の生長に伴う種々の近代化は、生活構造を大きく変化させ、家庭にもその波は押しよせてきたのである。

まず、住居と仕事場が分離してきたことである。仕事場が次第に大規模なものへと発展し、機械化、工場化と近代的な方向へ移行してゆくのにしたがって、家庭はその機能を十分に発揮できるようになってくるのである。家族がそれぞれ外へ出るようになり、家庭中心の血縁的つながりから職場中心の利縁的なつながりへと生活範囲が拡大し、新しい人間関係が生まれ、そこに家族とは別のメンバーによる Rec の機会が誕生してきた。家族単位、近隣地域での極めて小集団でしか行なわれなかった Rec はここで新しい場面を迎えるのである。

職場と分離した家庭は、家族が独自の収入を得るにしたがって、家長中心の古い家族制度は次第に崩壊し、核家族家庭となってゆくにつれ、家族が同じ立場で参加する Rec にその姿を変えてゆくのである。

(3) 職場と家庭の分離と共にもう一つ注目すべきことに教育制度の確立がある。家庭の重要な機能の一つである子供の教育の場が、家庭から外に向かっていることである。子供の教育が家庭中心から学校(地域)へ移り、家族はますます個別の生活環境を拡大してゆくのである。また、女性が家庭から社会に積極的に出るようになり、家族のそれぞれが Rec に接する機会が多くなったことは、Rec のあり方や方法にまで大いなる影響を与える要因となったのである。

(4) このように家庭のメンバーが血縁的なつながりや近隣の小集団での交流から次第にその範囲を拡大し、それぞれの集団社会を構成するメンバーの一員となってゆくにしたがって、roll-switching(立場の変化)現象が生まれてくる。例えば、家庭では夫として、また父親として、そして職場では係長として、街で買物をする時には客として、といった具合にその立場が変化するのである。立場の変化は場合によってその人の考えや行動を少なからず制限し、また反対に解放する。拘束的な立場にあり、周囲もそれを意識している場での Rec は本来の姿ではない。このことは現代社会での Rec を、また将来の Rec を考えてゆく時に重要な点となるのである。

何故、都会には人々が多勢集まるのか？ 休日などは、買物やその他の特別の用事がない人も集まってくる。都会は家庭や職場、学校などのいずれにも属さない場を形成している。ここではそれを大衆社会と呼ぶことにする。都市化現象による多数の人間の集まりである大衆社会は、個人の立場を稀薄にし、消滅させる力を持っている。そこでは他人のことに無関心であり個人の中に立ち入らない。この中ではどんな立場の人も、買物客、観客、乗客、歩行者でしかなく、立場をとりまくわずらわしい身分関係から解放され、誰もが水平的存在として認識されるのである。拘束的立場にある個人を解放してくれる都会に集まってくる現代人の姿は、現代の Rec の一端を示しているといえないだろうか。

いままで日本人としての Rec のとらえ方を、ここでは家庭を中心にして考えてきた。家庭のメンバーは、次第に家庭の中から外に向かっており、Rec の場もますます同様である。ここで、いま一つ注目しなければならないことは、近代社会の諸現象を認識すればする程、社会を表向きの存在とするなら裏の存在である家庭にもっと目を向けてみなければならないことである。家族間(特

に、親と子供、老人)の問題がとりざたされる現代の家庭で、親子、兄妹がゆっくりと親しく語り、遊び合うことを、目に見えない巨大な手は奪おうとしている。増えた筈のレジャーも家族が一緒に楽しむことより、個人々々がばらばらで過ごすようになってきているのである。

我々はもっと社会の諸現象を知り、Recの本質を理解したならば、Recを家庭生活の中に豊かに取り入れてゆかねばならない。そのことは、人間が健康と幸福を追求してゆく限り、その基盤を造ってゆく為の必要条件となるのである。

3 生活時間からみた余暇の実態

家庭や職場、そしてそれらを取りまく社会は常に生長し発展してきた。それにつれて、拘束される時間も次第に短くなり、個人が自由に使うことのできる時間は増え、今後ますますその傾向は強まってゆくと考えられる。これからも増えてゆく余暇を、日本人はどう過ごしているのかを、一日の生活時間からその実態をつかんでみたい。

余暇の過ごし方を、時間的な面から見ると同時に、経済的にも探ってみる必要がある。そこで、ここでは簡単にする為に、都市勤労者の所得を一つの資料としてとり上げてみることにする。

(1) 経済の生長によって個人の所得は大幅に増加した。その推移をみると次のとおりである。

「毎月勤労統計調査」による現金給与総額の伸び率(前年度比)は近年増加し、43年度、184%、44年度、182%と調査が始まって以来最高の伸びを示した。これを給与種別別にみると、定期給与の着実な上昇に加え、特別給与(ボーナス)の上昇率の加速化が目立っている。

表 I-1

支給率(ヶ月分)

年度	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
夏期	0.95	1.01	1.13	1.21	1.23	1.28	1.27	1.30	1.37	1.38	1.44	1.56
年末	1.21	1.34	1.49	1.53	1.52	1.60	1.56	1.59	1.62	1.66	1.79	1.91

労働省「毎月勤労統計」より

所得水準が高まった結果、消費支出は、都市勤労世帯でも農家世帯でも最近上昇率は高まりつつある。しかもこのような高い伸びの中で、消費パターンの平準化、多様化がみられ、特に、生存に必要な食料や衣料に対する欲求がある程度満たされるようになり、その結果、雑費、いわゆる随意的支出の占める割合が著しく増加している。

レジャー消費は国民の消費生活に於ける代表的な随意支出であり、近年その上昇は目覚ましいものがある。食料や衣料のような生活必需品に対する欲求がある程度満たした結果、昭和32~33年頃から家庭用電気器具を中心にした耐久消費財に対する支出を急激に増加させ、ブームとなったが、それもある程度飽和点に達するにつれ、付加的消費の大部分は、教養、娯楽などレジャー的なものに振り向けられるようになり、レジャー・ブームという言葉を生み出す結果となったのである。

表 I-2

都市勤労世帯費目別消費支出増加寄与率

(単位 %)

年 度	38 ~ 40	40 ~ 42	42 ~ 48	48 ~ 44
消費支出	100.0	100.0	100.0	100.0
食料費	34.4	27.5	19.7	29.2
住居費	10.1	15.0	7.5	15.8
家具什器	1.9	11.2	14.6	15.1
光熱費	4.5	3.9	0.9	3.5
被服費	6.1	3.9	10.8	8.7
雑費	48.5	44.6	63.8	43.2

総理府統計局「家計調査」より

(2) 機械文明の急速な発展と、それに伴う分業化の促進などの生産様式の変化は、生活の中に時間的な余裕を生み出した。そしてそれは今後ますます増えてゆこうとしている。ここ数年の様子をみみると次のようである。

表 II-1

〔平日〕

		35年	40年	45年
仕 事	男	時間分 8.10	時間分 8.07	時間分 7.54
	女	4.23	4.48	4.00
ラジオ・テレビ	男	2.23	3.18	3.09
	女	2.55	3.48	4.12
新聞・雑誌・本	男	44	47	40
	女	21	21	22
レジャー活動	男	22	29	29
	女	21	21	22

表 II-2

〔休日〕

		35年	40年	45年
仕 事	男	時間分 6.15	時間分 5.32	時間分 4.16
	女	3.39	3.32	2.24
ラジオ・テレビ	男	3.00	4.06	4.07
	女	3.05	4.08	4.15
新聞・雑誌・本	男	55	44	42
	女	21	20	18
レジャー活動	男	57	1.29	1.45
	女	28	45	53

一日24時間のうち、睡眠、食事、身のまわりの仕事などを除いた余暇時間と仕事時間について昭和35、40、45年と、その推移をみてみた。(成人男・女について)

10年前と比べてみると、一日のうちの余暇時間は確実に増えているわけであるが、うちわけを見ると男女とも、ラジオ、テレビ、特にテレビを見る時間が大きく増えているのが目立っている。新聞、雑誌、本などを読む時間には大きな変化はみられない。印刷物を読む時間はテレビの普及によってもあまり影響を受けていないといえることができる。

平日の成人男子の仕事の時間は、この10年間にやや減少している。しかし通勤に要する時間はむしろ多くなってきているので、仕事と通勤を合わせた時間は殆んど変わっていない。

日曜日に於ける生活時間の変化の特徴の一つは、レジャー活動の時間が増加したことである。これは日曜日の仕事の時間が減少してきたことに原因の多くがある。仕事の時間の変化を、男子についてももう少し詳しくみてみると次のようである。

表 II-3

男子年代別 仕事の時間の変化

年 代	平 日		土 曜		日 曜	
	35年	45年	35年	45年	35年	45年
	時間分	時間分	時間分	時間分	時間分	時間分
20代	8.16	7.56	8.30	7.21	6.00	3.47
30代	8.56	8.39	8.30	8.11	6.43	3.55
40代	9.08	8.26	8.50	7.47	6.36	5.04
50代	8.01	8.00	8.15	7.41	6.36	5.08
60代	8.47	6.36	6.39	6.22	5.41	4.05

平日は、50代を除いて各年代とも仕事の時間は減少しているが、10年前に仕事の時間が最も多かった40代が大幅に減少している。土曜日は一般に減少しているが、特に、20代、40代は1時間余りも少なくなっている。日曜日については、10年間に大きく減少している。20代30代は、2時間以上も減少し、今日では平均労働時間は4時間を割っている。

これまでのところは主として、成人男女について余暇時間の概容を述べてきたので、次に現代の青少年の余暇時間について調べてみることにする。

表 II-4

	子 供(10~15才)			ハイティーン(男)			ハイティーン(女)		
	平日	土曜	日曜	平日	土曜	日曜	平日	土曜	日曜
	時間分	時間分	時間分	時間分	時間分	時間分	時間分	時間分	時間分
ラジオ・テレビ	2.16	3.02	3.54	3.13	3.17	4.11	2.39	3.14	4.17
新聞・雑誌・本	1.8	2.7	3.9	3.7	3.5	4.0	2.7	3.3	3.9
レジャー活動	1.00	1.43	2.48	5.6	1.18	2.14	3.8	1.00	1.31

平日の場合、全国民平均でレジャー活動を少しでもする人は 30%であるのに対して、子供(10～15才)は 64%、ハイティーンは男子 48%、女子 89%である。もっとも子供の場合はその大部分が、ボール遊び、ゲームなどであり、ハイティーンの場合は、見物・鑑賞、スポーツ、技能・資格の勉強(英会話、料理、自動車など)、行楽・散策、けいごごと・趣味、などが幅広く行なわれる。

日曜日には一般的にレジャー活動をする人が増え、全国民平均でレジャー活動を少しでもする人は 42%になるが、子供は 75%、ハイティーンは、男子 60%、女子 55%で全国民平均に比べてかなり高く、青少年はレジャー活動が活発なのが実状のようである。

「おわりに」

こんな男の話がある。自動車の後車軸があとからあとから流れてくる所に立って、ボルトを一つずつ締める仕事を何年もやっていた男があった。ある時彼は勤め口を缶詰工場に変えた。彼の仕事は、サクランボがベルトに乗ってやってくるのを、赤いのは右、黄色いのは左と仕分けることだった。条件は良く賃金は申し分なかった。ところがその週の終りになるとこの男は勤めを辞めさせてくれとやってきた。「責任の重さに押しつぶされそうだ。」と彼はわけを説明した。「あとからあとから決断、決断、決断で責められるんだから。」

現代ほど自然が持つ価値を見直そうとし、人間らしさを取り戻そうとしている時はない。心と心の触れ合いを Rec に求めるのも、迷った道から抜け出す一つの道標となるだろう。

ここでは主に家庭との関係から Rec を考えてみたのであるが、手をつけるに従って、Rec を捕えようとするにはとてつもなく大きな網が必要だということに気がついたのである。同時に Rec だけを取り出したのでは翼のない鳥のようなものでその背景の深さ故、この報告もまだまだ未完成であることを痛感している。これを一つのステップとして今後の指針としたい。

参考文献 - 資料

- 国民生活時間調査(昭 45年度)
日本放送協会
放送世論調査所
- 経 済 白 書 (昭 45年度)
経済企画庁編
- レクリエーション 前川峰雄著
教育科学社
- 機械と人間との共生(オートメーションの歴史 リリー)
平凡社
- The Challenge of Leisure
(Charls, K. B.)

進路状況の報告

進路課

はじめに

高校入試、大学入試がその下級学校である中学校、高等学校に与える影響は大きく、予備校化したゆがめられた学校教育におちいりがちである。本校は、中高併設の学校で、中・高共にその影響をまともに受けるが、でき得る限りゆがめられない学校教育をおこなうべく努力をしているつもりである。そのような中で、進路状況の実情を報告し、また、進路指導、入試準備のあらましを述べて、ご批判を仰ぎたいと思う。

(I) まず中学校卒業生の進路状況からみる。

(1) 本校は中高併設の学校で、校舎、教官は中高の別なく全く共用されているにもかかわらず、生徒のみが中高の間で接続されない。中学校3学級 150名の卒業生中(47年度より185名の予定)、本附属高校へ110名進学し、約40名は、他高校への進学を余儀なくされる。この中高接続に問題点の多いことは、本校研究紀要第12集に接続委員会より報告した通りである。このような進学条件は、他中学校と異なっているが、この状況下での実情を報告する。

(2) 進学、就職の別

43年卒業生中に、1名の就職があった。この生徒は中学校在学中に相次いで両親が死亡しダイハツ自動車Kに就職し、入寮して勤務を続けている。その他はすべて進学である。進学率ほぼ100%といえる。(次頁第1表参照)

(ア) 全国的にみても高校進学率は年々伸び、奈良県で46年3月の高校進学率88%を占め、中卒の就職者が激減しているのは、全国的な傾向である。

(イ) 本中学校の入学時の募集方法が、70名は附属小学校よりほぼ全員、80名は一般小学校より学力検査による選抜試験を経て、入学してきている。そのために学力の優れた者が多く入学しており、義務教育の中学校を了えても更に学業の道に進む、高校進学率100%の結果となっている。

(ウ) 下の表により、保護者の職業をみると、70%が俸給生活者であることも起因として考えられる。

(第2表) 中学生の保護者の職業

職業	会社員	教員	公務員	卸小売業	自由業	製造業	農業	無職	その他	計
生徒数	168	56	80	44	23	26	12	2	27	488
%	38.4	12.8	18.3	10.0	5.2	5.9	2.7	0.5	6.2	100

(第1表) 中学校卒業生の高校別進路状況

卒業年		40	41	42	43	44	45	46
国立	奈女大付高	110	112	111	109	109	108	108
	奈良高	3	4	4				
奈良県立	郡山高	2	1	2				
	生駒高	2		1	5	1	4	5
	添上高	1			1	2	2	4
	奈商高	2		2		1(定)	4	1
	奈工高	2				1	1	
	王寺工高					2		
	北和女子高					2		1
	桜井高			1				
	高田高			1				
	市立	一条高	13	21	17	8	6	6
他府県公立			1		2		1	1
奈良県私立	育英高	2	1	3	4	11	3	6
	帝塚山高			3	5		5	1
	正強高	2		1	1	1		2
	白藤高		2			1		1
	天理高			1			1	
	桜井女子高					1		
	智弁高		1				2	
他府県私立	京都女子高	5	1		2	4	2	
	樟蔭高	1	4		1	2	1	3
	明星高					1	2	1
	東大阪女子高				1	1		
	灘高					1	1	2
	近大付高		1	1	2	2		3
	同志社高			1			1	
	追手門高	1		1	1			
	華頂高							3
	その他高	3	2	1	2			2
その他				1 (ダイハツK)	1 (テレビ技専)	1 (工高専)		
卒業生数	149	151	151	145	150	145	147	

(3) 高校科別の進学状況

年によって異なるが、進学者中0～5%が職業科へ進み、95～100%と大部分が普通科へ進学している。

(第8表) 科別進路状況

卒業年		40		41		42		43		44		45		46	
男女別		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
高校	普通科	70	72	74	77	76	72	69	74	72	70	70	69	72	71
	商業科 (含事務科)	1	1	0	0	1	1	0	0	1	2	1	3	0	2
	工業科	4	0	0	0	1	0	1	0	4	0	1	0	2	0
	音楽科		1												
その他								1		1		1			
計		75	74	74	77	78	73	71	74	78	72	73	72	74	73
男女計		149		151		151		145		150		145		147	

(7) これもまた全国的な傾向で、殊に成績不振の者を職業科へ進学を進めるといふ思わしくない傾向もあるが、本校においては普通科進学者が、それ以上の高率となっている。

(1) (2)と同様、保護者の職業にも起因し、高校から更に大学への進学を希望し、そのために高校普通科へ進む。

(7) 特技などの点から職業科進学が適しているとみられる生徒に、その旨指導しても、中学校卒業の段階で、まだ職業決定の時期に早く、きめかねて普通科に進学する者が多い。

(4) 高校別の進学状況

第1表によると、附属高校への進学者110名ときまっているが、他高校への進学状況を分析してみたい。

(7) 奈良県公立高校進学者数が、42年以前と、43年以降とに大きな差がみられる。42年以前は、奈良高、郡山高合わせて5～6名、一条高13～21名となっているが、43年以降は、奈良高、郡山高は皆無、一条高は3～8名と激減している。この急激な変化は、奈良県公立高校の選抜基準が変わったためである。すなわち、42年以前は、検査当日の成績を中心とした選抜であったのに比し、43年以降は、内申書成績を換算した数値を $\frac{1}{2}$ 、学力検査 $\frac{1}{2}$ を合わせた選抜方法に変わっている。本校卒業生の内申書が、定められた分布率での評価にすると、不利になるものと見られる。選抜方法に、定められた分布で記入された内申書を換算した数値を用いることの問題点があるように思われる。

(1) (7)と平行して、私立高進学者が、42年以前は12～14名であったのに対し、43年以降は19～25名と増えている。中には経済的に私立高へ進学できぬため、1年浪人後、公立高へ進学した者もいる。

(5) 中3における進路指導、入試準備について

(7) 基本方針として、学校においては入試準備勉強より、毎日、毎時の授業を中心としてこれを極力欠かないようにし、入試準備のための補習はおこなっていない。

(1) 進学希望校をきめる資料とするための模擬試験は、中3において年3回(7月、10月、

12月)おこない、その成績をみて、合格可能性のある高校を進学指導する。また市販の模擬試験も約2回受験させ、一般の基準に合わせた進学指導資料としている。

(ウ) 保護者との話し合いは、合同の保護者会の席で、高校の紹介(科別、経費、特徴など)、従来の進学状況、合格状況の資料の紹介などをして理解を促しているが、それ以上に、個人面接に力を入れている。殊に附高に進学できない40名に対しては、保護者、生徒同席のもとで、十分時間をかけて指導をしている。

(6) 以上大きな問題点とみられるのは、

(ウ) 中高併設であるため、教師自ら教えた生徒を、自らの手で不合格にする結果となり、そのあとの進学指導に困難を来すこともある。その他いろいろの事情で、中高6か年一貫教育への動きがあることは前号でのべた通りである。

(イ) 本校の教官定員が不足し、それを非常勤講師で補っているが、その時間数は中高比5:2となっている。このしわ寄せが中学校にあるのは遺憾である。

(ウ) 奈良県公立高校受験の際の内申書の不利が歴然として出ている。

などがあげられるが、(ウ)(イ)は早急に解決すべく努力はしているが、(ウ)についてはどうしたものか苦慮される。

(II) 次に高等学校卒業生の進路状況をのべてみる。

(1) 大学進学者の現役進学者数と一年後の進学者数の比較について

第4表に示されたこゝ6年間の進学者数を、現役、一年後の別にまとめると第5表の通りである。

(第5表)

		41年	42年	43年	44年	45年	46年	平均	割合(%)
国公立大学(4年制)	現役	57	51	42	48	55	63	59	95.1
	一年後	82	88	80	84	87	—	84	55.7
国私立大学(4年制)	現役	72	70	70	75	77	91	76	50.4
	一年後	133	130	127	126	136	—	131	86.7
国私立大学(短大も含む)	現役	78	77	77	88	86	97	84	55.7
	一年後	141	139	137	141	147	—	141	93.4
短期大学	現役	6	7	7	13	9	6	8	5.3
	一年後	6	7	7	15	11	—	9	6.0

この表から

(イ) 卒業し直ちに大学の進路を決定するものは、全体の約55.7%で、残りは家庭学習、所謂浪人生活へ突入することになる。しかし一年後の浪人生活のあと、約93.4%のほとんどが大学の進路を決定し、更に数年後は平均して、146名(約96.6%)が、大学教育をうけている。

(ウ) この2.3年女子の短大進学者がふえ、その中には将来の生活設計を考え、社会の福祉、幼児教育に逸早く飛込んでいる人達が目立っている。一年の家庭学習中就職に踏み切りその職場から、二部(夜間)の短大へ進む人もある。

(第4表) 高校卒業生の大学別進路状況

A その年3月高校卒業後現役で大学に進学した者
 B その前年以前の卒業生で浪人して大学に進学した者
 C その年3月高校卒業生の大学別進学者

	入試年度	41年度			42年度			43年度			44年度			45年度			46年度		
		A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
国立 一 期 校	北海道大						1		1									1	
	東北大			1		1													
	東京大	6	1	8	5	2	8	6	3	7			5	1	5	1	1	1	1
	東京教育大				1		1											1	
	東京工業大	1		1			1		1										
	東京芸術大													1		1	1		
	お茶の水女大	1		1															
	千葉大																		1
	一橋大		1		1		1	1		2		1	1		1				
	新潟大										1		1						
	金沢大									1		1							
	名古屋大	1		1	1		1			2		1	2	1	2	1			
	京都大	16	7	21	7	5	28	3	14	15	14	14	21	16	7	26	12	11	
	大阪大	1	2	1	5		6	2	1	5	5	3	11	5	6	8	5	3	
神戸大	1	1	1				1		4	2	2	5	1	4	4	2	3		
奈良女子大	5		7	5	2	7	10	2	10	7		7	9		11	5	2		
広島大	1		1			2		1	1		2	2		2					
鳥取大						1		1											
九州大												1		1					
(1) 小計	83	12	43	25	10	52	23	24	47	29	24	56	34	28	52	29	20		
国立 二 期 校	大阪教大	7		7	4		4			2	2	1	2	4		5	3	1	
	京都教大				1		2	1	1	1			3		3	2			
	奈良教大	4	1	5	4	1	6	2	2	2	2	3	3	1	3	11			
	東京外大										3	3							
	大阪外大	1	1	4	4	3	5	4		6		2					3	1	
	京工芸大						1			1	1	2	2	1	1	4	2	3	
	愛媛大											1		1					
	島根大			1					1			1		1	1	1		1	
	和歌山大	1		2		1	1		1			1		1					
	名古屋工大	1		1	2		2	2		4		2				1	1	1	
	福井大			1		1				1	1	1	1						
	岐阜大										1		1						
	東京商船大							1		1									
	横浜国立大	1		1				1		1									
静岡大	1	1	4		3		1		1						1		1		
富山大				1		1	1		1						1		1		
東京医歯大			2		2												1		
滋賀大				1		1											1		
信州大		1									1			1			2		
秋田大	1		1																
九州工大			1																
(2) 小計	17	5	29	17	11	23	13	5	21	10	8	16	11	5	20	23	11		

	入試年度	41年度			42年度			43年度			44年度			45年度			46年度		
		A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
公立	大阪市大	3	1	5	3	3	9	1	5	4	5	3	7	4	1	7	4	5	
	大阪女子大		1		2		3	3	1	5		2		1		1			
	京都府大	2		5	1	3	1			3		3	1	1	1	1			
	大阪府大						1	1	1	1			1		1	1	1	1	1
	奈良医大	1	1	1	1		1			3		2		1		1	2	1	
	京都芸大		1				1		1	1	1		1	2	1	2	2		
	神戸外大			1		1		1		1				1		1			
	神戸商大										1		1					1	
	横浜市大		1	1		1					1		2		1				
	和歌山医大		1		1		1			2		2							
	福島医大												1		1				
	愛知芸大												1		1				
	金沢工大										1		1			1			1
	都留文科大				1		1												
京都医大	1	1	1															1	
三重県大		1								1									
東京都大																		1	
(9) 小計		7	8	14	9	8	18	6	8	21	9	12	16	10	7	15	11	9	
(1)(2)(3) 計		57	25	86	51	29	93	42	37	89	48	44	88	55	40	87	63	40	
私立	同志社大	5		11	2	16	6	3	6	8	7	3	8	3	2	4	6	1	
	関西学院大	1	8	8	5	11	8	1	3	2	2	1	4	1	2	2	2	1	
	立命館大	3	2	9		8	2	2	3	2			3		3	1		1	
	関西大	1	2	3		2		2		2			1		1	2	1	2	
	京都女子大						1	4		4	2	1	2	2		2	1		
	神戸女学院大	1		2		1		4		4	1		1	4		4	4		
	同志社女大				1		1	1		1	2		2	2		2	4		
	天理大		2	1	1		1		1		1		1						
	竜谷大			1		1		1		1	1		2		1				
	大阪薬大			2	1	2	1	1		4	1	3	1				1		
	京都薬大	1		2		1		1		1						1		1	
	明治薬大										1		1						
	神戸女薬大				1		1							1		1			
	星薬大							1		1									
	大阪医大		1				1		1	1			1		2				
	関西医大			1		1							1		1				
	大阪歯大									1		1							
	大妻女大										1		1						
	大阪音大				2		2						1						
	国際基督大	1	1	1	1		2		1		1		1						
	甲南大						2		2	2	1	2	1						
ノートルダム女大										1		1					1		
日本社事大										1		1							
大阪芸大						1		1		1		1							
大谷女大	1		1																
名城大										1		1							
武庫川女大									1		1								
大阪経済大													1		1				
京都産大						2		1	3		4								

	入試年度	41年度			42年度			43年度			44年度			45年度			46年度		
		A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
私立 大 (4 年)	桃山学院大						1			1		2			1		1		
	帝塚山大														1	2	1		
	奈良大																1		
	早稲田大		1	5	1	6	3	1	2	1		1	2		2	5		5	
	慶応大			2	1	3	1	1		1	2		2			1	1	1	
	中央大											2							
	法政大												1		1				
	明治大									1		1	1		1				
	東京女子大			1		1		1		2		1						1	
	津田塾大													2		2			
	仏教大													2		2			
	大阪樟蔭大				1		1	1		1				2		2			
	近畿大			1	1	1	1												
	橘女子大							1		1					1		1	1	
	国立音大													1		1	1		
	東京医大												1		1				
	東洋大			1				1	1	1									
	日本大						1		1										
	上智大				1		1												
	日本女子大							1		1									
	愛知大						1		1										
	中部工大						1		1										
	大手前女大							1		1									
	追手門学院大			1		1													
	関西外大						1		1										
	青山学院大						2												
	北里大			1		1													
高野山大			1		1														
南山大	1		1																
成蹊大		1																	
学習院大																		1	
国学院大																		2	
相愛女大																		2	
(4) 小計		15	18	56	19	59	44	28	27	48	27	23	42	22	17	39	28	15	
(1)(2)(3)(4)計		72	49	142	70	88	137	70	64	137	75	67	130	77	57	138	91	55	
短期 大	京都府立女							1		1	1		1						
	大阪社事				1		1	1		1	3		3	1		1			
	阪大医技									1		1							
	大阪公衛生									1		1							
	華頂大	1		1	1		1	1		1				4		4			
	大谷女大									1		1						1	
	京都女大				1		1												
	帝塚山大												1		1				
	大手前女大																	1	
	京都家政												1		1				
大阪キリト教												1		1	1				
大阪音大						1													

	入試年度	41年度			42年度			43年度			44年度			45年度			46年度		
		A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
短期 大	大阪信愛女院									1		1							
	日本福大									1		1							
	平安女院							2		2	1		1						
	ブール学院							1		1	1		2						1
	聖和女大									1		1							
	武庫川女大				1		1				1		1						
	杏林学園							1		1									
	京都看護				1		1												
	佐保女学院				1		1						1		1				
	榎原学院				1		1												
	相愛女大																		2
	関西外大															2		1	2
	其の他	5		5									2		2				
(5) 小計	6		6	7	1	7	7		7	13		16	9	2	11	6	3		
全合計	78	43	148	77	89	144	77	64	144	88	67	146	86	59	147	97	58		
就職				5		5	2		2				1		1	1			

多くは、浪人生活をしてでも、国公立大学へ進路を決定しようとする者が多く、第4表にあらわれていない合格者数の中で、私立大学合格を放棄して一年後をめざすもの、または一時進学して、途中で進路、大学を変更するものもかなりある。しかし最近では、自己の進路を真剣に考え、適切な大学を選択して、速早く大学教育をうけようとする者が数の上で多くなっている点は、見逃がせない。

(2) 進学者の大学別について

第4表の中から、比較的進学者の多い大学を示したのが第6表であって、これは現役浪人を問わずその年度卒業生の進学先である。但し46年の()は現役進学者数のみ示している。

- (イ) 国立一期校では、圧倒的に京大進学者が多く、国立一期校全進学者数に対する割合は、約41%で、これは卒業生7人に対して1人の割合となっている。特に、大学紛争の煽りから東大進学を敬遠するものが多くなった傾向に、一つの原因があるのかも知れない。次に奈女大、阪大、東大、神大と続いているが、この数年変わってはいない。
- (ロ) 国立二期、公立校の中で大市大、大阪女大、大府大のように、一期校と同じ扱いを受ける大学や、最初から進学者自身が、ある大学(特に東京外大、大阪外大にみられる)一つに的を絞って進学しようとする大学は、合格者数とそのまゝ進学者数となる。その他の大学では合格を放棄して明年にめざす現役者がかなりある。また教育系大学進学者は、国立二期校進学者の約47%を示し、最近とみにふえている。
- (ハ) 私立校は、国公立かけもちの受験者が多いため合格者がかなりあっても、そのまま進学をしない場合が目立つ。関西では同志社、関西、立命の順であるが、受験科目数が少ないこれらの大学の入試は最近激烈になっている。早稲田、慶応は学部別に受験日が違うため、一人で数多くの学部を受け、どうしても希望の大学へ進学したいという者もいる。とにかく関東では進学者の多い大学である。
- (ニ) 短大では、幼児教育、福祉事業の社会への労働意欲にもえて進学する者がふえ、学校での進路指導にもっと力を入れるべき時期にきている。

どこの高校でもみられる現象であるが、総体的に現役受験者は、「一年位の浪人生活は」と余裕をもって受験をするため無理な受験をする場合が多い。反面浪人受験者は長い灰色の予備校生活から「二度と経験をしたくない」と真剣に受験する。その結果、一期校に進学する者、また失敗しても二期校、私立等に最後は進路を決定する状態になってきている。

(3) 男女別進学者数について

43年から46年までの男女別進学者を、現役浪人(一年後のみ)について調べたのが、第7表である。(男75名、女75名)

(イ) 国公立大学では、現役でこの4年間平均男26名、女27名で、約35%が進学するが、1年後には、男53名(70.6%)、女31名(41.3%)となる。やはり男子の国公立大学進学希望者が多いことがわかる。

(ロ) これを国公立大学(短大を含める)まで拡げると、現役で平均男30名(40%)、女58名(77.5%)が進学し、1年後には、男69名、女69名(92

(第6表)

	大学名	41年	42年	43年	44年	45年	46年	合計
国 立 一 期	京 都 大	21	23	15	21	26	(12)	118
	大 阪 大	1	6	5	11	8	(5)	36
	奈 女 大	7	7	10	7	11	(5)	47
	東 京 大	8	8	7	5	1	(1)	30
	神 戸 大	1	0	4	5	4	(2)	16
	名 古 屋 大	1	1	2	2	1	(0)	7
	広 島 大	1	2	1	2	0	(0)	6
国 立 二 期	奈 教 大	5	6	2	3	3	(11)	30
	大 教 大	7	4	2	2	5	(3)	23
	京 教 大	0	2	1	0	3	(2)	8
	大 阪 外 大	4	5	6	0	0	(3)	18
	東 京 外 大	0	0	0	3	0	(0)	3
	京 工 芸 学 大	0	1	1	2	4	(2)	10
	名 工 大	1	2	4	0	1	(1)	9
公 立	大 阪 市 大	5	9	4	7	7	(4)	36
	京 都 府 大	5	1	3	1	1	(0)	11
	大 阪 女 大	0	3	5	0	1	(0)	9
	奈 良 医 大	1	1	3	0	1	(2)	8
	大 阪 府 大	0	1	1	1	1	(1)	5
	京 芸 術 大	0	1	1	1	2	(2)	7
私 立	同 志 社 大	11	6	8	8	4	(6)	43
	関 西 学 院 大	8	8	2	4	2	(2)	26
	立 命 大	9	2	2	3	1	(0)	17
	神 戸 女 院 大	2	0	4	1	4	(4)	15
	京 女 大	0	1	4	2	2	(1)	10
	同 志 社 女 大	0	1	1	2	2	(4)	10
	大 阪 薬 大	2	1	4	1	0	(1)	9
	京 都 薬 大	2	0	1	0	1	(0)	4
	早 稲 田 大	5	3	1	2	5	(0)	16
	慶 応 大	2	1	1	2	1	(1)	8
短 大	大 阪 社 会 事 業 大	0	1	1	3	1	(0)	6
	華 頂 短 大	1	1	1	0	4	(0)	6

(%)と同数になる。これによって女子の私立大学現役進学者が国公立大学のそれとほぼ同数となっている。

どの家庭でも、男子の浪人は当然のように考えられ女子はそれを許さない状態が明らかになっている。4年間の平均男子、女子の一年浪人は44名、16名で割合にすると、58.5%、21.4%である。年次別では僅かであるが浪人数が減ってきている。

(4) 現役の学部別の進学について

43年から46年までの現役進学者について、進学した学部別を調べたのが下記の表である。文科系の中に音楽、美術を専門に進学したものを入れることについて異論があったが一応入れることにし、教育大学系については、家政学部と共に別項に示した。

(1) 国公立の文科系では、表によると文学部が多数の進学者をしめている。理科系では、工学部、理学部が続いている。国公立での文科、理科の比は約1.2倍で理科進学者が多い。

(2) 私立の文科、理科の比は、約6.8倍で文科系が圧倒的に多くなっている。特に私立の理科系は、現役進学者のためか僅か

(第7表)

		43年		44年		45年		46年	
性 別		男	女	男	女	男	女	男	女
国 一 期	現	10	18	17	12	23	11	17	12
	浪	19	1	22	3	13	5		
国 二 期	現	8	5	5	5	8	8	5	18
	浪	6	1	4	1	8	1		
公 立	現	1	5	4	5	4	6	8	3
	浪	6	5	3	3	3	2		
私 立	現	3	25	4	23	3	19	5	23
	浪	12	7	13	2	13	4		
短 大	現	0	7	0	13	0	9	0	6
	浪	0	1	1	1	0	2		
就 職		0	2	0	0	0	1	0	1
合 計		65	72	73	68	70	68	(35)	(63)

(第8表)

		43年		44年		45年		46年	
		国公	私	国公	私	国公	私	国公	私
文	文	7	18	9	19	8	11	7	20
	法	2		4		4	2	1	
	経	3	1	6	2	1	1	4	3
	商		1						
	語	5		3		1		3	1
	美	1		1		1			
	音			1	1	2	2	4	
計		18	20	24	22	17	16	19	24
理	医		1		1	1		5	
	薬	2	3	2	2	1	1	2	1
	歯	1						1	
	理	12		5		12		9	
	工	7		11	1	12	2	9	1
計		22	4	18	4	26	3	26	2
教 育		2		5		10	2	17	
家 政			4	2		2	1	1	2

ある。

(4) 教育学部は最近進学者が増加し、特に国立二期の教育大学に集中している。

国立大学は受験科目数が多く、特に数学、理科の必修科目があるため、比較的理科系の大学へ進学するものが多い、裏をかえせば、得手、不得手の差が激しく、教科指導、教育課程の一考を要する時期にきている。

国公立大学の枠をひろげると、理科学科の比が2:3になる。年次別で考えると、医学部、理学部の大学の進学はむつかしく、教育系大学に女子の進学が目立っている。

(5) 進学者の地区別について

最近6ヶ年の地区別にみると、826名の進学者のうち、東京地区（横浜を含む）92名で、11.1%、関西地区・京都264名で32.0%でトップをしめ、続いて大阪182名の21.0%、奈良93名の11.3%、兵庫69名の8.4%の順になっている。年次別では、最近大学紛争のためか、東京地区が漸次減少し、京都がふえてきている。その他の地区も僅かであるが、進学するものが出ている。生徒にとっては大阪、奈良より京都に魅力を感じ、地方大学を嫌う傾向が強い。いずれにしても、関西地区に進学した場合でも、専門科目の課程時期になると自宅から離れ下宿する者が多いことを考えれば、地方進学の指導も必要と思われる。

(6) 保護者の職業について

昭和45年度の高校生の保護者の職業は、次の通りである。

(第9表)

会社員	教員	公務員	卸小売業	自由業	製造業	農 業	無 職	その他	合 計
150	70	78	56	41	27	15	6	6	449

このうち、給与所得者は全体の66.8%、自営所得者は28.8%である。従って、子弟の教育や、将来の生活設計にも強い関心をもち、子供と共に大学進学に希望をもっている。ただ余りにも学力のみ考慮し過ぎる傾向がみられ、精神的な教育、家庭における顔の面で学校生活に支障をきたす場合が起り、教師の指導もその為に厚い壁に突き当たる。こうした現象も、入学の為に実施する試験制度や、中学・高校の接続問題、教科課程のあり方等もう一度再考を要する種々の問題点が起因している。

(7) 就職希望者について

第4表のように、この3年間学校推薦による就職者は非常に少なく、毎年1人程度の希望で、生徒の意志通り決定されている。それも高校に依頼される求人申込み約200件から、生徒自身、学校、家庭と協議の上決定される。最近企業からの申込みも、職業安定所を通じて学校に通知され、採用決定等も同所を通じて報告がなされている。就職の時期、給与条件等もすべて全県下統一され、生徒の就職保障も各校の進路指導担当者等で希望通りかなえられる様努力している。

(8) 本校の進学指導について

現在本校の教育課程は第10表の通りである。

1週に34時間の授業(その中1時間はH.R)を行い、特別の進学補習等はしていない。ただ教育課程にもり込まれている高3の選択履習であるが、強いていえば進学指導と考えられぬことはない。ただ、教師一人一人は出来るだけ受験のための指導にならぬようあくまで、学問的

な深さ、広さの面につとめて指導している。その点生徒個人の能力を伸ばし得る機会でもあり学科指導の面での長所といえるが、反面人間的な知識のゆとりが、早くから消えてしまう短所がある。その兼合いは非常にむつかしく、さきの大学進学者の文理科系の結果に明らかにされている。好きな学科、嫌いな学科という個人の意識と能力は、高校生に既に表われはじめ、この時期に明確な指導をすることが、長い人生で、生徒にとってより効果的な指導といえるだろうか。

(第10表)

1 年		2 年		3 年	
科 目	単 位 数	科 目	単 位 数	科 目	単 位 数
現代国語	3	現代国語	2	現代国語	2
古典乙I	3	古典乙I	2	古典乙II	2
地 理B	4	世界史B	4	日 本 史	4
数 学 I	5	倫理・社会	2	政治・経済	2
生 物(1)	2	数学II B	5	英 語 B	5
化学B(1)	2	生 物(2)	2	体 育	3
地 学	2	化学B(2)	2	数学III(←)	4
英 語 B	5	物 理(1)	2	数学I(増)	2
保健体育	3	英 語 B	5	英 語(増)	2
音 楽 I 2	2	保健体育	3	世界史(増)	2
美 術 I 2		(男子)	数学III(←)	2	
書 道 I 2		数学III(←)	2	数学II(増)	2
		工 芸 I	2	音 楽	2
(男子)		音 楽 I	2	美 術	2
体 育	2	音 楽 II	2	食物I(←)	2
(女子)		美 術 I	2	食物I(←)	2
家庭一般(1)	2	美 術 II	2	物理B(2)	3
				物理A(2)	1
特別教育活動	1	(女子)		日本史(増)	2
計	34	数学III(←)	2	数学I(増)	2
		工 芸 I	2	生 物(増)	2
(註)		音 楽 I	2	古典乙II(増)	2
・ --- はいずれか		音 楽 II	2	数 I . II(増)	2
1 科目を選択履		美 術 I	2	世界史(増)	2
習することを示		美 術 II	2	日本史(増)	2
す。		食物I(←)	2	地 理(増)	2
・ □ は両方を合		家庭一般(2)	2	化 学(増)	2
わせて履習する		特別教育活動	1	国 語(増)	2
ことを示す。		計	34	数学II(増)	2
・ ただし、2・3				化 学(増)	2
年については多				英 語(増)	2
少修正すること				英 語(増)	2
がある。				生 物(増)	2
・ (1) . (2)の科目は必ず引きつづいて履修				英 語(増)	2
する。(←) . (←)の科目は引きつづいて履				食 物 I	2
修することをたてまえとするが(←)だけ				被 服 I	2
で終ってもよい。				特別教育活動	1
				計	34

以上が本校の進路状況報告である。高等学校では進路指導といえば、進学と就職に二大別される。ところが上記報告通り本校は全部が進学なのである。それはいつくせぬ程のいろいろな点が原因となり積み重なって今日まできている。それによる教育的な弊害が起り人間的な面に阻害が生じて

いる。激烈な入試は高校教育課程の圧迫や大学進学への失望と数多くの問題が教師の指導を困難ならしめている。大学々部の特徴やそれに合格させる学科の指導、学力の難易度、すべてがその場限りの助言や指導で終り、長い人生の社会に出発する取り組み方、決意の持ち方の指導が十分なされえない現状である。大学進学決定の喜び、数ヶ月後母校にかえり「大学に失望した」という聞く言葉こそ教師にとって最大の痛手を感じる。これは長い人生から見れば必ずしも当たらないかも知れない。しかし自主的に進路を決定し、その能力を養って、如何に生きていくかの指導が完全に覆がえられて、今迄の指導に自信を失うと共に、このとき程本当の意味での自主的判断や決意はありえないものだろうかと考え込む。やはり高校から大学への移行機能が正しく適応しないで、入試のための作業にのみ努力をついやした結果と反省せざるを得ない。こうした大学入学者に不適応な現象を現行の大学入試のみに原因を求めるのではなくして、抜本的な入試改革と共に不適応現象の増加を喰いとめることに努力することが進路指導の基本的姿勢であるように思う。

(文責 玖村、岡田)

たのは同じであった。荷風は「十二月卅一日（二十二年） 本年は実に凶年なりき。六月に蔵書の大半を盗まれ年末に至りて扶桑書房の為に十六万円印税金を踏み倒さる。而して枯れ果てたる老軀の枯死せざる。是亦最大の不幸なるべし。」と慨嘆する。人災ばかり。人間世界に執するための慨嘆は脱人間世界に到らぬ不幸を嘆く。光太郎は裸婦像制作のため上京してから書いた「報告」には「生れ故郷の事京が文化のがらくたに埋もれて足のふみ場もないやうです。」と、「お正月」には「東京などといふひよんなでたため部落に」と、敗戦後の東京の実態をえぐり、「ト、ウ、キ、ヤ、ウはどこにもない」（東京悲歌）と嘆き、「かかんたる君子」に「東京はかすとり娯楽雑誌のやう」と見る。光太郎の核心につきいる洞察はあるが、自分に執した視ではない。不平不満、不幸を訴える目的のものではない。

光太郎の自省が実を結んだのが「典型」である。脱却への苦悩、そして脱却、スローテンポながら、それは前述のように誠実そのものであった。

荷風は終戦時の荷風ブーム、それに乗っての執筆、老大家のカムバックとして喝采を浴びた。個を買き徹した荷風は、戦中戦後毫も心を曲げられることなく、思いの儘に振舞った。戦中は鳴りをひそめざるを得なかったが、終始一貫変らない文学活動と、その生活を続けたといえるであろう。創作の執筆と読書とに執している。新作も矢張り早く発表されたが、同時に旧作の再録刊行も行われ、晩年には旧作刊行が目立つ。老齢と、生活の安定が売文を必要としなくなつたせいもある。浅草銀座へは二十三年一月にはじめて出かけてから連日出遊、浅草の劇場の楽屋出入から俳優踊子と親しくなり、演劇の台本を作り上演に至っている。荷風が若年から待望していた生活が繰りひろげられたのである。旧作の莫大な刊行、過去の労作の余映があり、踊子女優に囲まれて荷風は荷風なりの安住の地を得たのであった。

光太郎は脱却後、裸婦像制作を契機に彫刻に最後の実りをあげた。本来にもどれたのである。

荷風は栄養失調になつた時もあったが、とにかく自分本位であつたから、一終焉近くは自虐的であつたが一八十一才の高令に至り、光太郎は山小屋の無理がたつて七十四才で倒れた。「誠実」なる生き方に殉じたといふと思う。真実のみに生きたのである。

戦中終戦戦後と光太郎も荷風も自己を偽ることなく真実心で貫いた。ただその現われ方は光太郎は戦中終戦と戦後とでは違う。しかしモラリストらし

く、どの時点でも真実を尽した。智恵子夫人と「美に生きる」籠居生活で内部生命の充実と内部財宝の蓄積に精進したのとは反対に、積極的に表面に出て「同胞の荒唐を出来れば防がう」と困のため同胞のためにむきになって詩を書き、耐乏生活にも心美しく殉じ、困破れては苛酷なまでの自己流瀆自己批判の上、再び立ち上つたのである。困と同胞と運命を共にしたのである。

荷風は終始一貫変らない文学活動と生活とを自己に忠実に生きつづけた。自己中心に不平不満に明け暮れながらも、権災疎開と大変だつた時は別としてあくまでも自由で、執筆読書と文人らしい生き方をした。「十七年三月一日上野地下鉄構内売店つゞきたる処に若き男女二人相寄り別れむとして別れがたき様にて二人とも涙ぐみたるまゝ多く語らず立ちすくみたるを見たり。：余は暫くこれを傍視し今の世にも猶戀愛を忘れざるものあるを思ひ喜び禁じ難きものあり。去年来筆とりつづけたる小説の題目は戀愛の描写なるを以て余の喜び殊に深し。」のようなもの、噂の聞書、巷の噂など風聞録、読書録など、作品の題材となるものを日記に書きとめ、放蕩や出遊だけでなく、いつもいつも創作の筆をとるという心で、荷風は一生活した。

光太郎も荷風も右願左駒することなく、やはり「わが道をゆく」であつたとまとめうると思う。

光太郎にあつては「詩」、荷風にあつては「日乗」、それが雄弁に戦中終戦戦後の、心境や状況を語っている。自然この稿は、詩と日乗の引用で占められてしまつた。私の文に書きかえるより「詩」が、「日乗」が明白に示してくれるからであつた。作品を読み返し読み返し、どうしてもこうならざるを得なかつたのである。

この夏も

光太郎先生と荷風先生と、

明け暮れました。「詩」「日乗」

御二人の

芸術への願いが、悩みが、

心にしみ通りました。ああ、

戦争さえなかつたら……。

極、殆ど一行書、それも更に「晴」「陰」とのみの日が目立ち、八十一才の枯れた心がそこにある。

以上年譜的に辿つてみたのは荷風の正体を具体化したかたからである。

戦後日の浅い時、光太郎はまだ戦時の意識から抜けきれず、自己流瀆の道を選び、荷風は直ちに帰京。「食料いよいよ欠乏するが如し、朝おも湯を吸り昼と夕には粥に野菜を煮込みたるものを、口にするとのみ、されど今は空襲警報をきかざる事を以て最大の幸福とす(二十年八月十八日)」といった心境である。「二十一年一月初一。今日までの余の生計は、会社の配当金にて安全なりしが今年よりは宛文にて糊口の道を求めねばならぬようになれるなり、去秋以来収入なきにあらねどもそれは皆戦争中徒然のあまりに筆とりし草稿、幸に焼けざりしを世りしがためなり、七十近くなりし今日より以後余は果して文明を編輯せし頃の如く筆持つことを得るや否や、六十前後に死せざりしは此上もなき不幸なりき、老朽餓死の行末思へば身の毛もよだつばかりなり、朝食を節するため褥中に書を讀み、正午に近くなるを待ち階下の台所に行き葱と人參とを煮、麦飯の粥をつくりて食ふ、飯後炭火なければ再び寝床に入り西洋紙に鉛筆もて宛文の草稿をつくる。」とみじめな生活を元旦にこぼしている。銀行預金封鎖、財産税と、罹災三度の荷風にとっては辛いことばかり。恒産で悠々と文筆生活をしていた時代が続いたから余計こたえたのである。衣食住、荷風は困窮し、住は執筆の妨げになり特に悩んだ。「二十二年三月初九。一昨年の今夜麻布の家を失ひてより遂に安住の処を得ず、悲しむべきなり。」と。二十三年十二月菅野に家を買うまでそれはつづいた。すべては荷風自身に終始している。光太郎は「国民まさに餓えんとす」であり、自分も含めて大衆の愁えを憂えている。自身は自給自足の乏しい生活を「わづかに杉の枯葉をひろひて／今夕の炉辺に一碗の雑炊を煖めんとす。／敗れたるもの鄙て心平らかにして」(雪積めり)と「仙」をさえ思わせる。荷風も光太郎も東京生れの東京育ち、しかし以上の違いを生じている。光太郎は自己流瀆とはいえ、太田村山口の三疊の山小屋を「三疊あれば寝られますね。」(案内)と心平らかである。「万境人をして詩を吐かしむ。」(雪積めり)、「美は天然にみちみちて／人を養ひ人をすくふ。」と心を開いている。自然の美を心新たに見つめるのである。光太郎は太田村山口の人々と「炭焼く人と酪農について今日も語つた」(山林)と温く心の交流があり、だからこそ「おれもぼんやりここに居るが／まつたく只で住んでゐ

る。」(別天地)と平和であり、「田植急調子」が書かれ、「お祝のことは」が送れるのである。東北の自然と人に光太郎はとけこんでいる。荷風は人間世界に執し、しかも自分のことしか頭にないから、到来物があつても同居人に隠して食べたりで、「ケチ」のレッテルが貼られ、変人といわれるのであつた。

光太郎の苦悩は自身の心にあり、脱却出来るまで続いた。荷風のは日常生活の苦悩であつた、芸術制作に関連はするけれど。荷風のために弁護すると「四月廿八日。配給の煙草ますます粗悪となり今は殆喫するに堪えず、醬油には塩気乏しく味噌は悪臭を帯ぶ、これも亡國の兆一步一歩頭著となりしを知らしむるものならずや、現代の日本人は敗戦を口実となし事に勤むるを好まず、改善進歩の何たるかを忘るゝに至れるなり、日本の社会は根柢より墮落腐敗しはじめしなり、今は既に救ふの道なければやがて比島人よりも猶一層下等なる人種となるべし、其原因は何ぞ、日本の文教は古今を通じて皆他国より借りしものなるが為なるべし、支那の儒学も西洋の文化も日本人は唯その皮相を学びしに過ぎず、遂にこれを咀嚼すること能はざりしなり、」(二十一年)とか、「三月十六日 日暮れて今夜も電燈十時過まで点ずるを得ず。亡國の窮状愈憐むべきなり。」(二十二年)とかに文明批評的窮乏観が見えることである。文明批評といえは同年の「五月初三。雨。米人の作りし日本新憲法今日より実施の由。笑ふ可し。」があり、「二十年九月十六日 昨日まで日本軍部の圧迫に呻吟せし國民の豹変して敵國に阿諛を呈する状況を見ては、義士に非らざるも誰が眉を蹙めざるものあらむ」の世評がある。現状慨嘆は光太郎にあつては「この君子國の存在が／世界の可能となるためには……何かの何かがあるだろう。……科学と美との生活なくして／この國はほろびる。」(明瞭に見よ)と美の世界をはなれない。二十五年十二月作で脱却後の作品なのだが、國を思ふ心をはなれない。自分の不幸をみじめには告白しない。光太郎の自己流瀆の真骨頂の彫刻の出来ない苦悩については「人体飢餓」で「造型の餓鬼」と告白するが、それでも「今がチンクチェーントでない歴史の当然を／心すなほに認識する。」し、「彫刻家山に人体に飢えて／精神この夜も夢幻にさすらひ、／果てはかへつて雪と歴史の厚みの中の／かういふ埋没のころよさにむしる酔ふ。」と懋めの境地を見出す。光太郎は身を辺境に流瀆したため彫刻の出来ない苦悩をなめ、荷風は衣食住の不如意で執筆意のままならぬを嘆く、どちらもやはり芸術創作の苦悩を味っ

アリゾナでほとんどとつた。小岩へも出かけている。

二十七年文化勲章授与が決定された。「温雅な詩情と高邁な文明批評と透徹した現実観照の三面が備わる多くの優れた創作を出した外、江戸文学の研究、外国文学の移植に業績をあげ、わが国近代文学史上に独自の巨歩を印した。」として。反官権的な荷風が受けるかどうか取沙汰されたが、荷風は受けた。同時受賞の朝永振一郎、安井曾太郎、佐々木惣一、辻善之助、梅原竜三郎、熊谷信蔵の各氏より一番人気があった。この年も午後は浅草出遊。銀座へも。「俳句」を元旦の毎日新聞に、四月「夢」を「中央公論文芸特集」、十二月戯曲「異郷の恋」を「中央公論」に発表。「夢」「異郷の恋」ともに旧作である。印税収入も多く、文化勲章の年金もあり、生活のために書く必要もなくなつたせいか。「異郷の恋」は「ふらんす物語」の発表以来四十五年目に発表されたのだが、新鮮であつたのは驚嘆に値する。「冷笑」「雪解・二人妻」「腕くらべ」「おかめ征」「現代日本小説大系第六十巻」「浮沈・おもかげ」「地獄の花」「冷笑」「現代文壇名作全集永井荷風集」「深川の唄・飲楽」「野心・柳さくら」「ふらんす物語」「すみだ川」「温東綺譚・踊子」「あめりか物語」を次々と刊行。「あぢさゐ」「六月の夜の夢」を「文芸」に再録。二十八年、一月六日、あのラジオ嫌いの荷風がNHK第一放送で「荷風よもやま話」を初放送、好評のため同二十六日再放送された。十一月十三日芸術院会員内定。一月「俳句」を「小説新潮」、「戦後日歴」を断続して十月まで「中央公論」、三月「漫談」、十月「銅像」、十一月「雑話」を「中央公論」に発表。「珊瑚集抄」「何ぢやら・葡萄園」「きのうの淵・寺しまの記」「狐」等再録。「昭和文学全集永井荷風集」「珊瑚集」(新潮及び岩波文庫)、「日和下駄」「現代文学名作全集永井荷風集普及版」(新潮及び岩波文庫)、「日和下駄」「現代文学名作全集永井荷風集普及版」(新潮及び岩波文庫)等刊。九月に「葛飾土産」が新橋演舞場で花柳章太郎により上演された。浅草、銀座出遊。二十九年一月芸術院会員となる。一月「乱余漫吟」三月「吾妻橋」六月「日曜日」十二月「荷風ななしよ話」を「中央公論」に、四月「浅草交響曲」を「サンデー毎日新緑特別号」に発表。「裸体」「つゆのあとさき」「現代文学論大系第二巻」「地獄の花」「日本現代詩大系第五巻」「すみだ川」「温東綺譚」「夢の女」「秋の女」「創作代表選集14・吾妻橋」「腕くらべ」刊行。四月二十五日、国電の車中で千六百万円預入の銀行通帳、文化勲章年金通帳、横線小切手等の入った手提カバン

を紛失した。米軍木更津基地のルイス・マサシオ軍曹が拾得、この事件は新聞を賑わした。五月「あぢさゐ」が新橋演舞場で再演。十月「腕くらべ」を新派大合同で新橋演舞場で上演。六月「渡鳥いつ帰る」が映画化された。この年荷風は洋画専門の映画館に度々入っている。フランス映画「女優ナナ」の試写を見、「女優ナナを語る」を「スクリーン」に掲載。浅草銀座へは相変らず。一月「心がわり」三月「たそがれ時」五月「うらおもて」八月「捨て子」十一月「水のながれ」を「中央公論」に発表。「薄衣」を「文芸」に再録、十種の旧作刊行。三十一年、四月浅草松屋で荷風展開催、賑わつた。十二月三日市川市八幡町四丁目一二八番地の宅地四十坪を買つた。一月「袖子」五月「男ごころ」を「中央公論」、「葛飾こよみ」を毎日新聞に三月二十四日と四月二十三日まで、発表。長編小説を書き出したが中絶した。八種の旧作本刊行。六種を再録。三十二年三月二十七日、市川の宅地に新築落成、移居、菅野の旧宅は四月十九日に買却。二月中旬「踊子」が大映で京マチ子主演で映画化された。一月「夏の夜」九月「冬日かげ」を「中央公論」に、一月「俳句」を「小説新潮」に、十月「東慶」を「太陽」に発表。対談「この頃の私」が「心」に載せられた。五種の旧作本刊行。二種の旧作再録。「正午浅草」が日乗につづく。午夕飯はアリゾナその他で、外出しない日は駅裏の大黒屋ですませた。三十三年も「正午浅草」「アリゾナ食事」が日乗に並ぶ。一月「十年昔の日記」八月「晩酌」を「中央公論」に、対談「独身の教え」「昔の女今の女」を「婦人公論」に掲載。「現代日本文学全集永井荷風集2」「現代日本文学全集第十八・二十六巻」「日本詞華集」「現代日本文学全集第二・五巻」「日本国民文学全集第二十五巻」「現代日本文学全集第三巻」「永井荷風日記」(全七巻三十四年五月完結)を刊。三十四年元旦は荷風のために休業しなかつたアリゾナで、荷風最後の新春の食事をとっている。一月「向島」を「中央公論」に発表、これは三十三年九月十七日中央公論に郵送したものであるが、筆力の衰えたもので、多分日記以外はこれが絶筆であろう。「世界紀行文芸全集第七巻」刊。この年も「正午浅草」である。三月一日の夕食がアリゾナでの食べ納めで、「病魔歩行困難となる」にて、「病臥」が日乗に続くが、医療も看護もしりぞけ、日課となつた浅草行もできず、四月三十日急逝。最後の日乗は「四月廿九日。祭日。陰。」である。晩年になると「わたしが文化勲章をもらうにふさわしい本があるとすれば、それは断腸亭日乗四巻かも知れませんよ。」といつた日乗も簡潔至

年末まで読書執筆した。二十二年一月七日小西宅に移転。ここも大島宅ほどではないがラジオの騒音があり、四月一日から再び凌霜別宅に通っている。六月二十七日大島宅に残しておいた書物夏服上下石州半紙一包の盗難を発見。二十九日それは大島の娘、香衣の仕業と判明、荷風は立腹し、養子永光離縁の意向にまで発展し安部弁護士に依頼、大島一雄氏ともめている。八月一日読売新聞に荷風発狂の記事が載せられ、荷風は大島からのデマと疑った。養子離縁は大島一雄が承知せず、うやむやとなった。十月「心づくし」を書き「木岸の花」を中央公論に発表。十一月、「秋の女」「にぎりめし」を書き「細雪妄評」を中央公論に発表。身辺ごたごたのあったせいか新作は少い。「罹災日録」「夏章」「黙章」「浮沈」「荷風日歴・上下」「森鷗外研究」「溷東綺譚」「文壇処女作選集・薄衣」を刊行。印税収入も多くなり余裕が出来てきたせいか、船橋の花柳界を一巡したりしている。

二十三年一月九日、罹災後はじめて浅草に行き、十七、二十七日にかけ、向島、四ツ木、百花園、一色、曳舟あたりへ出かけ、二月四日には銀座に行っている。これを皮切りに又、浅草、銀座への出遊がつづいた。常磐座、ロック座、浅草大都會などの楽屋を訪ねたり、見物したりした。荷風はパンパングールを主人公の小説を書く心づもりもしていた。所謂四畳半隼の下張事件で、荷風は心を痛めたが、無事落着。午後にはききまて浅草に行き、常磐座、ロック座、大都會などに出入し、女優踊子たちと親しくなった。桜むつ子に「流行歌謡」を作つてやり、高杉由美のために「停電の夜の出来事」を執筆。十二月、小西邸からの立退を申入れられ、十二月十三日市川市音野一二四番地に家を購入、二十八日移転した。「荷風句集」「踊子」刊行。「荷風全集全二十四巻」刊行開始―二十八日四月完結、「葛飾土産」(全集月報)、「心づくし」(中央公論)、「つくりばなし」(小説世界)、「東京風俗五十年」(表現)、脚本「腕くらべ」(小説世界)を発表。二十四年独居自炊万年床ながら誰にも遠慮気兼ねなく、偏奇館罹災以来始めて自宅で迎春。自宅で執筆でき、活潑に書いている。一月、「にぎりめし」を「中央公論」、四月、「停電の夜の出来事」を「小説世界」、五月、「裸体談義」を「文学界」、六月から翌年五月まで「断腸亭日乗」を「中央公論」、七月「春情鳩の街」を「小説世界」、「秋の女」を「婦人公論」、十月、「人妻」を「中央公論」、十一月、「出版屋窓まくり」を「文芸春秋」、十二月、「葛飾土産」「官城瑣景を観る」を「中央公論」に発表。「偏奇館吟草」「

雑草園」「現代日本小説大系第二十巻」「鷗外選集第八巻解説」刊行。自宅に落付いてから前年からの浅草行が更に頻繁となり、楽屋出入りも激しく、俳優や踊子達と一層親しくなり、高杉由美・ヘレン滝のために「停電の夜の出来事」を書いてやったのは、三月二十五日から四月七日まで小川丈夫の演出で上演。「春情鳩の街」は高杉由美・桜むつ子のために書き、六月四日から二十日までやはり小川丈夫演出で上演。敗戦直後の混乱した社会の風俗人情が描かれたこれらの劇は非常に好評を博した。荷風は稽古に立会うのは勿論、「春情鳩の街」の初日には第二場に出演さえもした。二十五年も文筆活動は著しかった。一月、「買出し」を「中央公論」、「真間川の記」を「展望」、二月、「裸体」を「小説世界」、三月、「放談」を「改造」、「浅草むかしばなし」を「東京日日新聞」、「春本と肉体小説」を「オール読物」、七月、「老人」を「オール読物」に発表。「葛飾土産」「腕くらべ」「飲楽・すみだ川」「創作代表選集5・人妻」「現代日本小説大系第三十八巻」「荷風傑作集全六巻」―二十六年六月完結、「冷笑」「永井荷風集」「永井荷風作品集全九巻」―二十六年六月完結―を刊行。八月、座談会「荷風先生とストリップ」が「オール読物」に、グラフ「浅草の荷風先生」が「ホープ」にのせられた。二月二十八日から「裸体」が中沢清太郎脚色演出でロック座にて上演、満員の盛況であり、五月十一日から「渡鳥いつかへる」がロック座で上演、荷風は通行人として出演、好評を博した。十二月「春情鳩の街」をロック座で再上演。これにも荷風は通行人として舞台に出、大変な人気であった。創作発表に、作品出版に、演劇に、七十二才とも思えぬ活躍ぶりであった。二十六年は出版は盛んであったが、新作は見るべきものがない。六月「浅草の俳句」を「サン写真新聞」、九月「断腸亭日乗」を「中央公論文芸特集」に発表したのみで専ら旧作の刊行であり、文庫本が多く、新潮文庫から「浮沈・来訪者」「つゆのあとさき」「ひかげの花」「あめりか物語」「溷東綺譚」、岩波文庫版は「雪解」「おかめ笹」「腕くらべ」「ふらんす物語」、市民文庫・河出書房のは「新橋夜話」「秋の女」「夢の女」「すみだ川」「珊瑚集抄」、創元文庫では「夏すがた・二人妻」「溷東綺譚」「腕くらべ」、角川文庫では「溷東綺譚」「腕くらべ」「つゆのあとさき」「ひかげの花・あぢさゝ」などである。「永井荷風集下巻」刊行、中央公論社、六興出版社、創元社から、全集、傑作集、作品集が引きつづき出版されている。老大家カムバックの人気のほどが知れる。依然として浅草出遊、夕食は

月「智恵子抄その後」を、二十六年九月、二十八年一月「高村光太郎選集」を、二十七年六月「独居自飲」を、二十八年二月「みちのこの手紙」を、十二月「ヴェルハアラン詩集」を、三十年「高村光太郎詩集」を刊行。二十九年二月、隨筆「アトリエにて」を「新潮」に載せはじめた。二十七年高村光太郎小品展。二十九年美術映画「高村光太郎」が作成され公開。

荷風は終戦になると帰心矢の如くであったが、東京には住居のあてなく、東京行の乗車券も入手難であり、途方に暮れた。八月十九日には熱海の木戸正氏、東京の相磯凌霜氏・大賀渡氏に手紙を出し、衷情を訴えている。八月二十七日には吉備郡総社町の旅館以呂波に単身移り、同宿の村田武雄氏に乗車券の入手を依頼した。村田夫妻の奔走の結果、乗車券入手。荷風の大変な喜びようは、村田夫妻、菅原夫妻を驚かせ、呆れさせた。共に都落ちし、明石に岡山に流浪、苦勞し、世話をかけた菅原夫妻より一足先に帰京。子供のように東京に帰りたいばかりで、道義もへちまも荷風には考える心の余裕を持たなかつたようである。空襲恐怖症で、子供のように手の焼ける荷風を何彼と世話した菅原夫妻、特に智子夫人は荷風一人の帰京は腹に据えかね、潔癖と節操の人として尊敬していた荷風の、この道義も何もないやり方に裏切られた淋しさと、一代の大家を見損ねていた悲しさとで、がっかりしたり憤激したりしたようである。帰京の途次も荷風は子供の面倒を見る程の手数がかかつたらしい。八月三十一日午後七時過品川駅に無事到着。大島一雄氏は飯寓先、鈴木薬局を転居、窮した荷風は鈴木氏に懇願し一夜を泊めて貰ひ、翌日、大島氏の熱海の飯寓に落つた。七日には「来訪者」の出版契約を筑摩書房と結んでいる。荷風は移動証明がなく食糧の配給もなく、ひもじい思いに終始し、「人より恵まれし木綿浴衣一枚の外家の内にて身につくるものなし」と、衣食住とも不足であったが、熱海周辺を探勝し、米の宮の古祠をたずね、坪内逍遙の旧邸双柿舎や海蔵寺の逍遙の墓へ行つたり、中村光夫氏や相磯凌霜氏から本を借りて読んだ。読書は生涯を通しての楽しみであったから、終戦となり疎開のゴタゴタがなくれば当然である。帰京といつても熱海和田浜の木戸方の大島飯寓先の同居で、衣食住ともまなぬみじめさであった。十一月十五日「冬の蠅」発刊。隨筆「亜米利加の思出」を「新生」に発表。二十一年は大活躍の年である。一月十六日に市川市菅野に大島氏が移居したのに同行、寄寓。松林の多い閑静な所であったが「晩食後小説の腹案をなさんとす、忽にして隣家のラジオに妨げられて歎む。燈下読書執筆

思のまゝならぬ境遇は余に取りては牢獄に異ならず、悲しむべきなり。(一月二十六日)」と、邦楽家大島一家のラジオに悩まされている。この年、戦時中発表のあてもないのに書き溜めておいた作品が一時にドッと発表されて荷風カムバック、荷風ブームを捲き起した。一月には「煎草」を「新生」に、「船子」を「展望」に、「浮沈」を「中央公論」(一、六月号まで連載)に、「暮坪の梅」を「時事新報」に、「谷崎潤一郎氏へ寄する手紙」を「人間」に、一月、「冬日の窓」を「新生」に、翻訳「仏蘭西人の觀たる蘭外先生」を「太平」に、考証「為永春水」を「人間」に、三月、六月に「罹災日録」を「新生」に、四月、「年はゆく」「日の暮」を「女性」に、「絶望」を「展望」に、五月、「夏うぐひす」「ハーモニカ」を「女性」に、六月、「仮寝の夢」を「新生」に、「涙」「ロザさみ」を「女性」に、七月、「問はずがたり」を「展望」に、八月、十二月まで「昭和十六年の日記」を「新生」に、十二月、「草紅葉」を「中央公論」に、それぞれ発表した。「すみだ川」「瀬東綺譚」「腕くらべ」「問はず語り」「来訪者」「ひかげの花」など刊行。四月八日付酒泉空庵宛に「……然し恒産封鎖即親代々の財産御取上になり老後の行末甚だ心細く存忌候。先年銀座にて毎夜お目に掛るやうな世の中には到底なるべき見込もなくこのみ情けなき事に存申候。」と。

「今日まで余の生活は殊の配当金にて安全なりしが」(一月一日)のように「ゆかず苦慮している。親のお蔭で勝手気儘な生活をしておられたのであるが、戦後の情勢では徒食は許されなくなり、打撃を受けた。ケチな生活をして周りの人々を驚かせた。」「二月廿六日、銀行預金封鎖の為生活費の都合により中央公論社顧問職となる」とあるが、原稿料や印税も入り、やや安定したが、荷風は戦中戦後の不自由な生活と、戦後の財産の不安感から、依然ケチな生活から抜け出られなかつたようである。長編小説「さち子」は八十三枚で中断。市川の風物は氣に入つたが、隣室のラジオや、大島父子の三蔵の稽古には悩まされ、読書執筆睡眠もままならず、漫歩し、社寺の境内の樹下や国電市川駅の待合所や某医院の待合所などで時を移したり、読書したりすることもあった。移転先を物色したがすぐには見付からず、九月下旬から船橋市海神町の相磯凌霜氏の別宅に勉強のため通う。環境静寂、執筆を妨げるものなく大いに成果上り、十二月初旬まで殆ど連日行つた。十月「成る夜」「噂ばなし」「靴」「草紅葉」、十一月「羊羹」「畦道」「腕時計」、十二月「指環」を脱稿。十二月九日小西茂也氏宅の二室を借り、翌日から通い

しかし「四方の壁の崩れた虚態に／それでも静かに息をして／ただ前方の広漠に向ふといふ／さういふ一つの愚劣の典型。」とも書く。それは「山林」の「村落村会に根をおろして／世界と村落とをやがて結びつける気だ。」に通う。すっかり敗北感にうちひしがれて立ち上る気力もなく、くずおれてしまったり、社会から逃避してしまおうというのではない。「おれは白髪童子となつて／日本本州の東北隅／北緯三九度東経一四一度の地点から／電離層の高みづたひに／響き合ふものと響き合はう。」(プランデンブルグ)と意欲的でさえある。「田植急調子」なども推敲を重ねて一生懸命作っているのも、山口の小学校落成に「お祝のこぼれ」を贈っているのも、村落社会に根をおろしての意欲のあらわれである。二十一年に分教場でしばしば「美の日本的源泉」などを村の人々に講話したのも同じである。では自己流論?という、何よりも致命的な彫刻制作ができなかったことである。「人体飢餓」の寂しさは「私は何を描いても彫刻家である(自分と詩との関係)」と断言する光太郎にとっては正に流論である。「雪女出ろ。」とさえ思うが、「雪女はつひに出ない。／雪はふぶいて小屋をゆすり、／雪片はほしほしに頬をうつ。／彫刻家は炉辺に孤坐して大火を焚き、／わづかに人体飢餓の強迫を心に堪へる。」と。そして「戦争はこの彫刻家から一切を奪つた。／作業の場と造型の財と、／一切の機構は灰となつた。／身を以て護つた一連の鑿を今も守つて／岩手の山に自分で自分を置いてゐる。」と一切を失つての自己流論であることを語る。離群性のある光太郎であるが、この「人体飢餓」は決定な自己処罰であり、「クログミ」の「こひしいよう」のことばともなっている。しかし、光太郎は「別天地」を出る気持はなかった。「一山に嵐の荒るごと／わが心にも嵐するー／山はもみくちやに総毛立ち、／土砂降の底に小屋がある。」(山荒れる)という「みじめな巢」であるのに。ただ「裸形」の「わたくしの手でもう一度、／あの造形を生むことは／自然の定めた約束であり：：智恵子の裸形をこの世にのこして」がいつも心を占め、二十七年十和田国立公園功労者顕彰記念碑作成を青森県から委嘱されたので、その制作のため帰京したのである。自己流論は終つたのである。「報告」で「仕事が出来たらすぐ山へ帰りませう、／あの清潔なモラルの天地で／も一度新鮮なあなたに会ひませう。」と山小屋の生活の清潔さを思うが、裸形像完成後は健康を害して山へはもどれなかつた。

山小屋では彫刻は作れても小さな木彫程度、光太郎は詩と随想と書に打ち

こんだ。二十六年には詩集「典型」により第二回読売文学賞を受けている。詩の実りはあつたわけである。二十二年、帝国芸術院会員、二十八年、日本芸術院会員に推されたが辞退している。「名譽のためといふことですが／作品以外に何がわれわれにあるでせう：作家はつくればいいでせう／政府は作家のやれるやうにすればいいでせう」(赤トンボ)の心が辞退させたのである。帰京後、故中西利雄アトリエで十和田湖畔にたてる裸婦像の制作をする。智恵子夫人の佛をこめた裸婦像は二十八年十月除幕された。私の彫刻がほんとは物になるのは六十才を越えてからの事であろうとの言通り、宿病のある老体に鞭うって作成、有終の美を成し遂げた。そして「十和田湖畔の裸婦に与ふ」を書き、智恵子夫人を彫刻と詩の両方で記念したのである。

詩作は帰京後は二十七年に「報告」「お正月に」、二十八年に「東京悲歌」「十和田湖畔の裸婦に与ふ」「かんかんたる君子」、二十九年に「記者函」「弦楽四重奏」「新しい天の火」、三十年に「開拓十年」「追悼」「開びやく以来の新年」「お正月の不思議」「生命の大河」などであり、盛んではない。二十七、八年は裸婦像制作にうちこんでいたし、二十九年からは宿病の肺結核が悪化し、療養に努めたからである。帰京して東京が「文化のがらくたに埋もれ」たのを見て「あなたのきらひな東京が／わたくしもきらひになりました」と「報告」し、「お正月では「十年ぶりで粘土をいぢる」感慨を、「東京悲歌」では、「ト、ウ、キ、ヤ、ウはどこにもない。」と悲しみ、山からでてきた詩経の民が東京の現状を「かすとり娯楽雑誌のやう」と見る「かんかんたる君子」、戦時中「報道の戦士をたたふ」を書いたが、「記者函」でも賞讃、日比谷公会堂で久しぶりに聴いた「弦楽四重奏」の感想、「新しい天の火」では原子力を取り上げ、岩手県開拓十周年記念祭のため「開拓十周年」を書き、羽仁吉一の「追悼」を述べ、お正月をよく書く光太郎が「開びやく以来の新年」「お正月の不思議」の二篇を三十年にも書く。最終作は「生命の大河」であるが、「生命の大河ながれてやまず、／一切の矛盾と逆と悪とを容れて／がうがうと遠い時間の果つる処へいそぐ。／時間の果つるところ即ちぬはん／ぬはんは無窮の奥にあり、／またここに在り、／生命の大河この世に二なく美しく、／一切の「物」ことごとく光る。」と遠視した境地が示されている。詩作のピリオドとしての意義を深く湛えている。光太郎は翌三十一年四月二日の暁、ぬはんに入つたのである。二十二年四月「道程」復元版を、十一月歌集「白斧」を、二十五年十月「典型」を、十一

「わたくしの手は重たいから／さうたやすくはひるがへらない。」し、「おれはのろのろいから」（鈍牛の言葉）とのろいが、徐々に心は開けて、「おれはのろまな牛のだが／じりじりまっすぐやるばかりだ。」と宣言する。二十二年六月十五日に完成、「展望」の七月号に発表された「暗愚小伝」二十篇の連作は光太郎の自己批判であり、詩的な告白の精神史である。「家」七篇、幼少年時代の人間形成期に大きな影を落した社会の出来事と家庭の雰囲気語られる。「土下座（憲法発布）」、「ちよんまげ」、「郡司大尉」、「日清戦争」、「御前彫刻」、「建艦費」、「楠公銅像」と。「御前彫刻」と「楠公銅像」は父光銀が、帝室技芸員、東京美術学校教授であったが為の特殊体験である。光太郎の所謂特殊国の特殊な雰囲気がある。かくして明治的倫理的人間は出来上る素地が十分だったのである。「伝説」二篇。「彫刻一途」には、自我の拡充、役頭の姿、「バリ」には近代精神と古い明治的倫理との相剋になやむ「叛逆」が続く。「親不孝」「デカダン」である。デカダンは智恵子の出現によつて救われ、「蟄居」が始まる。「美に生きる」「おそろしい空虚」の二篇である。幸福な「美に生きる生活」―「都会のまんなかに蟄居」し、内部生命を検討し、内部財宝を蓄積した。芸術精進の明け暮れたのである。幸福はつゞかない。智恵子夫人の発病、死。「おそろしい空虚」におちこんだ。そこに戦争が浸透した。モリスト、ヒューマニストの光太郎に戦争に没頭できるはずはない。「二律背反」の生活が展開される。「協力会議」「真珠湾の日」「ロマン」「暗愚」「終戦」と戦争の展開につれて詩は書きつづけられる。「民意が上達できるなら」と協力会議の委員になったが、「協力会議は一方的な／或る意志による機関となった。」ので「官僚くささに中毒し、」たのである。歴史的な「真珠湾の日」にあつては「私の頭脳はランビキにかけられ、／昨日は遠い昔となり、／遠い昔が今となつた。／天皇あやふし。／ただこの一語が／私の一切を決定した。」のである。「家」で醸成されてきた特殊倫理がすべてを決定した。しかし「ロマン」「ロマン」では「ひろい大きな世界のころろが／涙のやうに私をぬらした。」が「さういふ時に鳴るサイレンは／たちまち私を宮城の方角に向けした。／本能のやうにその力は強かつた。／私には二いろの詩が生まれた。：暗愚の魂を自らあはれみながら」と二律背反に悩み通し、「暗愚」の生活をせざるを得ぬ。「終戦」で二律背反は「目を重ねるに従つて、／私の眼か

ら梁が取れ、／いつのまにか六十年の重荷は消えた。：：：不思議なほどの脱却のあとに／ただ人たるの愛がある。：：：いま悠々たる無一物に／私は荒涼の美を誇突する。」と終りを告げるのであり、個に帰る、人間性が発揮される。一切のものから心は解放されたのである。国と家の観念、想念も消えた。フィナレの「伊辺」は「報告（智恵子に）」で、他人による変革を報告し、「山林」では「私はいま山林にゐる。／生来の離群性はなほりさうもないが／生活は御て解放された。／村落社会に根をおろして／世界と村落とをやがて結びつける気だ。：：：美は天然にみちみちて／人を養ひ人をすくふ。／こんなに心平らかな日のあることを私はかつて思はなかつた。／おれの暗愚をいやほど見たので、／自分の業績のどんな評価をも快く容れ、／自分に懐する千の非難も素直にきく。／それが社会の約束ならば／よし極刑とても甘受しよう。／詩は自然に生れるし、／彫刻意識はいよいよ燃えて／古来の大家と毎日に交はる。／無理なあがきは為しようともせず、／しかし休まずじりじり進んで／歩み尽きたらその日が終りだ。」と、素直に反省し、心安らかに歩みつづけるのである。だからこそ「おれは自己流儀のこの山に根を張つて／おれの錬金術を究尽する。」（ブランドンブルグ）とつづいて書きつづる。旧江戸的倫理の中で育つた古風なモラル、米欧で身につけた近代の精神との葛藤、そして叛逆、戦争突入による古風なモラルの復活、終戦後の反省と自覚と再出発とを語る詩二十篇。「山林」で光太郎は、戦時中の意識の脱却をはつきり示したのである。「その時天皇はみづから進んで、／われ現人神にあらずと説かれた。」（終戦）のが転機の大契機であつたかもしれない。「目を重ねるに従つて」、即ち年月の力が光太郎を立ち直らせたのである。「よはひ耳順を越えてから／おれはやうやく風に御せる。／六十五年の生涯に／絶えずかぶさつてきたあのものから／たうとうおれは脱却した。：：：はじめて一人は一人となり、／天を仰げば天はひろく、／地のなるでもかでも珍奇ニテのカオスが深い。／見なほすばかり事物は新鮮、／なんでもかでも珍奇の泉。：：：ともかくおれは昨日生まれたものやうだ。：：：胸のふくらむ不思議な思に／脱却の歌を唄いてゐる。」と「脱却の歌」を書くのである。過去一切から脱却し、赤んぼのような単純な新鮮な想になり、新生を自覚するのである。自省が心をかめば「典型」のことばとなつて「まことをつくして唯一つの倫理に生きた／降りやまぬ雪のやうに愚直な生きさものだ。」と、自嘲というには浅薄であるほど自己をさいなむような正体追及をするのである。

三。鉦山小屋を移築、豊三疊の狭いもの。まむしや狐の跳梁する山林に自己流滴の生活をはじめた。東京で生れ育ち、戦災にあう迄住んでいた全くの東京っ子の光太郎が、智恵子夫人の影響はあつたかもしれないが、知人も居ない東北の山林に隠棲し、なれない農耕自給自足の生活を始めたのは、生来の離群性もさることながら、敗戦のショックの大きさがうかがえるのではなからうか。

山小屋に移る前の「犯すべからず・非常の時」の二篇は戦中の意識の延長であり、移ってからの「武装せざる平和・永遠の大道」も同じである。戦中意識を脱しかけ世情を直視する詩を作つたのは、二十一年一月八日作の「和について」からであろう。つづいて「国民まさに餓えんとす」が一月十日に書かれている。「国民まさに餓えんとす」が一月十日に書かれている。「国民まさに餓えんとす」が一月十日に書かれている。日を送れども／ただ弥縫の外為すべきなし。／斯の如きは社稷ならんや。：：無謀の軍をおこして／清水の舞台より飛び下りしは誰ぞ。／国民軍を信じて軍に殺さる。／われらの不明われらに返るを奈何にせん。」と、怒りをぶちまけている。これも又いつわらざる気持なのである。戦中、正直者が馬鹿を見たので、戦後利己的に行動する者が多くなり、闇行為がはびこり、一般大衆は苦しんだのである。この世相をもたらししたもののへの怒り。どの時点で光太郎は眞実心を離れては詩を書かない。なかなか百八十度の転換は難しかったが、年月が、社会情勢が、あきらかにされた戦中の事実が聖戦とは受け取れなかつたことが、光太郎をもとの光太郎に引きもどした。そしてその成果が詩集「典型」（二十五年十月刊）となつたのである。聖戦のつきものが落ちたのである。

「典型」の序には「……ここに来てから、私は専ら自己の感情の整理に努め、又自己そのものの正体の形成素因を窮明しようとして、もう一度自分の生涯の精神史を或る一面の致命点摘発によつて追及した。この特殊国の特殊な雰囲気の中にあつて、いかに自己が埋没され、いかに自己の魂がへし折られてゐたかを見た。そして私の愚鈍な、あいまいな、運命的歩みに、一つの愚劣の典型を見るに至つて魂の戦慄をおぼえずにあられなかつた。そして今自分が或る転換の一段階にたどりついてゐることに気づいて、この五年間のみのり少なかつた一連の詩作をまとめて置かうと思ふに至つた次第である。これらの詩は多くの人々に悪罵せられ、軽侮せられ、所罰せられ、たはげと書はれつづけて来たもののみである。私はその一切の鞭を自己の背にうける

ことによつて自己を明らかにしたい念慮に燃えた。私はその一切の憎しみの言葉に感謝した。私の性米が持つ詩的衝動は死に至るまで私を駆つて詩を書かせるであらう。そして最後の審判は仮借なき歲月の明識によつて私の頭に永遠に下されるであらう。私はただ心幼くしてその最後の巨大な審判の手に願ふほかない。」と、二十五年六月の時点で、光太郎の辿つた道が示されている。

一年ほど、混沌と虚脱と悔恨と、敗北の精神にうちひしがれながら、なれぬ手に鉄の、野菜作りの独居自炊、時には咯血もし、彫刻のできない「人体飢餓」の環境、夏と冬とで快適でない三疊の山小屋、そこで自己批判しながら、脱皮転換したのである。「小屋にあるのは一つの典型、／一つの愚劣の典型だ。／三代を貫く特殊国の／特殊の倫理に鍛へられて、／内に叛逆の鷲の翼を抱きながら／いたましい強引の爪をいであみづから風切の自力をへし折り、／六十年の鉄の網に蓋はれて、／端坐肅服、／まことをつくして唯一つの倫理に生きた／降りやまぬ雪のやうに愚直な生きもの。／今放たれて翼を伸ばし、／かなしいおのれの眞実を見て、三列の羽さへ失ひ、／眼に暗緑の盲点をちらつかせ、／四方の壁の崩れた廃墟に／それでも静かに息をして／ただ前方の広漠に向ふといふ／さういふ一つの愚劣の典型。」（典型）と自己の正体をかなしく見つめる。「わたくしの手は重たいから／さうたやすくはひるがへらない。」（月にぬれた手）は単なる手ではない。「典型」の自己の正体をみつめるまでには暇がかつたのである。東北の山林と人とは光太郎の心の傷手を浄化した。「雪白く積めり」には「万境人をして詩を吐かしむ。」とか「敗れたるもの卻て心平らかにして」とかの表現となり、「山林」には「強烈な土の魅力は私を捉へ、／撃墜の民のころを今は知つた。／美は天然にみちみちて／人を養ひ人をすくふ。／こんなに心平らかな日のあることを／私はかつて思はなかつた。：：詩は自然に生れるし」とも書いている。光太郎にとつて、東北は新天地、なれぬ野菜作りは新生活、精神も旧きものから脱却して新しくなり、「ブランデンブルグ」「メトロポオル」が書かれ、「田園小詩」が生まれた。「山菜ミヅ」「山のひろば」「山口部落」「かくしねんぶつ」「クロググミ」「クチバミ」「別天地」「岩手の人」「山からの贈物」「この年」と続々書かれた。「岩手山の肩」「ヨタカ」「お祝のことば」「山の少女」「東北の秋」「開拓に寄す」「大地うるはし」「山のともだち」など、太田村にいたからこそその詩が出来ている。

い恋情を擡げられたし、ロザリンとの清純な恋もあった。劇場や音楽会に頻々と出かけ、面白おかしい日々を送って、ただフランスに行きたいばかりの思いにさいなまれていただけである。意に染まぬ銀行勤務をした時もあったが、在米銀行員という一種のエリートであった。みじめな思いの明け暮れではなかったし、フランス思慕の心が、コンプレックスを感じる余裕を生じさせなかつたのかもしれない。フランス料理店に食事に出かけ、フランス婦人の家の下宿し、時には魔窟ものぞき、フランスに行けないだけで、あとは自由自在に振舞っている。在米時代の写真など、貴公子然としたものが残っており、「ジャップ」の声を投げつけられる機会はあまりなかつたのではないか。

終戦と、光太郎と荷風と

先太郎は「一億の号泣」を 八月十六日の午前についた。

繪一たび出でて一億号泣す。

昭和二十年八月十五日正午、

われ岩手花巻町の鎮守

鳥谷崎神社社務所の畳に両手をつきて、

天上はるかに流れきたる

玉音の低きとどろきに五体をうたる。

五体わななきてとどめあへず。

玉音ひびき終りて又音なし。

この時無声の号泣国土に起り、

普天の一億ひとしく

哀極に向つてひれ伏せるを知る。

敵臣恐惶ほとんど失語す。

ただ眼を凝らしてこの事実と直接し、

苟も寸毫の曖昧模糊をゆるさざらん。

鋼鉄の武器を失へる時

精神の純おのづから大ならんとす。

真と美と到らざるなき我等が未来の文化こそ

必ずこの号泣を母胎としてその形相を孕まん。

終戦を迎えた時の状況、心境である。戦中の意識・感情と変らない。時局

に便乗して戦争詩を作っていたのなら、この時点では沈黙するか、掌をかえしたような詩を書いたであろう。真実を傾けて本心で戦争詩を書いていた光太郎に百八十度の方向転換ができる筈もない。「五体わななきてとどめあへず」「敵臣恐惶ほとんど失語す。」と、そのショックの程がうかがえるのである。詩集「典型」の序に「終戦直後に花巻町で書いたものや、ここに来て書いたものでも、その頃の感情の余燼の残つてあるものはふいた。それらのものは、いはば戦時中の詩の延長に過ぎないものだからである。」とあるが、この詩はその代表的なものである。暗愚小伝の「終戦」を書いた時点では、光太郎は転身しているが。大多数の正直善良な大衆と光太郎の姿勢と終戦時は同じであった。

荷風の八月十五日の日乗は「出発の際谷崎君夫人の贈られし弁当を食す、白米のむすびに昆布佃煮及牛肉を添へたり、欣喜措く能はず、……午後二時過岡山の駅に安着す、旣跡の町の水道にて顔を洗ひ汗を拭ひ、休み休み三門の寓居にかへる、S君夫婦、今日正午ラジオの放送、日米戦争突然停止せし由を公表したりと言ふ、恰も好し、日暮染物屋の婆、鶏肉葡萄酒を持来る、休戦の祝宴を張り皆々酔うて寝に就きぬ。」と。谷崎潤一郎を訪ねての帰りの汽車の中が、歴史の瞬間であり、それを荷風は知らず、掃宅後菅原氏から聞き、やれやれと祝宴を張るのである。再々ならず敗戦を予想し、終戦を待望していた荷風としては当然の態度であろう。同じく硬開先のわびしい生活の中で迎えた終戦ながら二人の人がらと、その時候いていた意識、理念の差で、この違いがあるのである。天皇と国と大衆に殉じた光太郎、終戦時のショックと残念無念さは、「ほとんど失語す」のぎこちない表現に尽きている。それは聖戦を信じ、一途に歩んだ一般大衆の心情でもあった。戦争がすみさえずればそれは勝利でも、敗北でもないといった感情ではなかつた。敗戦にあたって祝杯をあげた一般大衆はまずなかつたろう。あくまで個に執し、個に徹した荷風にはそれが出来たし、堂々と日記に記したのである。すでに敗戦を何度か予想し、勝つても負けても戦争さえ終りさえすればと、何度か日乗に書いているし、待望の終戦であつてみれば、祝宴も亦、うなづけるのである。

戦後と、光太郎と荷風と

光太郎は二十年十月中旬に太田村山口の山小屋に移り住んだ。数え年六十

に立てる人の如く狡猾強慾傲慢ならず。深く交れば真に愛すべきところありき。されば余は時事に憤慨する折々必この楽屋を訪ひ彼等と共に飲食雑談して果敢き慰安を求むるを常としたりき。然るに今や余が晩年最終の慰安処は遂に取払はれて烏有に帰したり。悲しまざらんとするも得べけんや。」(十九年)と。聖書浅草と荷風は慰めなくしては生き難い独り身であった。同じく光太郎も独り身であったが、張り切つて、最低にして最高の道を行かうの氣慨の前には慰めを求める必要もなかった。

「十八年十月念二。人間の事業の中学問芸術の研究の至難なるに比して戦争といひ専制政治といふものほど容易なるはなし。治下の人民を威嚇して奴隸牛馬の如くならしむればそれにて事足るなり。ナポレオンの事業とワグネルの策劃とを比較せば思半に過るものあるべし。」に荷風の戦争論が表明されている。学問芸術を戦争の上位においている。光太郎は聖戦なるが故に肯定したが、荷風は戦は戦として受け取り、侵略とも書いてある。だから例えれば山本元帥戦死に際して光太郎は「山本元帥国葬」を書いて元帥を讃えているが、荷風は「頃日南洋に於て山本大将の戦死」とあるのみ。アツツ島守備部隊の玉砕については光太郎は「五月二十九日の事」で「北方敵中皇軍の義烈、ノ美、きはまりなく、ノわれら哭いて心を洗ひ、ノ敢然としていま立ち行ふ。」と心からの哀悼を捧げるが、荷風は「六月初一、山本大将の戦死、つゞいて北海の孤島に上陸せし日本兵士の全滅に因して一部の愛国者はこれ即桶公が遺訓を實踐せしものとなせり。此に反して他の愛国者の言ふ所をきくに戦死の一事が若し桶公の遺訓なりとせば吾人は寧ろ桶公戦死の弊習を論ぜざる可からずとなせり。曾て福沢先生が桶公戦死を以て一愚夫が主人より托せられし財布を失ひ申訳なしとて益首せしものに譬へたりしは、今日に於て其比喩のいよいよ妙なるを知るに足るべし。」と書く。桶公については光太郎は「臣ら一億桶氏とならん」に「『正成ありとだにきこしめさば』と／＼そのむかし聞え上げけん桶氏のすがた／＼いまも外苑に宮居をまもる。ノまこととに臣ら一億桶氏とならん。」と桶公精神に徹する。滅私奉公の光太郎と、個に徹する荷風とで違ふのは当然である。

日本文学報国会に対して、光太郎は詩部会の会長となり「日本文学報国会詩部会は戦時報国の念に燃え、国家の要望に応じて、時を通じての國民士氣昂揚のため、或は健民運動に、或は献機運動に、或は供米運動に會員挙つて熱心に協力してきたが、此月又、軍人援護運動のため軍事保護院に會員の詩

を献上した。此の詩はその一つである。」は「軍人精神」(五月九日作)の前書の一部であるが、この言葉通りに協力した。戦争詩時局詩がそれである。荷風は「五月十七日 菊池寛の設立せし文学報国会なるもの一言の挨拶もな余の名を其の會員名簿に載す。同会々長は余の嫌悪する徳富蘇峯なり。余は無断にて人の名義を濫用する報国会の不徳を責めてやらむかと思ひしが是却て賢子をして名をなさしむるものなるべしと思返して捨置くことゝす。」なのである。消極的反日文学報国会であり如何にも荷風らしい対応の仕方であった。

光太郎は戦争詩時局詩を真実を傾けて発表し、人々に感動を与え、心の指針を与えた。荷風は「民衆一般の趣味及社会の情勢を窺ひ、今は拙稿を公表まべき時代にあらずと思へるなり。」(十一年九月廿六日)、「嗚呼余が文筆を焚くべき日も遠からざるべし。」(十二年一月九日初三)、「軍人間に余が名を知られたるは恐るべく厭ふべき限りなりいよいよ筆を焚くべき時は来れり。」(十五年一月十三日)と書き、同年十月廿五日には「雑誌新聞等に寄稿せざるやうになりて館に半歳ほどなれど、この頃は訪問記者雑誌編輯の来ること殆其跡をたちたり。心やすらかに門前の落葉を掃き得るは何よりもうれしきかぎりと言ふべし。」と。発表のあてはなく創作は書く。十九年十二月廿五日には「文士書買其の他の雑費全く賒を断ちたれば、余が戦時の生活は却て平安無事となりたり。加ふる日々の食事の甚しく粗悪なるも是亦老後の健康には美食よりも却てよきやうに思はるる程なれば、銀行の貯金と諸会社よりの配当金従来の如くならんには、余が老後の生涯はさして憂ふるには及ばざるべし。」と戦時却て平静な面もあったのである。又、「軍人政府の専横一層甚しく世の中遂に一変せし今は：：心の自由空想の自由のみはいかに暴悪なる政府の権力とても之を束縛すること能はず。人の命のあるかぎり自由は減びざるなり。」(十六年正月一日)とも書いた。荷風は徹頭徹尾、自分の心のままに書き、振舞つたのである。心の自由は減びないと信じ、小心なるが故に反軍は日誌にとどめ、消極的反軍の生活を、不平不満の生活をしたのである。自分の好みや考え方に合わぬものは心の中でひどくやっつけ、表だつては回避し、保身の術も心得ていた。光太郎が対アンゴロ、サクソンコンプレックスに対し、荷風はそういう徴候はない。在米中、荷風は家からの仕送りで悠々と暮し、自由自在に振舞つていたから、「ジャップ」として格別のコンプレックスを感じなかったのかもしれない。イデスからは深

氣を呼び集めたることは征露の役よりも却て盛なるが如し。軍隊の凱旋を迎
る有様などは宛然祭礼の賑に異ならず。今や日本全国挙つて戦捷の光榮に酔へ
るが如し。世の風説をきくに日本の陸軍は満洲より進んで蒙古までをわが物
となし露西亜を威圧する計略なりと云ふ。武力を張りて其極度に達したる既
独逸帝国の覆轍を踏まざれば幸なるべし。百戦百勝は善の善なる者に非らず、
戦ずして人の兵を屈するは善の善なる者とは孫子の金言なり。此の兵法の奥
儀は中華人能く心得てゐるやうなり。」（七年四月九日）と戦勝と戦勝を祝
う人々を批判し、「余この頃東京住民の生活を見るに、彼等は其生活につい
て相應に満足と喜悅とを覚ゆるもの、如く、軍国政治に対しても更に不安を
抱かず、戦争についても更に恐怖せず、寧ろこれを喜べるが如き状況なり。」

（十二年八月廿四日、更に「半搗米の飯を出したり。あたりの様子を見るに
皆黙々としてこれを食べ、毫も不平不満の色をなさず、国民の柔順にして無氣
力なること寧ろ驚くべし畢竟二月廿六日軍人暴動の効果なるべし。」（十四年
十二月初二）と。十六年十二月十一日は「日米開戦以來世の中火の消えたる
やうに物静なり。：：六区の人出平日と変りなくオペラ館芸人踊子の雑談亦
平日の如く、不平もなく感激もなく無事平安なり。余が如き不平家の眼より
見れば浅草の人達は兎舞の民の如し。」と書き、十九年三月廿四日は「凡そ
この度開戦以來現代民衆の心情ほど解しがたきものはなし。多年従事せし職
業を奪はれて職工に徴集せらるゝもさして悲しまず。空襲近しと言はれても
亦驚き騒がず。何事の起り来るとも唯その成りゆきに任かせて寸毫の感激を
も催すことなし。彼等は唯電車の乗降りに必死となりて先を争ふのみ。是現
代一般の世情なるべく全く不可解の状態なり。」と自分の尺度に合せればす
べて驚くべく、不可解な状態であった。光太郎は「新天地」の前書に「日本
国民の自覚やうやく深まり、神国日本の信仰やうやく上下の各層に浸透して
きた。もはや外来の思想文化を無批判に渴仰して自ら折しとする者もなく、
外人まがひの生活や風俗に自ら高しとする紳士淑女も居なくなつた。国風の
精神をうけつがんとする心に燃えて国学古学に志す者相繼ぐに至つた。」と
観る。距離が大きい見方である。みる角度も勿論ちがうが。

荷風は「時勢の変遷につれ余の身も亦別人の如き心地するなり、生きなが
らへて恥多しとは誠に吾身のことなるべし」と六年十一月廿七日に書いたが、
この思いは度々日乗に見え「今日は余が六十六回の誕生日なり。この夏より
漁色の楽しみも尽きたれば徒に長命を歎ずるのみ。唯この二三年來かきつゝ

りし小説の草稿と大正六年以来の日誌二十余巻だけは世に残したしと手草包
に入れて枕頭に置くも思へば笑ふべき事なるべし。」（十九年十二月初三）
と長命を嘆きながら、書いたものには未練がある。「明日をも知らぬ身にて
ありながら今に至つて猶用なき文字の戯をなす、笑ふべく憐む可し。」（二
十年六月十日）と述懐する。罹災後とてこの想は切実であつたらう。罹災の
際も日乗は持つて逃げたのである。荷風は十八年十月十二日の日誌に仏蘭西
語訳の聖書を読んでゐることを記し「去年來余は軍人政府の庄迫いよいよ甚
しくなるにつけ精神上の苦惱に堪えず遂に何等か慰安の道を求めざるべから
ざるに至りしなり。邪僻教は強者の迫害に対する弱者の勝利を語るものなり。
この教は兵を用いずして歐洲全土の民を信服せしめたり。現代日本人が支那
大陸及南洋諸島を侵略せしものとは全く趣を異にするなり。」と。荷風なりに
に苦しんでゐる。浅草も心の慰安所であつた。「戦争起りて見ることに聞くこ
と不愉快ならざるはなく：：浅草に來りて無智の群衆と共にこれを見れば一
味の哀愁をおぼえてよし。」（十二年十一月十六日）と。しかし「この頃警
察署にて余及谷中氏の身辺に注意すること頻なる由。：：日本といふ國にて
は一人単独にて事を為せば必ず障礙を生ず。集團の力を借りる時は法を犯
すも亦容易なり。たまたま余の如き一文人が楽屋の生活を觀察せむとするも
亦能く志を遂る能はざるなり。滑稽なる國と謂ふべし。」（十四年八月初三
）でもあつた。その浅草もオペラ館取扱いとなり「三月卅一日。回顧するに
余の始めてこの楽屋に入込み踊子の裸になりて衣裳着かふるさまを見てよろ
こびしは昭和十二年の暮なれば早くも七年の歳月を踰たり。オペラ館は浅草
興行物の中に真に浅草らしき遊蕩無頼の情趣を残せし最後の別天地なればそ
の取扱はるゝと共にこの懐しき情味も再び拗し味ふこと能はざるなり。余は
六十になりし時偶然この別天地を免見し或時は殆毎日來り遊びしがそれも今
は還らぬ夢とはなれり。一人悄然として楽屋を出るに風冷なる空に半輪の月
泛びて路暗からず。地下鉄に乗りて帰らんとて既に店を閉めたる仲店を歩み
行く中涙おのづから湧出で襟巻を潤し首は又おのづから六区の方に向けらる
るなり。余は去年頃までは東京市中の荒廃し行くさまを目撃してまさして深
く心を痛むこともなかりしが今年になりて突然歌舞伎座の閉鎖せられし頃
より何事に対しても甚しく感傷的となり、都會情調の消滅を見ると共にこの
身も亦早く死せん事を願ふが如き心とはなれるなり。オペラ館楽屋の人々は
或は無智朴訥。或は淫蕩無頼にして世に無用の徒輩なれど、現代社会の表面

同じくフランスを愛した光太郎は「無血開城 わが愛するフランスの爲に」を書いているが、荷風のような手放しのものではない知性的なものである。荷風は日夜フランス軍の勝利を祈願し、パリ陥落近しと聞いては食事もますぐ、フランス敗戦を機に作品の発表も中止という極端さである。十六年十二月八日、太平洋戦争突入の歴史的瞬間を、光太郎は「大詔演説」に結晶させた。「昭和十六年十二月八日作。此日の感激は昭和に生きた日本人たるものの終生忘れ難いところであらう。此日恰も第二中央協力会議の第一日目にあたり、筆者も各界代表の一人として末席に列り、詔書の辨説を聴いて恐懼に堪えず、座席に釘づけとなつたまま、此詩を卓上の紙片に書いた。会議の宣言決議文は宮城前にて朗読せられた。」という前書がすべてを語っている。「讀場はもうさつた。ノ重大な決意が千余名をしんとさせた。ノ歴史的な時間は分秒に音なく、ノ午前十一時四十五分、ノラジオは宣戦布告を報じた。……則ち我は此記念の席に坐して此詩を書く。」と感激をかくさない。光太郎も荷風もアメリカの実力は同じく経験しているのである。荷風はその認識に基づいて、負けるままだと放言もし、「日米開戦の号外出づ。」と日乗に記しただけ、戦争に無関係な「浮沈」の稿を起すのである。

戦争指導理念として打ちだされた「神国観」に光太郎は全面的に同調、というより心から信じたものごとく、戦争時局時には神国観に基づく発想がなされている。「記紀」の影響も見え、「日本は神の国」(最大の誇に起つ)と断言しているものはじめ「われら持てり・危急の日に・十二月八日・彼等を撃つ・神とともにあり・われらの道・戦にきよめらる・殲滅せんのみ・突端に立つ・巖然たる毎軍記念日・自分にとつての真実・五月二十九日の事・大決戦の日に入る・第五次ブーゲンビル島沖航空戦・十二月八日三たび来る・『江田島』を読んで・海上日出・新年は見る・昭南島生誕二周年・品性の美・必勝の品性・春晩におもふ・われらの祈・根元の道・米英来る・神州護持・われらの雄たけび・満三年・新春に面す・薫風の如く・勝このうちにあり・犯すべからず・神これを欲したまふ・監視哨・最大の誇りに起つ」に神国観に基づくあからさまな表現がある。「紀元二千六百年・重大なる新年・紀元二千六百年にあたりて・源始にあり・紀元節を迎ふ・撃ちて止まむ・昭南島生誕二周年・わたつみのうた・二千六百年のむかし」には当然の事ながら記紀の影響が見出される。荷風に見当らないのも亦当然だが、神国観はけなしていない。

「聖戦」「八紘一字」という戦争理念も光太郎は疑わず、新年に与ふ・事変二周年・君等に与ふ・紀元二千六百年にあたりて・式典の日に・強力の磊塊たれ・百合がにほふ・危急の日に・十二月八日・新しき日に・沈ませよ・蔭先生・ことほぎの詞・シンガポール陥落・昭南島に題す・大詔演説・彼等を撃つ・夜を寝ねざりし暁に青く・或る講演会で洗んだ言葉・民国の民と兵とに与ふ・神とともにあり・覆滅彼にあり・われらの道・殲滅せんのみ・ピルマ独立・友来る・フイリッピン共和国独立・全学徒起つ・戦に徹す・十二月八日三たび来る・熱鉄烈火の年・新年よ、熱視せよ・新年は見る・昭南島生誕二周年・品性の美・必勝の品性・われらの雄たけび・満三年・無想の剣・勝このうちにあり」などにはっきり示されている。荷風は勿論信を寄せなかつた。「十一月廿五日 外国人には能ふかぎり物を高く売りにて外貨獲得の効果を収めんとしつゝあり。……八紘一字などいふ言葉はどこを押せば出るものならむ。お賤が茶をわかす……」とか「日本軍は暴支腐寇と称して支那の領土を侵略し始めしが 長期戦争に窮し果て俄に名目を変じて聖戦と称する無意味の語を用ひ出した」(十六年)、「近頃の流行言葉大東亜とは何のことなるや。極東の昔言葉なるべし」(十八年)、「一月十日 銀座界限何業によらず閉店するもの日を追うて多くなれり。興亜共榮など云ふ事は斯くの如き荒唐のさまをいふものなるべし」(十九年)、「七月十五日 この頃共榮圏といひ仏教圏といふが如く圏の字大に流行せり。今迄見馴れぬ漢字を使ひたがるは如何なる心にや。笑ふべきなり」(十六年) という風にこっぴどくやっつけている。

戦について光太郎は前述のごとくであるが、荷風は「近年紳士学生等のミソギ女給事務員の參禪の如き皆阿世の行為にして具眼者の屑よしとなさざる所なるべし」(十七年一月初七)とする。

光太郎は大衆の先頭にたったが、荷風は冷やかである。「全市拳つて戦捷の光栄に酔はむとするものゝ如し、思ふに吾国は永久に言論学芸の業士には在らず、吾国民は今日に至るも猶往古の如く一番槍の功名を競ひ死を願ざるの特種の氣風を有す、亦奇なりと謂ふべし」(七年五月四日)と。四月九日には「露店の玩具屋は軍人まがひの服裝をなし、軍人の人形をはじめ飛行機戦車水雷艇の如き兵器の玩具を売る。蓄音機販売店にては去年來軍歌を奏すること毎夜の如し。今に至るも人猶飽かずして之を聴く。余つらつら往時を追憶するに日清戦争以來大抵十年毎に戦争あり。……而して此度の戦争の人

十三年八月春夫が作家として従軍したことに始まるのだし、小心だから表だって反軍をしなかったのだろうし、何よりも自分の生活が大事だったのである。

光太郎は戦時下の乏しい生活を、深い生活倫理で貫いた。「もう止さう。／ちひさな利慾とちひさな不平と、／ちひさなぐちとちひさな怒りと、さういふうるさいけちなものは、／ああ、きれいなもう止さう。／わたくし事のいざごに／見にくい敵を縦によせて／この世を地獄に住むのは止さう。／こそこそと裏から裏へ／うす汚い企みをやるのは止さう。／この世の抜駆けはもう止さう。／さういふ事はともかく忘れて／みんなと一緒大きく生きよう。／見えもかけ値もない裸のところで／らくらくと、のびのびと、／あの空を仰いでわれらは生きよう。／泣くも笑ふもみんなと一緒／最低にして最高の道をゆかう。」(最低にして最高の道)がそれを總括的に示している。「私は最低に生きよう。／そして最高をこひねがはう。／最高とはこの天然の格律に循つて、／千歳悠久の意味と、／今日の非常の意味とに目ざめた上、／われら民族のどうでもよくない一大事に／数ならぬ醜のこの身をささげる事だ。」(百合がにほふ)にも明らかである。だからこそ「草の葉をむしつて鍋に入れ、／配給の米を余してくふ。」(独居自炊)のつつましい生活が出来たのである。「戦は外をきよめ、内をきよめる。／一定、私をすてて一切を洗ひ去る時、われらとともに純真無雜のすがすがしさに勇む。」(戦に徹す)の心境に徹するのである。荷風は戦前戦中戦後、その生活の姿勢は変らない。自己中心に徹し、生活が窮屈になると不平不満であり、それをもたらす軍部はますます嫌いになるのである。戦前戦中の二十年には、前記の稲田や川尻宛の手紙のように、心細さを訴へ、生は死より辛く悲しいとこぼし、度重なる空襲にあつては茫然自失する。光太郎は「死が生よりも生きるとは／生が死を圧倒するのだ。／充ちあふれた生の力が／死を超えて死を死なしめない。／わが事終れるにあらず／わが事無限大に入るのである。／かくの如き生なくして／かくの如き死も亦ない。／自己の力自己の極限を破り、／逆つて精神の微粒界に突入する。／かくの如く人を死なしむるは／天龍人にあつきかな。」(われらの死生)、「経済は利を問はず、／人は安楽をふみにじり、／死は生と異ならず、／時の観念密度を加へて／廿四時は四十八時となり七十二時となり、／一人の力百を集めて千万人の力となる。さういふ不可能の果される年が来る。」(熱鉄烈火の年)と死生一如、さらに超越し

た心境になり、「死を滅すの道ただ必死あるのみ。／必死は絶対絶命にして／そこに生死を絶つ。／必死は狡智の醜をふみにじつて／素朴にして当然なる大道をひらく。：生れて必死の世にあふはよきかな、人その鍛錬によつて死に勝ち、／人その極限の日常によつてまことに生く。：いま必死の時にあひて／生死の区別たる我欲に生きんや。」(必死の時)とまで書く。そして「われら積極の道に立つ。／力無限にして澎湃たり。」(撃つて止まむ)と「勤勞報國」には「よろこび限りなし。／生きてかひある世にいしくも生れ、」と意気が揚がるのである。「戦は人に迫りて未練をすてしむ。／万死の間を生きて／人ははじめて生活の何たるかを知る。／すがすがしいかな／真に戦ひ極むるもの日常。／皇國戦火をくぐつて／いよいよ純にして大ならんとす。」の「戦火」の詩となるのである。すがすがしく純にして大ならんとするのは皇國ではなくして光太郎自身の心だったのである。死生を超越した純にして大なる生、一途に光太郎はつきすんだのである。だから戦災にあつても「すつかりきれいにアトリエが焼けて、／私は奥州花巻に来た。」(暗愚小伝 終戦)と未練がなく二度目の戦災は疎開先の花巻でうけたのだが「其日爆撃と銃撃との数刻は／忽ち血と肉と骨との悲を現じて／岩手花巻の町為に傾く。／病院の窓ごとごとく破れ、／銃丸飛んで病舎を貫く。／この時従容として血と肉と骨とを通び／この時自若として病める者を護るは／神にあらざるわれらが隣人、：：われこれきをきいて襟を正し、」と、「私」がない。泰然自若としているのは光太郎である。終戦後太田村山口の山林に自己流寓の生活をした光太郎だから、戦災にあつても泰然自若なのである。荷風は前述のごとくからしきになり、身の振り方を近視者が考へてやらねばならぬ状態となり三度戦災を受けては、茫然自失、恐怖心から子供のようになつた。しかし、作家魂だけは眠らなかつた。日録はつづけられ、二十二年扶桑書房から「罹災日録」として刊行されたが、見事なものが書かれている。荷風は生活のすべてが、創作につながるのである。

光太郎は戦局の推移を愛国心から熱心に見守り、感激と感銘と感謝とを皇軍に捧げ、憤激を相手方にたたきつけ、二いろ中一いろの詩が刊行された。荷風は戦局などはどうでもよく、戦捷に酔ふ人々を冷たく見、やはりその漁色生活が創作の主材料である。フランスの敗戦にはいたく心を痛めるけれど自国の敗戦については予想しながら、生活の悪化をのみ気にしている。文壇から孤立しながら、文学に生きたように、戦争から孤立し、思ふ儘に生きた。

を戦地の同胞が読んだ。／人はそれをよんで死に立ち向つた。」(わが詩をよみて人死に就けり)なのであつた。荷風は徹底した軍部嫌い、相も変らず銀座浅草玉の井などに遊び、漁色生活も依然、戦争には一切協力せず、防空防火対策さへろくにせず、戦時債券を買わされるとすぐ売り、戦局に目を向けることなく、聖戦や八紘一字には無関心どころか、批判的。戦時下、出版制限のため発表のあてがなくなつても書く感興さえ湧けば書く、と一般大衆とはかけ離れた生活をし、全く気任せの我が道を行つたのである。

光太郎は正式ルートの報道を真と受けとり、戦捷には素直に感激し、戦争の道義性を信じたが、荷風は正式ルートの報道より裏情報をも多く受取つた。銀座浅草玉の井と各種の人々と接触し、裏話を沢山きいている。日乗に街談録、噂話が多く採録されているが、戦争に関したものは皆、軍部及び政府のよくないことばかりである。「十月十五日 この頃は夕餉の折にも夕刊新聞を手にする心なくなつたり、時局迎合の記事論説読むに堪えず。文壇劇界の傾向に至つては寧ろ憐憫に堪ざるものあればなり。」(十五年)、「東京市教育界騒動の噂高し。それ見た事かと言ふやうな心地して愉快禁ずべからず。陸軍主計等の取附沙汰あらばいよいよ痛快なり。当然あるべき筈なれど秘して新聞にはかゝせぬなるべし。」「日米開戦の噂しきりなり。新聞紙上の雑談殊に陸軍情報局とやらの暴論の如き馬鹿々々しくして読むに堪えず。」(十六年)、「(地下鉄事故あり)新聞は例の如く沈黙せり。(三宅島空襲)此事も新聞には出ず。」(十九年)と新聞を信用していない。十六年五月八日には「市中の夕刊新聞この事を記載せんとせしに、招魂社招待の要宴当日の事は其の場所を問はず一切報道することを禁ずる由軍部より差止めになりたりと云ふ。」と風聞の方には心を寄せている。反官権反軍部の基本姿勢と、家を外にして出歩き、外食だし、裏話ばかり耳にし、心をひかれ、借じたようである。自然当局批判が敢てくなる。「今秋満洲事変起りて以来此の如き不逞の風説到處に盛なり、真相の如何は固より知難し、然れどもつらつら思ふに、今日吾国政党政治の腐敗を一掃し、社会の気運を然れどもつらつら蓋武断政治を措きて他に道なし、今の世に於て武断専制の政治は永続すべきものにあらず、されど旧弊を一掃し人心を覚醒せしむるには大に効果あるべし。」(六年十一月十日)と書き、七年の五・一五事件では「珍事なり」と評し、「軍人政府はやがて内地全国の舞踏場を閉鎖すべしと言ひながら戦地には盛に娼婦を送り出さんとす軍人輩の為すことほど勝手次第なるはなし(十

三年八月八日)」「今回の新政治も田舎漢のつくり出せしものと思へばさして弊にも及ばず。仏蘭西革命また明治維新の変などは全く性質と品致とを異にするものなり。(十五年十一月十六日)」「老公も亦襲撃せらるべき人員の中に加へられ居たりし：叛乱罪にて投獄せられし兇徒は当月に至り一人も余さず皆赦免せられたるに非ずや。：彼等は兇徒にあらずして義士なりしなり。然るに怪しむべきは目下の軍人政府が老公の罷去を以て厄介私ひとなきす却て哀悼の意を表し因葬の大礼を行はむとす。人民を愚にするこども亦甚しと謂ふべし。(十五年十一月念七)」「政府はこの窮状にも係らず(註食料欠乏)独逸の手先となり米國と砲火を交へむとす。笑ふべく亦憂ふべきなり。(十六年一月廿六日)」「お米は西洋へ売るから足りなくなるといふ話だが困つたものだと言へり。懇嘆の声か如き隨巷にまで聞かるとやうになりしなり。軍人執政の世もいよいよ未近くなりぬ。(十六年二月念四)」「この待合の客筋には警視庁特高課の重立ちし役人、また翼賛会の大立物あれば手入れの心配は決して無しと語れり。新体制の腐敗早くも帝都の裏面にまで瀰漫せしなり。痛快なりと謂ふべし。」と批判は手放しく私情むきだしになつてゐる。「軍部の専横益甚しく世間一層暗鬱に陥るなるべし。(十六年七月十八日)」「近年軍人政府の爲す所を見るに事の大小に關せず愚劣野卑にして国家的品位を保つもの殆無し。歴史ありて以来時として頗々野蠻なる国家の存在せしことありしかど、現代日本の如き低劣滑稽なる政治の行はれしことは未曾一たびも其例なかりしなり。此くの如き国家と政府の行末はいかになるべきにや。(十八年六月廿五日)」「百年後の今日諸人シヤポンの配給なきを歎く。是皆軍人執政の致すところ恐るべし恐るべし(十八年九月初四)」、遂には「今秋國民兵召集以來軍人専制政治の害甚しいよゝ社会の各方面に波及するに至れり。：今は勝敗を問はず唯一日も早く戦争の終了をまつのみなり。然れども余常に思ふに戦争終局を告ぐるに至る時は政治は今より猶甚しく横暴残忍となるべし。：斯くして日本の國家は滅亡するなるべし。(十八年十二月卅一日)」と終戦をまつ。「軍部の横暴なる今更憤慨するも愚の至りなればその儘捨置くより外に道なし、われ等はその復讐として日本の國家に対し冷淡無関心なる態度を取ることなり(二十年五月初五)」と。日乗から拾ふと数えきれぬほど軍部に対する悪感反感がある。街談録も勿論軍人政府の悪政の噂が多く、局外に立つ者の言の感ずらする傾向もあり、軍人政府嫌いは徹底している。佐藤春夫を敬遠したのは

来浅草公園六区を背景として一編を草せんと思ひ居たりし宿望今夜始めて遂ぐるを得たり。欣喜瀾くべからず。」(二月十一日)と全く自己の境地に安住している。「二人の客(発表時、来訪者と改題)」「ひとりごと」を起稿。「枯葉の記」「雪の日」前半発表。三月二十二日、大島一雄の二男永光を養子とする。小堀杏奴夫妻がその疎開先の信州の高原に荷風の同行をすゝめてゐる。荷風は万一の場合は梅ヶ丘の小堀邸に避難しようとして見している。野辺地瓜丸邸で「冬の宿」の練習演奏会を開催したり、戦中閑の日もあつたが二度の食事も折には粥に醬油をかけてという有様、知人友人からの貰いものなどで乏しい自炊をしなければならぬ日が続くようになった。「近日戒厳令下る時は随意に外出することもむづかしくなるべしと言ふものあり。然る時は平生親しく交りし友人と談話の楽しみを得ることも亦為し難きものとなるなり。余今日まで人と雑談することをさして面白しとせせず。孤独の身を悲しむことも甚稀なりしが今年はいかなる故にや。この三四月の頃より折々無限の悲愁と寂寞とを覚え孤燈の下に孤坐するに堪えざるが如き心地するようになれり。」(七月三十一日)と心境を告白している。九月二十日、前線將兵慰問用に文庫本「駒くらべ」五千部刊。「政府は今年の春より歌舞伎芝居と花柳界の営業を禁止しながら半年を出でずして花柳小説と銘を打ちたる拙著の重版をなさしめこれを出征軍の兵士に贈ることを許可す。何等の滑稽ぞや。」と批判している。「夜半過また警報あり。砲声頻なり。かくの如くにして昭和十九年は尽きて落莫たる新年は来らむとするなり。我邦開闢以来曾て無きことなるべし。是皆軍人輩のなすところ其罪永く記憶せざるべからず。」と軍部へ激しい批判と憤激とを投げつけている。二十年、二月末種田政明に「老生ハ別に行くあても無き身ノ上故万一の場合ハ蔵書と共に麻布の露と消えるより外致方もなき事と覚悟致居候：：米の配給も一人世帯には折々配給なきやうに相成行先いよいよ心細きかぎりには御座候。兎に角この分には桜のさくまで世の中も一変するかと存ぜられ候。」と書き送っているが時局の見通しをつけつゝ身辺を嘆いている。川尻清澤にあても同趣旨の手紙を三月三日送っている。「三月九日 天気快晴、夜半空襲あり、翌暁四時わが偪奇館焼亡す、火は初長垂坂中程より起り西北の風にあふられ忽市兵衛町二丁目表通りに延焼す。余は枕元の窓火光を受けてあかるくなり隣人の叫ぶ声のたゞならぬに驚き日誌及草稿を入れたる手革包を提げて庭に出でたり：：」と。蔵書も何も彼も皆焼失した。大島一雄氏宅へ避難、さらに菅原明朗

氏の住むアパートを借り、そのアパートも五月二十五日に罹災、九死に一生を得た。「日記を入れしホストンバッグのみを掲げ他物を顧みず」避難し、宅孝二氏宅へ行った。再度の罹災でノイローゼとなり、近親者が一方的に方策を講じるより致し方なく、大島一雄氏と菅原明朗氏とが相談し、荷風が望むなら菅原夫妻と行を共にすることにし、菅原氏の郷里明石行に、荷風は「迷惑でなかつたら僕も一緒にいきたい」とのことで、全財産の日誌其他の書類を入れた小カバンと風呂敷包を持って六月二日東京を離れた。菅原家も疎開者で一ぱい、その菩提寺西林寺へ。さらに六月十二日菅原氏の知人池田優子を頼って岡山行、ホテル泊り、旅館松月住まい。その松月も六月二十九日罹災、荷風は行李と風呂敷包を持って避難。七月三日、巖井三門町の武南功方の二階に間借りした。着のみ着のままに他国を流浪、三度目の戦災にあいさすが荷風も氣弱くなつたのか、大島一雄宛「行先ノ事甚心細ク候」と、又「段々行末ノ事を考へ威三郎ノ住居モ知りタクナリ候間若し御存知ナラバ、阿佐ヶ谷カドコカ八王寺農学校ニモ関係アル由、御ツイデ御返事被下度候」と書き送り、母死去の際も威三郎方に母がいたため見舞にも告別にも行かなかつたほど仲の悪かつた弟の居所を知りたいとさえ思うようになっていた。七月二十四日空襲があり、防空壕に避難、警報解除後も荷風は一人寮の中に茫然と坐っている有様、すっかり恐怖症になり、子供のようにならなくなり、菅原夫妻に大層世話になつている。勝山に疎開の谷崎潤一郎から、和紙浴衣現墨等を贈られ大層喜んでゐる。八月十三日、荷風は勝山に出かけ、十五日に岡山に帰る終戦を知った。折よく鶏肉葡萄酒を手にいたので「休戦の祝宴を張り皆々酔うて寝に就さぬ。」と。

漁色の方面は「十九年の夏頃より漁色の楽しみも尽きたれば」までは、戦中ずつと、芸妓、公娼、私娼、女中と多彩である。戦争が身に迫り、戦災にあつたりしてはそれどころではなかつたが、創作の題材のためにそれまでは種々と経験を重ね、銀座、浅草、玉の井、吉原などは行動の場であつた。

以上、ざつと光太郎と荷風の戦中の状態を眺めたので、今更比較などせずともおのずから明白であるが、まとめてみると、戦争を道義的に疑わずに受け取つて、むきになって二いろの詩を書いてきた光太郎、その一いろは戦争協力に力な働きをあげた。「まことをつくして唯一つの倫理に生きた／降りやまぬ雪のやうに愚直な生きさの。」(典型)と反省することく、特殊国の特殊の倫理に生き、「『必死の時』を必死になつて私は書いた。／その詩

開紙英仏聯合軍戦ひ利あらざる由を報ず。憂愁禁すべからず。一（十月十八日）と枢軸側でない心情を明らかにしている。十四年・十五年ともに創作熱稀薄。十五年も浅草玉の井へ出遊。四月二十七日、岩波書店の岩波茂雄、小林勇が「荷風全集」の出版の交渉にきたが、荷風は今後自分の全著作を岩波から出版して貰いたいし、自分の死後に残った財産はフランスへ贈ってくれといったという。又五月十六日の日録には「今日の如き余が身に取っては列国の興亡と世界の趨勢とは縦へ之を知り得たりとするもの益するところもなく亦為すべきこともなし。余は唯智の奥深く日夜仏蘭西軍の勝利を祈願して止まざるのみ。」と。十八日には「号外完克洲戦争独軍大捷を報ず。仏都巴里陥落の日近しと云ふ。余自ら慰めむとするも慰むること能はざるものあり。晚餐も之がために全く味なし。燈刻悄然として家にかへる。」と。自国の戦局には無関心、寧ろ反対、フランスに対しては気をもみ、遺産も寄附したいと思うのであった。全く自分の思い通りに振舞い、かくす所がない。「作品の発表は仏蘭西滅亡を機会として中止致しどうやら江戸開城当時の東京人の心持がしみじみ分り候様な心地致し十年位は一夜にして年とり候様な心地に御座候」（竹下宛書簡）とこれにもフランス一辺倒の姿勢が見える。なお荷風は軍人政府に抗し、玉の井の淫売屋を買取つて身を隠そうとしたが実現しなかったことが、七月二、三日の日乗に記されている。自己中心にしか考える姿勢を持たなかつた荷風は、戦争に協力など出来るはずはなく何にも束縛されることのない自由な心持の生活をしていた。十六年、物質はますます欠乏、独り身の荷風は外食であつたが、食糧事情は悪化の一途をたどり、生活全般に不自由となり、荷風は日乗に軍部に対する憤りをぶちまけている。荷風は江戸明治の学者文人の墓をたずね寺々を廻っている。戦争の埒外に身を置いたのである。「杏花餘香」を中央公論に発表。「今年二月のころ杏花余香なる一編を中央公論に寄稿せし時、世上之をよみしもの余が多年日誌を録しつゝあるを知りて、余が時局について如何なる意見を抱けるや、日々如何なる事を記録しつゝあるやを窺知らむとするもの無きにあらざるべし。余は万々一の場合を憂慮し、一夜深更に起きて日誌中不平憤側の文字を切去りたり。又外出の際には日誌を下駄箱の中にかくしたり。今翁草の文をよみて慚愧すること甚だし。今日以後余の思ふところは寸毫も憚り恐るゝ事なく之を筆にして後世史家の資料に供すべし。」と。小心な荷風の心情が余すところなく記されている。小心でなければ堂々と反戦作家として堂々と書いたで

あろう。「模倣ナチス政治の如きは老後の今日余の身には甚しく痛痒を感じしむることなし。米は悪しく砂糖は少けれど罪なくして配所の月を見ると思へばあきらめはつくべし。」（七月十八日）といった態度である。「防空演習にて近隣の家は皆其準備をなし水桶高帯などを門口に並べたり。本年は防空令違犯にて厳罰に処せらるゝやも知れずと胸中甚不安を感ず。」（十月十五日）、「昼頃隣のかみさん来り隣組にて昨日会議の末先生のところは女中も誰も居ない家故今度の防空演習には義務も何もないものとして除外致しました。……何分よろしくと答え過日人より貰いたる菓を箱のまゝ贈りたり。明後二十二日より世の中暗闇になる由。」（十月二十日）と浅草に浮かれ出る暇はあつても防空の準備もしないし、困にも隣組にも非協力である。好きな為永春水の伝・年譜を作つたり、学者文人の墓参をしたり、食料の買いこみをしたり、「晩食後浅草に往く。煮豆ふくませ雑詰等を得たり。市中の散歩も古書骨董を探るが為ならず飯饑道の彷徨憐れむべし。」と読書をしたり、文章による収入は皆無であつた。十二月八日太平洋戦争に突入の日、発表のあてもないのに「浮沈」を書きはじめた。社会情勢を無視し、埒外にあり、ゴーイング・マイ・ウェイである。在米中、その実力をまざまざと目にしてきた荷風には対米戦は蠟燭の斧を振り上げた感をいだいたのであろう、「アメリカと戦争するなんてバカです。負けるにきまっていますよ。」と銀座の喫茶店で杉野橋太郎氏と雑談中に言つたという。依然銀座浅草出遊。十七年三月十九日「浮沈」完成。戦局はますます苛烈となり、食糧難は深刻となり防火設備をしない事で町会から申し入れがあり、「この後は偏奇館独居の生活むづかしくなるべき様子なり。」という有様。十二月に「冬の夜がたり」「軍服（発表時、勲章と改題）」を書き始めている。浅草銀座へ相変らず。十八年、やむなく防火演習には代人をたのみ、八月八日には大島一雄の二人の子供に偏奇館の片隅に防空壕を掘らせた。モーボン作の翻訳「今日の日本」、小品文「虫の声」「枯葉の記」「雪の日」、音楽映画台本「左手の曲」を書き、小説「踊子」を起草。時流に超然として創作の筆を執つていた。戦後、これらがドットと発表され、荷風ブームを捲き起した。銀座浅草出遊。ビアニスト宅幸二郎で、自作詩音原明朗作曲の「冬の窓」「船の上」を永井智子が歌うのを聴き、「この一日は長かりし余が芸術的生涯に於て最忘れがたき記念となるべきものなるべし。」（十月十八日）と感激している。十九年、「踊子」完成。「燈下小説踊子の稿を脱す。添田暁の四時に至る。数年

たくさんある。」と、暗愚小伝の「ロマン・ロラン」に「私には二いろいろの詩が生れた。／＼いろは印刷され、／＼いろは印刷されない。／＼どちらも私はむきに書いた。」とである。印刷されなかつたのは戦争詩でない、内面の詩であった。「独居自炊」の前書には「かういふ性質の詩集の中へ自己を語る詩を入れるのは憚られるが、斯かる時代の一詩人の生活記録として一篇だけ挿ませてもらふ。」とことわっている。又、二十年八月作の「小曲二篇」、年代不明だが推定により「小曲二篇」の次に、全詩集に収録されている「石くれの歌」も戦争詩でない詩である。「小曲二篇」は花の美しき、木の実草の実はある。又、暗愚小伝の「二律背反」中、「協力会議」「ロマン・ロラン」「暗愚」に見られるような心情の詩であろう。「協力会議」の「霊廟のような議事堂」とか「私の中にある猛獣は、／＼官僚くささに中毒し、／＼夜毎に曠野を望んで吼えた。」と書く心境は国策協力の心情ではない。内面詩は詩集「石くれの歌」としてまとめてあったが、戦災でアトリエが焼けた際原稿が焼失した。これらが残っていれば、戦時中の光太郎の詩業はもつと巾の広い、奥行の深いものとして感銘深く、文学史にも、戦中は戦争協力詩人としての足跡のみが記されることなく、完全な二本の足跡が残されたことであろう。今残されている戦争詩時局詩を見ると戦列の先頭にたつて、国策に協力した印象だけとなってしまっている。

二十年四月十三日夜、戦災にあい、駒込林町のアトリエ炎上。多くの彫刻作品と草稿と書物とを失い、父光雲から譲られた木彫用小刀と砥石だけを持ち出しただけである。東北に疎開、花巻市の宮沢清六方に寄寓、八月十日、宮沢宅も戦災にかゝり、佐藤昌方に移り、終戦を迎えたのである。戦争はこの真心の詩人から殆どすべてを奪い去った。

荷風は満洲事変の昭和六年頃には、お歌に待合「幾代」を経営させ、一方園香と逢い、その結果七月三十一日にはお歌との間も一段落をつけた。銀座に出遊。「紫陽花」「楳物語」「つゆのあとさき」を中央公論に、「夜の車」を三田文学に発表している。「つゆのあとさき」は虚無の心境で虚心胆懐に人生を直視した名作である。流行の尖端をゆく銀座の女給の生活が描かれている。カフェタイガーの女給古田ひさとの交渉から創作されたものである。七年も連日銀座出遊。執筆は意のままではなかった。八年は「文反古」を中央公論に発表、銀座へは相変わらず。九年は荷風の私娼漁りからの作品「ひか

げの花」を中央公論に、「断腸花」を朝日新聞に発表。「井戸の水」「十九の秋」「深川の散歩」「里の今昔」「葛西橋」を書いている。十年、「枇杷の花」を大和創刊号に、つづいて「きのふの淵」を同誌に、「明治大正の花柳小説」を朝日新聞に、「残冬樓記」(深川の散歩・元八まん・葛西橋・里の今昔を収む)を中央公論に発表、銀座出遊。十一年、二月二十四日に遺言状を認めている。二・二六事件の日、荷風は翌日から二十九日まで、都内の様子を見に出かけている。「玉の井」「放水路」を書き、荷風肉筆版「机辺之記」発行、「残春雜記」(鐘の声・放水路・寺じまの記所収)を中央公論に発表。銀座の他、五月頃から滝東玉の井へも出遊。十月廿五日に「福東綺譚」を脱稿。玉の井行きが実のつたのである。十二年「万茶亭の夕」「郊外、町中の月」「西瓜」を中央公論に発表。「福東綺譚」を木村莊八の挿絵で朝日新聞に連載、名作と激賞された。「浅草公園の興行物を見て」を読売新聞に掲載。九月九日母恒子が亡くなり、荷風は度々の重態の報せにも見舞もせず、葬式にも行かなかつた。母は弟の威三郎宅にゐたからである。銀座玉の井浅草に出遊。吉原にも連夜登樓したりしている。私娼玉の井に対し公娼吉原を描こうとの魂胆からである。十三年、日支事変は拡大したが、荷風は戦争には係りなく銀座や浅草や玉の井に出遊。「おもかげ」「女中のはなし」を中央公論に、オペラ台本「葛飾情話」を新喜劇に発表。このオペラは浅草六区のレヴュー劇場オペラ館で上演された。荷風はオペラ館から脚本料上原料を受取らないのみならず、オペラ館全員七十名に一人五円計三百五十円の祝儀を贈った。日録に「意外の成功なり。」と、荷風は大層喜んでゐる。オペラ館へは入り浸りである。映画台本「浅草交響曲」を作ったが、これは戦時下になさわしくない映画であったので、製作は中止された。菅原明朗氏のため、詩「冬の窓」を書き、氏はすぐ作曲したという。荷風はすつかり浅草づいて連日連夜の出遊、戦争はどこ吹く風といった思い通りの生活である。十四年、依然浅草出遊、時局認識せぬのもあまりである。警察も荷風をマタタタするようになった。しかし荷風はオペラ館のみならず常盤座や金竜館へも出入。女優踊子たちと交つた。六月三十日と七月一日には、荷風は煙管一本及び煙筒筒の口金を用いたもの、煙草入金具の裏座に金を用いたものを浅草吾妻橋の上から棄てた。「むざむざ役人の手に渡して些少の銭を獲んよりはむしろ捨去るに苦かず。」と日録にある。金供出を拒み、隠すのでなく捨てたのである。戦争に積極的・非協力的の姿勢であった。むしろ「夕刊の新

／君等の喜怒哀楽は露出して味を失ひ、／人情かならず報いを子期する。／これすべて低くさもしくあさましく／竟に達せざるもの兆候である。／この戦は必ず君等にそれを救へる。／全く類を異にする高き美と深き倫理と、／悠久のながれ日本にありて滅びず、／かかる未曾有非常の撃擧の日にあたつて／その光漸く乾坤の濁霧を破らんとする。／これを知るの日君等に來らば／一朝にして君等の武器は無意義とならう。／君等は今知らずして天孫の族と戦つてゐる。(米英自ら知らず)。日常の此事にけちをつけ、高い倫理を誇示し、優越性をうたう。「この時紅毛鉤鼻のメリケン族、狡智と蛮力と巨富とに驕りて／すにわが前門を犯し、／あはや吾神域にその虎吻を擬せんとす。／神州の臣民いま憤然として起つ。／賊敵摧くべし、悉く水に投ずべし。／神州の尊貴まさきに茲に極まる。」(神州護持)、「日本は神の國、／宝祚は天壤無窮、／この最大の誇に起つ吾等少国民こそ、／いかなる災害をも乗り越えて／必ず敵アメリカに／屈服の白旗を立てさせる。」(最大の誇りに起つ)と敗戦色がきざしては神國思想を前面に押し出した。紅毛鉤鼻のメリケン族、それは根付の國で「頰骨が出て、唇が厚くて、眼が三角で……」と日本人を思いきりやつけた心憎の裏目である。「わが詩をよみて人死に就けり」に「『必死の時』を必死になつて私は書いた。／その詩を戦地の同胞がよんだ。／人はそれをよんで死に立ち向つた。」と自分の暗愚を濟まない思いで書いているが、「必死になつて書いた」と当時の心境が語られている。それは言葉の綾でない戦争詩を作つたことを示している。本當に國のことを考へた真心の発露なのである。その心憎の根柢には、前述の明治的倫理、聖戰意識があつたのは勿論であるが、以上戦争詩時局詩を眺め渡すと、留学中のコンプレックスの裏返しがあるといつていいと思う。昭和十三年作の「地理の書」では「富士は秀でる」と書き、暗愚小伝の帰朝時を語る「親不孝」には「フジヤマは美しかったが小さかった。」の國土輕視の影は、外遊の鮮烈な印象も薄れてゆくと共になくなつたやうで、そこに國策が浸透したのである。

光太郎が聖戰であることを信じていたのは、「……殖民地支那にして置きたい連中の貪慾から／君をほんとの君に救い出すには、／君の頭をなぐるより外ないではないか。／われらの『道』を彼らの利権に置きかへようと、／世界中に張られた網の目の中で／今日も國民はいのちを擡げる。……」(事實二周年)にも、「……今又日本と支那とを喧嘩させて／同じ利をせしめよ

うとしたのは誰だ。……君等の手から東亜を自由にしたかつたのだ。……」(君等に与ふ)にも、「……アジヤの民の眠りをさまし、／アジヤの自立を世界の前に建てよう」と一切かけて血を流してゐるのだ。……いつの日か此の世の人みな天を乘しむに至るまで、／かの止しきを發ふ心を弘めようとするのだ。……」(紀元二千六百年にあたりて)にも、「人類互に扶けよう一家の如きに至るまで。」(式典の日)にも、「……われは義と生命とに立ち、／かれは利に立つ。……東亜の大家族を作らんとするは我なり。……」(危急の日)にも、「……世界の富を壟斷するもの、／強豪米英一族の力、／われらの國に於て否定さる。／われらの否定は義による。／東亜を東亜にかへせといふのみ。／彼等の搾取に隣邦ごとくと腹せたり。／われらまさにその爪牙を摧かんとす。……」(十二月八日)にも、「……結局われは共に手を取る仲間である。／いくらあがいても、／さうならなければ東亜の倫理が立たない。／わが日本は先生の國を滅ぼすにあらず、／ただ抗日の思想を滅ぼすのみだ。……」(沈思せよ蔣先生)にも、「……世界の倫理あらたまり、／人類の秩序また再建せられんとす。……」(ことほぎの詞)にも「……大東亜の新しい日月が今はじまる。……」にも、「……彼は民をくするしめ、／我は民をすくふ。……彼が持つや妖。／我が持つや正し。……」(昭南島に題す)にも「……大義明かにして惑ふなく、／近隣の朋救ふべし。／彼等の鉄の牙と爪とを撃破して／大東亜本然の生命を再現すること、／これわれらの姿なり。……」(彼等を撃つ)にも明確に示されている。「聖戰」(「八絃一字」(大東亜共榮圈)という戦争理念は堅く信じていた。聖戰意識と民族意識の高揚と、日本精神の昂揚と、復古思想神國観は詩の到る所に見られる。これらについては光太郎の米英コンプレックスの裏返しについて引用の詩の中に見出し得るので省略する。

肝腎の「倫理的人間」「明治的人間」「聖戰意識」については、伊藤信吉氏の轍を踏みそうなので、詳述はさける。「倫理的人間」については、高村光太郎ノートその六にも書いた。「明治的人間」であることは暗愚小伝の「真珠湾の日」が明白に語っている。「遠い昔が今となつた。／天皇あやふし。／ただ此の一語が／私の一切を決定した。／子供の時のおちいさんが、／父が母がそこに居た。」と。

注目すべきことは、詩集「記録」の序の「もつと内面に属する詩であるため、この集に収録せられないばかりか、まだ一度も発表せられてゐない詩が

：」と「こころ感激に満ちて」書き、「強靱大英帝国の世界の足場、／鉄で固めたシンガポールをみりみり汲した。」（夜を寝ねざりし晩に書く）と眠れぬ夜が明けて十七年二月十七日の晩に書くのである。フングロ サクソンの驕慢をいやというほど見た光太郎にとっては太平洋戦争精鋭の戦果は小気味のよいものであつたらう。そして「われら民族の持つ美と力とを／奇蹟のやうに増大すべき日が来たのです。」（或る講演会で読んだ言葉）とわが優越性を謳歌する。それは「……日本に神々の慮あつて／世界を一家の安きに導かうと／あの一発の機微をつかんで／まづアジア解放の端緒をひらいた。……」（「民国の民と兵とに与ふ」の言葉ともなり、「……ここに東亜の共栄をめざして支那のあやまてるかの抗日の勢力をまづ懲らさんと皇軍はすでに四年の日をへたり。／抗日支那をあやつりて今なほ漁夫の利を得んと神ながらなる皇國の正義を知らぬ米英は爪と牙との洞喝を太平洋にめぐらしてつひに経済断交す。英は老獯無厭にて米は厚顔はてしなし。……時なるかなや畏くも大詔はくだされぬ。……げにげに神の國にして此のほがらなる覚悟あり。」（真珠湾特別攻撃隊）の言葉ともなる。「神とともにあり」では「大と某々國人入るを許さず」とおのが生れた土地の公園に書き出されて／それでも黙つてゐたのはつい昨日の事だ。／日本一たび起つて米英蘭を撃つ。／大東亜圏内に今かかる横暴の文字無し。……世界の選良と思ひ上つた彼等の夢が／逐はれた彼等を齒がみさせる。……米英蘭の妄執断じて絶つべし。……と、残念無念だつた事実を挙げて、現在を謳歌し、決意を述べるのである。なお、「ひたすら『輪奐』美を誇る文化は低い。／世界最大をよるこぶ文化は幼い。／チヌウリツブ、カンナの炎の前に／一草の白い茶の花が敵として持つ／この高さを人類は知るがいい。／リグレイを噛んで人を憚らぬ／あの無作法を人類は恥ぢるがいい。／富の独占に一切をかける／無残な俗情を人類はするがいい。／東洋は再びおこる。……一切を生かして根源をあやまらず、／まつたく新しい美の理念に／今や世界を導き入れようとする。／彼等に理解なくば彼等は遅れる。／むしろ毛もくちやらな彼等を救ふのが／神々の示したまふわれらの道だ。」（われらの道）と英外相イーデンの、東京入城を実現しなければならぬの言に対して高飛車に出る。「珍滅せんのみ」には「軽蔑するものは軽蔑せられる。／われらを猿と呼ぶ者、野獣のみ。／われら、けだもの、の族を内に有たず、／人ごとく神の兵だ。……彼等の懸とけがれを撃つ。……」とガダルカナル島の米兵わが兵を猿とよび残虐野

くべくの前書があるが、ここにも米に対する憤懣やる方ない心がある。「フングロ サクソンの族みづから驕り、／人類はただ己が指導の下にありとなす。／東亜の民の如き殆ど眼中になく、／われらが深き精神の質を顯ずして／ただ喧々たる実利の理念を追ふ。／かくの如き卑俗の文明をわれらは否定す。」（ビルマ独立）、「再びかのがりがりの過剰文明に／翻雲覆雨の機返しを許さしめるな。／道ここにあり。／美ふかく刻む。／放漫自負の弱者の撃滅、／謙遜自誦の世界の建設、／大東亜の文人墨客願として／一堂に會して各その志を述べて。」（友來る）と第二回大東亜文学者大会開催に當つて、米英との比較において、東亜の優越が書かれてゐる。「フイリツピン共和国独立」では「世界勢力の爪と牙と、／西より来り、東よりのび、／久しいかな、隸屬屈從の年月。／つひに巧に詐り奪ひしアメリカ之を武裝して／その東洋制覇の基地たらしめんとせり。……アメリカの非道極まりなく、／野望つひに日本に及ばんとするに至り、／日本敢然起つて干戈をとる。／東方に道あり、／道おのづから東亜の解放を指さす。／忽ち米英蘭の聲を東亜の地より驅逐し、／東亜共榮世界新秩序の端緒／いま特に成らんとす。」とその独立を期するのである。「所謂文明を誇称する敵はわれらを知らず、／ひとへにただもみつぶさうとする。／われら大御神よりうけたみをしへのまま、／神州の権威と品格を堅持して／一億の民空前の戦に集中する。」（大決戦の日に入る）と二年経つて敵はますます熾烈、決意はいよいよ固い、その時書くことには「文明を誇称」と「神州」とが対比的である。詩集「記録」以後の詩にも勿論、以上のような考え方は受けつがれ発展する。「かくの如くして大東亜の倫理／世界に當為の規範を示す。／これを犯さんとするものは／旧態依然たる利の追求者にして／神の欲する人類浄化の紀元を悟らぬ者だ。／旧態依然たるその米英死力をつくし、／抑揚あくどい英語のやうな妄執さで／謀略、反攻に智慧と兵力とを傾け来る。」（新年よ、熱視せよ）と英語の抑揚にまで文句を付けるにまで至つてゐる。日本の優秀性と、東亜の解放と建設と、米英の傲慢不遜と貪欲と愚劣とがどの詩にも書かれてゐるが、心底にコンプレックスを懐いた昔の無念の思いが滲み出ていたと思われる。遂にこゝも書いた。「君等は緑茶にも砂糖を入れる。／あついで牛乳を入れてかきまはす。／君等の音楽は声をかぎりに絶叫し、／山羊の鳴くやうな喇叭を吹く。／君等の美術は官能の刺激とめどもなく、／あるひは紳士淑女の俗氣を放つ。／君等は魂の黙会を知らず、／ただおのれを主張して知見を争ふ。

部屋に帰つて『彼等』のジャツプは血に鞭うつのだ。一と激しい闘志を燃やしたのである。詩に結晶したむき出しの米國に対する反感はフランスには少し違ふ一エリート的留學でなかつた光太郎が自然に抱かされたのである。

詩に觸れてみると、「正直一途なお正月」には「……劣等人種と彼等のきめた／その劣等が何を意味するかを／天地の前に証しようと思はれて／けなげに立ち上つた民衆の直情を／正直一途なお正月は理解するだろう／頭をなぐるのも善意だといふことを／あのブロンドなら悟るだろうか……」と。優越感で遇された米歐の生活が、この詩の言葉の表現を決定的なものにした。自信を持つてずばりといひ切つてゐるではないか。

「……東亜の人間は眼がさめて来た／今度のいくさきつかけに／君等の額は断ち切られる……われらは黄いろい人種だが／黄いろい人種は古来のんき過ぎたので／善良は馬鹿と見られ／沈黙は無思想と見られ／没法子と自分でも言つてゐたのだ／日本は東亜の末つ子だが／目がさめてから六十余年／臥薪嘗胆といふ奴をやつてゐたのだ／めりめり勉強して待つてゐたのだ／君等の手から東亜を自由にしたかつたのだ／時が来たのだ……」（君等に与ふ）と思ふことが具体的に明白にされてゐる。「パリは珍しくもないやうな顔をして／人間のどんな種族をもうけ入れる。」（暗愚小伝　パリ）とパリの人種の増殖の中にあつて、やはり「ああ、僕はやつぱり日本人だ。」（オークル・ジョンの顔がそこにある。）の意識が光太郎の心をかんでゐたのだが、その時の寂しさは、今、この言葉に結晶したのである。

「……ぼくらはメリケンやうに仕出し屋の／箱弁仕込の時間を持たないから、／ほくちライターの文化に立つに至るのが／むしろいぢばん確かな生活のやうだ……」（ほくち文化）とほくちを礼讃し、耐乏生活の本質發見にもメリケン文化への皮肉が飛び出す。

「無血開城　わが愛するフランスの爲に」には「江戸の無血開城は日本の夜明となつた。／パリの無血開城はフランスの何を物語る。／江戸にはせめて彰義隊がゐた。／パリには唯粉粉の女と太公望とがゐた……」と、「わが愛するフランスの國民よ。」「わが愛するフランス土着の民よ。／政治を超えて今こそ君等が／あのゴオルの強靱さに立ちかへる時だ。」といひながら、冒頭には日本誇示を忘れない。やはりこれも劣等感の裏返しである。

「……有色の者何するものぞと／彼の内心は叫ぶ。／有色の者いまだ悉く目ざめず、／憫むべし、彼の願使に甘んじて／共に我を窮地に追はんとす……」

「……（危急の日に）にも有色人種への米歐の蔑視意識が、「われは義と生命」とに立ち／かれは利に立つ。」という戦争意識になり、「いま神明の氣はわれらの天と海とに満ちる」と書かざるを得ない強さを生じさせる。

「十二月八日」の「記憶せよ、十二月八日。／この日世界の歴史あらたまる。／アングロ・サクソンの主權、／この日東亜の陸と海とに否定さる。／否定するものは彼等のジャパン、／眇たる東海の國にして／また神の國たる日本なり……」と十二月八日の感激を記し、「この世は一新せられた。／黒船以来の總決算の時が来た。／民族の育ちがそれを可能にした。長い間こづきまはされながら、／なめられながら、しぼられながら、／仮装舞踏会まで敢てしながら、／彼等に学び得るかぎりや学び、彼等の力を隔から隔まで測量し、／彼等のえげつなさを満喫したのだ。／今こそ古しへにかへり、源にさかのぼり、／一馮千里の奔流となり得る日が来た。／われら民族の此世に在るいはれが／はじめて人の目に形となるのだ……」（鮮明な冬）と光太郎の好きな冬の讃歌に、米歐への無形の劣等感が歴史の異付けのもとに、日本誇示となり、「鮮明な冬」の「冬」は最後の四行に圧縮され「だが昨日は遠い昔であり、／天然までが我にかへつた鮮明な冬である。」と冬まで特別な意識でとらえられてゐる。光太郎の冬の詩としては異例のものである。「沈思せよ蔣先生」では「今でも彼等異人種の手足となつてゐる氣か。」と呼びかけ、「わが日本はいま米英を撃つ。／米英は東亜の天地に否定された。」と、「十二月八日」と同じ意向が示されてゐる。「シンガポール陥落」には手放しの感激が誰はばからず「シンガポールが落ちた」のくどいまでの繰返しに表現されている。「シンガポールが落ちた。／イギリスが砕かれた……」つひに日本が大東亜を取りかへした。……感謝の思に手がふるへる。……傲慢なアングロ・サクソンをつひに驅逐した。……と傲慢さを身をもつて感じ取つた光太郎の実感がこめられてゐる。だからこそ「昭南島に題す」をつづいて書き「彈弦の獅子つひに斃れ、／日輪いまその上にかがやく……」と誇らかに歌う。

大東亜戦争は拡大し「記録」の時は書かれるが、志向は変わらない。「彼等を撃つ」には「その鉄の牙と爪とを東亜に立てて／われを囲むこと二世紀に及ぶ……利は彼等の搾取して飽くところなきもの。／理不尽の言ひがかりに／東亜の國々ほとんど皆滅され、／宗教と思想との摩訶不思議に／東亜の民概ね骨を抜かる……わが力いま彼等を撃つ……近隣の朋友ふべし……」

時の決意を更に強く更に新たにしてただ前進するのみである。」と、善良な大多数の国民と同じ姿勢であった。嘘のつけない善良な国民は大本營の発表を信じ、聖戦であることを疑わず、國策遂行に窮乏に耐えて全力をあげたのである。光太郎は戦時下の「国民」として自己の真実を尽し、戦争の倫理を貫徹した。この序にも遺憾なくそれがうかがえる。一箇の人間の抑へがたい感動の記録といひ、内面詩はこの際遠慮するということにも、明白に示されている。なお、在米時代を素材にした「白熊」と「象の銀行」が記録の序編に取めたことにも「この集の序編として大正年代以来の詩を若干入れたのも、或る雰圍気の必至の勢を暗示するよすがとせしめたい心からであつた。」と考へが示されている。一ジャップとしての満たされなかつた在米生活から根ざしていることが証明されている。在米時の一ジャップとしての心情は光太郎個人に限らず、普遍性を持つものとの認識からと思われる。だからこそ「記録」特有の五行の前書として「白熊」には「明治三十九年筆者はアメリカ紐育市に苦学してゐた。日露戦争の後なので数年前の排日運動の烈しい気勢はなかつたが、われわれが仲裁して面目を立ててやつたのだといふやうな顔には絶えず出合つた。紐育市郊外ブロンクス公園が筆者の唯一の慰安所であつた。動物は決して『ハロージャップ』とはいはなかつた。」が付けられた。「象の銀行」には「明治三十九年夏から冬筆者は紐育市西六五丁目一五〇番にある家の窓の無い天井裏の小さな部屋に住んでゐた。光線は天井の引窓から来た。市の中央公園が近いのでよく足を運んだ。そこには美術館もあつた。埃及から買取つたオペリスクも立つてゐた。みんな金のおいがしてゐた。」と付け加えた。この二つの詩及び前書については後で触れたい。

詩集「をぢさんの詩」は「この詩集は年わかき人々への小父さんからのおくりものである。……小父さんは、けつきよく、日本国土の美しさと、大君のために生きてかひのあるよきとを、心の愛をかたむけて、くりかへし抒べてきたのである。」の序の示す通り子供へのサービスであり、真心をもつて国を愛する心情から書かれ、編まれた詩集である。

「最低にして最高の道」の「泣くも笑ふもみんなと一緒に最低にして最高の道をゆかう。」と「私」の否定に生活の意義さえ見出しつていなければならない愛国者の姿勢が、戦時中出版の三詩集には明白に見えるのである。

十五年十二月、大政翼賛会文化部長の岸田國士の懇請により、中央協力会議議員となり、十七年六月には日本文学報国会が発足し、詩部会会長に推さ

れている。在野精神のかたまりのような、しかも離群性の強い光太郎がこれらを引き受けたところにも、光太郎の純なひたむきな愛国心のあらわれがある。

伊藤信吉氏の「高村光太郎研究」の「戦争の詩人」としての項には、愛国者の立場、岩手の山小屋での見出しのもと、戦中戦後の光太郎の追究がなされている。「明治的人間」がひそみ、「倫理的人間」が住む光太郎、さらにそれらをひっくりかかすところに、道義的パトリオチズムともいうべき、国家観念や戦争理念が形づくられたとし、光太郎の戦争詩には、道義的意識が濃厚にあらわれていけるとする。自己の真実を尽すといふこの道義的態度から、高村光太郎は国の運命に従ひ、国の運命を自分の運命にする、といふところへ導かれていった。そこに戦時国民の倫理を見出した。それは戦争に処する国民精神の在り方やその生活形態の面と、「聖戦」「大東亜共栄圏」などの戦争理念の面とがあつた、と。伊藤信吉氏の洞察に私も同意する。もう一つ私は戦争詩の中には外遊時の心情の反映が見られると思う。前記の「天日の下に黄をさらさう」それから「正直一途なお正月」「君等に与ふ」「ほくち文化」「無血開城 わが愛するフランスの為に」「危急の日に」「十二月八日」「鮮明な冬」「沈思せよ蔣先生」「シンガポール陥落」「彼等を撃つ」「或る講演会で読んだ言葉」「神とともにあり」「われらの道」「珍滅せんのみ」「ビルマ独立」「友来る」「フイリッピン共和国独立」「大決戦の日に入る」「第五次ブーゲンビル島沖航空戦」「新年よ、熟視せよ」「米英自ら知らず」「神州護持」「最大の誇りに起つ」などを挙げうると思う。

「聖戦」「大東亜建設」という理念が、容易に光太郎の心にしみこんだ根底には、所謂政治的人間や倫理的人間が潜んでいたばかりではない。米欧留学時のコンプレックスの爆発があつたと思う。「記録」の序編に「白熊」「象の銀行」を前書を付けて入れたのにも裏書される。前書及び詩の「動物は決して『ハロージャップ』とはいはなかつた」とか「『彼等』のいふこのジャップに」とかは、米人の優越感と光太郎の屈辱感が示され、「窓の無い天井裏の小さな部屋に住んでゐた。光線は天井の引窓から来た。」「七ドルの給料から部屋代を払つてしまつて／驚のついた音のする金は、少しばかりポケットに残つてゐる。」と、働きながら彫刻の勉強をするのは、やじりみじめで大変であつた。「日本産の寂しい青年」なる光太郎は「白熊の前に立ち尽し、象と二人の仲が好過ぎる」のである。動物園から帰ると「天井裏の

学で心は一ぱいであつた。国の戦争などに心をさく余地はなかつた。

大東亜戦争と、光太郎と荷風と

戦中

昭和六年九月満洲事変が勃発し、十二年七月には日華事変、十六年十二月八日には太平洋戦争へと拡大、二十年八月十五日に終戦。日清戦争時には年若く、日露戦争時には自己充実一途の青年期、しかも開戦から講和まで日清戦争は九ヶ月ほど、日露戦争は二十ヶ月ほど（戦闘は十六ヶ月ほど）であり、総力戦の様相を呈すというほどでもなかつたので、ともに無関心で過し得たのだが十五年に互る戦争、後期には危機感にかりたてられ、国力を尽しての戦争に、壮年期老年期の兩人が境外に居られるはずはなかつた。人がら、境遇などの相違が違つた様相を示し、単に戦争協力詩人とか、反戦作家などと割り切れぬ微妙なものがある。光太郎は戦とともに歩み、荷風は難災するまでは戦の批判者であり、境外に身をおいた。

光太郎は十二年九月に「秋風辞」という戦争詩を初めて書いた。「秋風起つて白雲は飛ぶが、今年南に急ぐのはわが同胞の隊伍である。……」と。日華事変に対する光太郎の志向は明らかである。政府、ジャーナリズムの示し報ずる所に疑うことなく随順した一般大衆の姿を「今はただ澎湃たる熱気の列と化した。」と肯定し、「けふ雁門関は東に向つて砕ける。／太原を超えて汾河渉るべし黄河望むべし。」と国策に全く沿っている。六年から智恵子夫人の病氣はきざし、病勢は衰えず、十三年秋には亡くなり、九年には父光雲も亡くなった。看病と家庭の雑事と精神的打撃とでこの間は芸術上はブランクだった。「おそろしい空虚」に「七年病んで智恵子は死んだ。／私は精魂をつかひ果し、／がらんだ月日の流の中に、／死んだ智恵子をうつつに求めた。／智恵子が私の支柱であり、／智恵子が私のジャイロであることが、／死んでみるとはつきりした。……いつでもからだのどこかにほろ穴があり、／精神のバランスに無理があつた。」と、この恐しい空虚に社会的認識が脱落し、戦争が入りこんだ。素直に簡単に聖戦意識が、国策から、報道から浸透した。留学中の米欧コンプレックスの裏返しとでもいうべきか、日本謳歌が高らかに誇りに書かれた。

「天日の下に黄をさらさう」に「氷を割って川に身をそそぎ／今こそ天日の下に黄をさらさう／万人共にうけた稟性を世界の前に／かくすことなくさ

らけ出さう」と、当時高揚された戦の精神を歌い上げ、白木造りの象徴する日本文化の美を「世に斯くばかり深く切なく勁い美が」といい切り、澎湃たる日本の復古思想が光太郎の心を洗っていることがわかる。

戦争と時局関係の詩は百二十篇（北川太一説）、おびただしい数にのぼる。昭和十七年四月に「大いなる日」、十八年十一月に「をぢさんの詩」、十九年三月に「記録」と、戦争中に三冊の詩集が刊行されている。

光太郎は戦争を道義的に受け取り、一途に「天皇あやふし……陛下をまもらう。／詩をすてて詩を書かう。／記録を書かう。／同胞の荒廃を出来れば防がう。」（真珠湾の日に）と真剣に思いつめたのである。百二十篇の戦争詩と時局詩は、聖戦と信ずる戦争の道義的理解と受容と、一愛国者としての一途な真心とからほとぼり出たものである。「わたくしは大根をぶらさげて街を歩き／此の道美しけれど絶えず窮乏につづく事を思ひ／むしろ心たのしい決意にさびしく笑つた。」（天日の下に黄をさらさう）と戦争生活の見通しをつけながら、ためらうことがない。かくして、三詩集は生まれた。

詩集「大いなる日」の序は「支那事変勃発以來皇軍昭南島入城に至るまでの間に書いた詩の中から三十七篇を選んでここに集めた。ただ此の大いなる日に生くる身の衷情と感激を伝へたいと思ふばかりである。」と記されている。新聞の伝える聖戦の戦果は、疑うことなく受けとれば、「此の大いなる日に生くる身の衷情と感激」という言葉を光太郎に書かせるものを持っていた。それは一般大衆の受容相であり、だからこそ代弁となりその詩は大衆にアピールした。疑うことを知らぬ真正直な純な心が、みまわれ生きるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらく思へばの歌の野蠻とする「大いなる日に生くる身」の表現を、衷情と感激をかくすことなく記したのである。

詩集「記録」の序には「……むろん全記録の意味ではない。いはば大東亜戦争の進展に即して起つた一箇の人間の抑へたい感動の記録といふ方がいいかもしれない。もつと内面に風する詩であるため、この集に収録せられぬいばかりか、まだ一度も発表せられてゐない詩がたくさんある。さういふ生活内面に関する詩は現下の発表機関の絶えて要求しないうところであるから、それも当然である。物質努力共に不足の時無理な事は決して為たくない。この詩集とても果して必ず出版せられるかどうかは測りたい。それほど戦はいま烈しいのである。二年前の大詔奉戴の日を思ひ、今このやうに詩集など編んでゐられることのありがたさを身にしみて感ずる。戦局甚だ重大、あの

で自分の山のような気がしていたので毎年でかけ、絵を畫いたり歌を作ったりした。この年高折周一の音楽講習所に入りヴィオリンを習う。「明治三十八年 二十三歳 四月、新詩社演劇会で作品「青年画家」が上演される。五月、奈良に滞在、仏像調査。このころ、丸善でモオクレエルの『オオギエヌト・ロダン』英訳本を手に入れ、これこそ自分の道だと感じる。水野葉舟の手びきで植村正久を訪ねたりする。九月美術学校洋画科に再入学。岩村透のすすめで渡米のこと決める。」とあり、この度も戦争の影は見当らない。事実、光太郎は戦争には関心がなく、ロダンへの傾斜が強かった。「暗愚小伝」の「彫刻一途」に「日本彫版悲劇の最初の始、日露戦争に私は疎かった。ただ旅順口の悲惨な話と、日本海々戦の号外と、小村大使対ウキッテ伯の好対照と、そのくらゐが頭に残った。私は二十歳をこえて研究科に居り、夜となく昼となく心をつくして彫刻修業に夢中であつた。……日露戦争の勝敗よりもロヂンとかいふ人の事が知れたかつた。」と告白している。日露戦争を知らなかつた学者が存在したそうだから、光太郎のこの対処はまだましな部類といえるかもしれない。彫刻一途にわが道が行けただけ、国を挙げての戦争にしてもまだ余裕があつたようだ。

荷風は当時すでにアメリカに在つた。西遊日誌抄では「二月九日 雪また降る。新聞紙日露戦争開始の電報と共に旅順港外に於ける露艦沈没の記事を掲ぐ。」とあるが、その後は、説書、牧場行、オリンピック港行、セントルイス市万国博覧会行、ミスシッピーの大河との対面、カラマツの学校入学、小説執筆などでこの年は暮れ、三十八年「一月二日 旅順口陥落の報あり。」と戦争に関する記事が見えるのみである。つづいて父久一郎がシャトルに來たがすぐ帰園の事、燈影とピアノに心を寄せ、やがて六月十五日カラマツを去り、キングストンへ、更に紐育に着いたことなどが書かれ、「七月十七日 華盛頓日本公使館にて身許正しき小使一名入用なりとの事を聞込み素川子に其の周旋を依頼したり。これ近日日露講和談判開始せらるゝに付き自然公使館の事務多忙となれるが為めなるべし。」とあり、戦争終結の舞台の真方志望が書かれている。素川子とは従兄で紐育領事館員永井松三である。その周旋で首尾よく公使館小使になり得た。「七月十九日 公使館小使聞届けられし返事ありければ直ちに旅装を整へ正午ペンシルベニア鉄道の停車場を出発す。……日暮首府華盛頓に着し直ちに公使館に赴き当直の書記生某氏に面会

す。……余の仕事は毎朝役人の出勤する前に事務室を掃除し郵便物を調べ電話の取次をなし新聞を取揃へる位の事にて夜間は読書の暇充分なりとの事なり。余は日露談判終了の日までこゝに労働し其の給金と故国よりの送金とを合算して秋風と共に一躍大西洋を越えて仏蘭西に行かんとす。」「七月二十日 書記生某氏に導かれ始めて高平公使閣下に見えし後一等書記官以下館員一同に挨拶申上げ終日欣然として働きたり。」と、それはフランス行の資金の為であり、だからこそ欣然として働けたのであり、裏方として参加する意義などは毫もなかつた。講和そのものに関心があるわけでもなかつた。続く記は、公使館の土塀のハニイサツクルの花の匂い、蜂鳥のこと、華盛頓市街のこと、読書のこと、父がフランス行反対の為の失望落胆、郊外の風景觀賞、イデスとの逢引、フリントン墓地行、二年前の舍路港到着時の回想、ワシントンの墳墓を拜せんとして達せず記念柱下の公園に暮秋の晚景觀賞、などである。「十月十六日 日露兩國講和の談判も既に結了し公使館内の事務も漸く暇多くなりぬ。余は当月一ぼいにて不用なる由申渡されたり。嗚呼樹木多き此都も今は遂に見納めとなりぬるか……」十一月一日 いよいよ此首都を去るべき日も明日となりぬ。」と、何等講和に関する事は書かれていない。開戦を知つた後の日記をたどつてみて思うことに、荷風は故国を離れて大國ロシアとの戦争を知り、国の運命を思うことなどは無い。報道される戦況に一喜一憂することも無い。二月九日と一月二日に旅順の戦況が簡潔に記されたのみで、戦争が荷風と関係を持ったのは、講和の為、公使館が小使入用となり、荷風はフランス行の旅費の一部をかせぐために公使館に住み込んだというだけのこと、講和そのものはどうでもよかつたので、関心は微塵も示されておらぬ。自分のこと、自分の心情の赴くままで、むしろ「戦争さわぎは災にうるさい事です。トルストイ翁は日露どちらへも同情を寄せないとやら、当地の新聞で読みました。」(巖谷小波宛)というのが本音であろう。

「これは博覧会の中のロシアの家です。此の中に露西亜婦人が居ました。毎日ひやかしに行つて大分こんいになりましたよ。国家と個人とはどうしても一致せぬものです。」(西村清山宛)も本音であろう。国家と個人とは一致しないし、戦争はうるさい、関心は文学芸術にのみあり、アメリカの自然風物の情緒に心を動かし、あかず読書しフランス語の勉強をするのであつた。

以上をもつて推せば、兩人ともに日露戦争には重大な関心は持たず、旅順陥落には共通の関心を示している程度に過ぎない。光太郎は彫刻で荷風は文

「高村光太郎」ノート その七

—高村光太郎と水井荷風と(II)—

戦争と、光太郎と荷風と

光太郎、荷風ともに明治以後の日本の国運を賭しての戦争、日清・日露・大東亜戦争に遭遇している。第一次世界大戦もあるが、青島出兵で漁夫の利を挙げたような参戦であるから、この際は考えない。異常事態なる戦争に、芸術家資質を持つものとして、又、芸術家として、どう対処したか。

日清戦争と、光太郎と荷風と

日清戦争当時、光太郎は十二・三、荷風は十六・七。共に十台。

「暗愚小伝」の「日清戦争」には、おぢいさんの話と光公なる光太郎の幼な心が書かれているに過ぎない。北川太一編の年譜によると「明治二十七年十二歳 父は好まなかつたが、母方の遺伝で文学趣味があり、『八大伝』『国史観』など手あたり次第にむさぼり読む。」「明治二十八年 十三歳 三月、高等小学校を卒業。父につれられて京都に遊ぶ。四月、本郷森川町の開成予備校に入り、中学の課程を学ぶ。」と。戦争に関心を持ったような影も感じられない。詩「日清戦争」が、光太郎の心境を写すだけで、この詩を通しては、他愛のない少年心理が感じられるだけである。

荷風は東京高等師範学校附属尋常中学校に在籍、学業には熱心でなく、漢詩作りや尺八に熱中していた。「十六七のころ」に「十六七のころ、わたくしは病のため一時学業を廃したことがあつた。若しこの事がなかつたら、わたくしは今日のやうに、老に至るまで閑文字を弄ぶが如き遊惰の身とはならず、一家の主人ともなり親ともなつて、人間並の一生を送ることができたのかも知れない」とある。「飲策」にも「私は十六歳の時、腺病質の母から遺伝された腺癌を治療するため」とあるように、結核性腺癌のため、下谷の帝國大学第二病院へ入院、荷風の号の由縁ともなったお蓮という看護婦に初恋をした。片恋の悲しみを小説に書き、日清戦争の最中に退院したが、年末

井田康子

に流感に罹り、こちれて翌年三月まで臥床、四月から七月初旬まで小田原の足柄病院に転地療養、七月初旬から九月まで逗子の別荘・十三松荘に滞在、一年ほど学校を休んだ。荷風は病床で手当り次第に読書。真傳太閤記、水滸伝、西遊記、演義三国志、京伝傑作集、八大伝、神桶水滸伝、東海道藤栗毛、牡丹燈籠、鼠小僧、鳥追情史、塩原多助、西国立志伝、ラム・沙翁物語、アービング・スケッチブック等々、尾崎紅葉や広津柳浪の小説、文芸倶楽部など、次々と読んだ。家蔵本はもとより貸本屋から借りても読んだ。九月に登校したが、当然留年であり、新同級生とは親しめず、休み時間には独り運動場の片隅で漢詩や俳句を考え、学業にも不熱心になった。嘉納治五郎が校長で柔道が正科である学校は、病弱な荷風には興ざめで、「木犀の花」にそれが書かれている。日清戦争の匂はどこにも感じられない。

光太郎も荷風も日清戦争には関心が薄く、手当り次第の読書をし、成長途上にあつた。眠れる獅子、大國清に対しての戦争で「暗愚小伝」の「建艦費」に「日清戦争は終つても／戦争意識はますますあがつた。／次の戦争に備へるために／軍艦を造る費用を捻出するのだ。」とあり、日清戦争時の国民の戦争意識はあがつていたと思われ、光太郎も荷風も例外とは思えないが、切実感はなかつた。荷風は病中のこととて、あるいは例外であつたかもしれない。兩人の十代の滄説は後日の兩人の世界を開く道につながる。

日露戦争と、光太郎と荷風と

十年経って日露戦争当時は、光太郎は二十三才、荷風は二十六七才。光太郎は年譜によると「明治三十七年二十二歳 二月号『ステュディオ』でロダンの「考える人」の写真を見て感動する。この年夏 上州赤城山に五十余日滞在。八月には新詩社の人々をむかえ案内する。赤城は、父の産土様